

第4章 2歳クラス児の仲間関係と保育者援助の実態

はじめに

本研究は2歳クラス児がふだんの生活の中で、どのように遊び、クラスメートとどのようにかかわっているか、その実態を明らかにし考察することを第1の目的とする。さらに子ども達の活動を支えたり、促したりしているクラス担任保育者の援助の実態を捉え、考察することを第2の目的とする。

2歳クラス児は運動の巧緻性が高まり、さまざまな運動が可能になっている。歩行が自由になり、走ったり、ジャンプしたり、物を投げたり、物を蹴ったり、それらを組み合わせて動けるようになる。また手指の巧緻性も高まり、小さな玩具を自由に扱えるようになる。さらに言葉を使って簡単な会話が可能になり、想像力、理解力、表現力が発達している。子どもたちは、こうした能力を使って楽しく遊び、興味と好奇心を満たしているのである。集団生活であるから、必然的にクラスメートである相手に興味を持ち、相手のしていることにも興味を持ち、かかわりを持ち一緒に遊ぶようになっていく。しかし、同年齢のクラスメートは、自分と同じように欲求を持ち、それを実現しようとするから、いざこざを起こす。クラスメートとのかかわりは楽しいばかりではなく、ときには腹立たしく感じたり、嫌なこともある。集団の中で気持ちよく生活したり遊んだりするために子ども達は、クラスメートとの上手なかかわり方、仲間関係の持ち方を習得しなければならない。ふだんの生活は、まさに経験を通して仲間関係の持ち方の学習の機会になっているといえよう。クラスメートとのかかわりがなくては学べないし、身につかないのである。また子ども達のそうした学習を支えたり、促したりするのが保育者であり、保育者が行う様々な援助なのである。

そこで本研究では、子ども各個人の個性を捉え、クラスメートとの個人的な関係性を視野にいれながら実態を把握するために、事例によって詳細に検討することにした。

方 法

観察対象者 保育園に就園する2歳クラス児13人（男児6人、女子7人）とクラス担任保育士2人である。

観察期間 平成16年10月21日、11月4日、12月2日と16日、平成17年1月13日と27日、2月10日と24日、3月17日の合計9日間である。

観察方法 参与観察を行い、幼児に話しかけられれば応じ、保育者不在で幼児に困難が生じたとき（例えば、身体攻撃を繰り返し受けるなど）には手を貸した。登園後から昼食前までの約2.5～3時間、主にDVDカメラで観察資料を収集した。保育者との話し合いを通して意見交換したり、幼児の家庭状況や注目すべき出来事などの情報を提供してもらい、考察する際により確実に解釈ができるように留意した。

分析方法 観察資料は、幼児たちの活動や保育者の援助が一段落したところで区切って、以下に示す(a)から(d)までの視点で文章化し、事例にまとめる。それによって子ども達の遊びとクラスメートとのかかわりの実態、保育者援助の実態を示して考察する。なお本研究では幼児名は仮名で記述し、2人の保育士は保育者A、保育者Bと示している。

(a)遊びの場の構築過程

(b)遊びの展開過程

(c)クラスメートとの行為、会話、視線、表情によるかかわり

(d)保育者による行為、会話、視線、表情を通した援助

結果と考察

対象クラスの日課は、8:30～8:45に登園して身支度を整えてから検温する。その後、自発的な活動を中心とする時間を過ごし、9:20に片付け、排泄、おむつを交換する。9:30～9:45におやつを食べ、9:50から11:30の昼食準備開始までの時間は、日によって異なるが、保育者が提案する活動をしたり、幼児の自発的な活動をしたり、散歩に行ったりする。なお朝の自発的な活動の場は、主にクラスの保育室内である。

9回の観察で事例としてまとめたのは116件である。そのうち保育者援助のある事例は69件である。

子どもの仲間関係では、友好的なかかわり、敵対的なかかわり、そしていざこざにおけるかかわり、の3タイプに事例を分けて考察した。さらに友好的なかかわりは、親しくかわる、物を与える、同調して行動する、保育者の援助を受けて展開する遊び、仲間と協力して展開する楽しい遊び、相手に自分の使用物を譲る、代わりの物を探してやる、の7つに分類した。敵対的なかかわりは、悪意で物を奪う、自分が欲しいので物を奪う、相手とかかわる目的で物を奪う、仲間外れ、相手を妨害する意地悪をする、場所を奪う、の6つに分類した。いざこざにおけるかかわりは、ユーモアのある対応、不満を解消できない、気持ちを立て直す、他児を援助してその相手を攻撃する、仲間入りの拒否、の5つに分類した。

仲間関係を調整する保育者援助の実態では不適切と思われる援助、考慮が必要と思われる援助、適切な援助の3タイプに事例を分けて考察した。

以下に、典型的ないくつかの事例（もしくはその一部分）を示しながら、かかわりの実態、援助の実態を考察する。なお事例には、観察の時系列で整理した際の連続番号、観察年月日、観察時間、観察場所を示してある。

友好的なかかわり

親しくかわる 遊びや生活行動の中で親しく、やさしくかわるものである。

事例 2-17 11月4日 2005年 9:09～9:11 保育室――

ナナが歌をうたい、床に寝そべっていると、リカが這って近づいてくる。その様子をナナが笑顔で見ていると、リカは笑い声をあげて側に来る。リカは頻繁に頭を動かしてから、額をナナの肩に付ける。そして額を離して、床にうつぶせになる。ナナは手を伸ばしてリ

カの手を握る。2人は顔を見合わせて立ち上がると、リカはその場で何度かスピンする。

【考察】ナナもリカも出会いの当初から機嫌の良いことが表情から推測できる。リカは積極的にナナに接触を求め、ナナもそれを受け入れさらに自分からも接触している。お互いに親しい関係を求め、仲間として受け入れている。リカが頭を振り、スピンしたのはうれしさ表現であろう。短時間であっても、こうした親しい仲間と意識するような関わりを通してのポジティブな感情経験は、仲間関係の育ちを促している。

物を与える 好意的に自発的に相手に物を与えるものである。

事例 2-3 10月21日 2005年 9:08～9:10 保育室-----

ナナとリカがテーブルに向かいレプリカの食材数個を使い食べるふりをしている。リカがスプーンをナナに渡すとナナが「くれるのね」と言うので、リカはうなずく。ナナは「うわー、うれしい」と笑顔で言い、それで小皿の中をかき回す。ナナが大皿に複数の食材を乗せると、リカが「これリカちゃんの？」と問うと、ナナがうなずくので自分の前に引き寄せる。＜省略＞

【考察】2人は楽しそうにごっこ遊びを進展させており、お互いにそのエピソードの中でレプリカを譲り合う。そうした優しいかわりによって、いつそう遊びが楽しく、うれしいものと感じているであろう。こうした経験が仲間関係を深めていくのである。

同調して行動する 相手の行動をみて、それを模倣して同じ行動するものである。

事例 2-9 10月21日 2005年 9:20～9:21 保育室-----

レオとテツは洗剤計量スプーンを手に持ち、「とう！」「おりゃ！」などと叫んでから走り出す。2人は手をつないだり放したりして室内を走り回る。

直ぐにタク、ケン、カナが2人と同じ言葉を叫び、2人に付いて走り回る。5人がそれぞれ「とう！」「おりゃ！」と時々叫び、走り回ったり、床を転げ回ったりする。テツが「戦おう」と言うと、レオが「おう！」と答える。しかし、走り回ったり、床を転げ回ったりするだけで、しばらくして止める。

【考察】レオとテツはスプーンを武器に見立てて、戦いをするイメージをもったものの、どちらもヒーローであり、架空の悪者を追うだけになっている。2人が叫び、歓声をあげて走り回るのが、他児には楽しそうに見える。そこで3人はそれを真似て参加したものの、戦いのイメージを共有していないので、彼らから新しい行為を生み出すことはない。同じパターンの繰り返しで終わっている。しかし、これをきっかけにしておもしろい遊びを生み出す可能性があり、こうした遊びの意味はある。

事例 2-108 3月17日 2006年 8:55～9:02 保育室-----

タクがブロックをつないで1m程の棒を作り、それを振り回している。それを見たナナが「タクちゃんは悟空になっている」と言う。カナとナナは「えーい」「やー」などと叫び、戦うポーズをする。ユカはブロックで作った棒を持って見ている。

ナナが「私はプリキュア」、カナが「プリキュアダブル」とキャラクター名を言っでは、ポーズを付ける。ナナは「プリキュア、プリキュア、変身」などと言っでは踊り出すと、カナは「プリキュアのパンチ」などと言っでは動き回る。それぞれが考えて行為しているが、ときどきに相手に合わせて行動する。

ナナが言葉を叫んで走り出すと、カナも後を付いて走る。レオも一緒に走り出す。カナが「はい、はい」と言っではジャンプすると、ナナとレオもジャンプする。テツとケンブロックで作った拳銃や剣を持って、それを構えたり、振り回したりして一緒になって走り回る。しばらく続けると、走り回らなくなって止める。

【考察】タクが棒を振り回しているのを、ナナが戦っている場面と解釈し言葉にしたことがきっかけになって、ヒロイン、ヒーローのふりをする活動が始まった。キャラクター名を叫んではポーズを取り、そのふりを楽しむのである。身体攻撃をせずに、言葉とふりだけで進行しているが、相手と共鳴し合っではの行動が刺激となり、さらに行為を創造しているのであろう。クラスメートと一緒に体を動かしてふりをする喜びを共有し、楽しさを満喫したのである。こうした中で楽しい遊びの仲間と感じているはずである。

保育者の援助を受けて展開する遊び 子どもが保育者に援助を求めたり、保育者の提案ではじまったものである。

事例 2-5 10月21日 2005年 9:13 保育室-----

泣いて登園したエリをなだめている保育者 B に、ユカがレプリカの鍋を保育者 B に渡す。保育者 B は「これは何？」と問うと、ユカは保育者 B の顔を見つめるだけで黙っている。保育者 B が「あむあむしていいの？」と問うと、ユカがうなずく。保育者 B は食べるふりをして、「ごちそうさま」と言っでは鍋を返す。ユカは鍋を2、3回スプーンでかき混ぜると、また保育者 B に黙っでは渡す。保育者 B は食べるふりをして、「ごちそうさま」と言っでは鍋を返す。

【考察】ユカは保育者と物のやりとりと食べるふりを伴う簡単なごっこ遊びをした。自分の意図できっかけを作り、人とかかわりができたのである。一瞬ではあるが、楽しかったであろう。保育者は他児の援助で忙しいであろうが、このような幼児の遊びへの参加は大切である。また興味ある遊びが進展すれば、単なる物の奪い合いや、身体攻撃は減るので、保育者の方は注意したりいざこざの仲裁する時間が減るであろう。

事例 2-107 2月24日 2006年 11:01～11:03 保育室-----

保育者 A がブロックで低いゲートを作り、「リンボー、リンボー。はい、くぐって」と言うと、レオ、テツ、エリがくぐる。3人は笑顔で何度もくぐる。ケンとソウタも寄っでは来て加わる。

リカが「よせてー」と保育者 A に言うと、保育者 A が「えーと、クロワッサンください」と言う。リカは自分がいたテーブルに戻り、ブロックを取ると、後に付いてきたレオもブロックを取る。リカが保育者 A にブロックを渡すと「ありがとう。あむ、あむ、あむ。ご馳走様」と言っではブロックを返す。レオも同じように渡すと保育者 A は同様にし

て返す。この間もゲートくぐりは続いている。

【考察】保育者のアイディアによる遊びが展開する。子どもたちにとっては初めての経験であり、他児の様子をみながら自分も挑戦してできるのが嬉しいようである。保育者はリカの遊びを見ていたので、それを生かす方向で対応する。リカは保育者に注意される場合が多いが、こうしたかかわりを持つことで保育者に親近感と信頼感を深めるのであろう。保育者が援助することでおもしろい遊びが展開し、必然的にクラスメートとかかわり、仲間関係が生まれるのである。

事例 2-109 3月17日 2006年 9:04～9:05 保育室-----

子どもたちの多くがブロックをつなげたものを持ち、それを武器として見立てて、それを振り回したり、構えたりしている。しかしエピソードがなく、ふりだけであるし、お互いにかかわることをしない状態である。

保育者 A が部屋に入ってくると子ども達は武器を保育者 A に向けて近づき、「ばん、ばん」と言う。保育者 A は道具を机に置きながら、「おはよー」と言い、直ぐに「ばん、ばん」と言いながら、指で銃を撃つふりをする。

【考察】見立てるものはあるが、きっかけがなくて、子どもたちは活動しない。子どもたちは自分が正義のキャラクターであり、悪役は空想するか、保育者が担当するしかない。こうした活動では保育者が悪役など敵役として参加したり、エピソードを言葉で表現してイメージを共有する援助が必要となる。

仲間と協力して展開する楽しい遊び 子どもたちだけで仲良く、協力して進める遊びである。

事例 2-26 11月4日 2005年 11:15～11:16 園庭-----

大型固定遊具のキッチンコーナーにいるナナとエリが1つのバケツに砂を入れている。ナナがバケツの砂を触って、「熱いよ、ほら」と言うとエリも触り「本当だ」と言う。ナナは観察者に「これソーセージ、今、ここ（に）入っているんだよ」と言う。さらにエリに「今、会社のお仕事でお家に入っているんだよ」と言うと、エリはバケツを指差し、「これね、まだ熱いんだよ」と言う。ナナが「やさしいんだよ」と言う。しばらく2人はカウンター上のレプリカの食器で調理するふりをしている。

【考察】ナナとエリの会話からは、どのようなエピソードを展開しようとしているのか、分からないが、2人はお家ごっこのイメージだけは共有していたようである。それで一緒に調理するふりを進めていた。相手と一緒に遊ぶ仲間として感じているようである。こうした経験を積み、言葉で自分の意図を相手に伝え、エピソードを2人で作っていくようになるのであろう。

事例 2-84 2月10日 2006年 9:01～9:03 保育室-----

カナ、ナナ、レオはテーブルに食材や調理道具を置いて、調理したり食べたりするふりをしている。そこへタクが来て「怪獣退治をしてやる」と大声で叫ぶと、レオが「おー」

と応じてタクを見る。タクが「あっちだ！」と叫び指差してから走り出すと、3人は笑顔で後を追って走っていく。タクが室内のあちらこちらを走り回り、途中で止まって攻撃のポーズをとり「えい、やー」などと叫ぶ。3人は歓声をあげてタクの後を追ひ、模倣して全く同じ行動と発言をする。

タクが床に座ると3人はその周囲に座る。タクがケンを指差し「あっちだ」と言うと、4人は立ち上がりケンを攻撃する。ナナは「私はあーりーぶー、それぞれそれ！」と言いながら両腕を動かし、攻撃のポーズをする。タクが皿でケンの頭を軽く叩くとケンが「いやー」と叫ぶ。2秒ほどの沈黙の後、タクが「いくぞー」と言って元のテーブルに戻る。4人はこのテーブルの所で調理したふりをしては、他に所に行き、ボールを転がしたり、食材を集めたりして戻る、というパターンの行動をしばらく繰り返している。

【考察】調理して食べるふりだけでは新鮮味が薄れて、直ぐにおもしろくなるのであろう。それでタクが提案した怪獣をやっつけに行くことに同意したのである。しかし虚構を共有しても、怪獣役がいないので、しばらくすると行き詰まる。そこで調理するふりと他の活動を組み合わせることを工夫したのである。しかしエピソードを展開するまでには至らない。そうした遊びの進め方を経験するには、この時期では保育者の参加、援助が必要であらう。

事例 2-114 3月17日 2006年 10:36～10:45 保育室-----

子ども達の多くがさまざまな人形を各自で抱きかかえたり、背負ったりしている。ナナはテーブルの上に人形5体を寝かして置き、タオルを掛け布団のように掛けている。カナは大きなウサギのぬいぐるみを背負い、小さな人形3体を抱きかかえている。

保育者 B はパジャマ入れのパンダ人形に手を入れて口を開閉している。子ども達はレプリカの食材をその口に持って行くと保育者 B は人形が食べるように動かし、さらに人形が子ども達の頬を食べるように口で軽く挟む。

タクはナナが寝かしている人形に食材を食べさせるふりをする。その横でナナは調理したり、食べさせたり、あやしたりするふりをしている。アミとリカはそれぞれ各自の人形に食材を食べさせるふりをしている。レオ、ソウタ、ケンが並んで食材を鍋やフライパンで調理するふりをしている。

クラスの子どもたち全員が一人でままごと、もしくは人形を使った遊びをしている。

【考察】2歳クラス期も終わり頃になると、ごっこ遊びが盛んになるのが分かる。人形に対してやさしく、心を込めて世話をしている。人とかかわりを遊びのなかで経験している。今は一人でのごっこ遊びが中心になっているが、会話する力も付いてくる今後は、複数の子どもでのごっこ遊びを展開するようになる。それによって仲間関係の発達が促される。

保育者がやってみせるている人形を使った活動は、子どもに伝承され、彼らの自発的な遊びとなっていく。遊び方の指導であり、大切にしたいものである。

相手に自分の使用物を譲る 自分の使用物を相手が使うのを許容するものである。

事例 2-43 12 月 16 日 2005 年 9:17 保育室-----

カナとレオが並んでテーブルに向かい、レプリカ of の食物を食べるふりをしている。お互いの食物を食べるふりをしても不服を言わない。しばらくするとタクがカナのホットドッグを奪って行ってしまう。するとカナはレオが自分の前に置いた食物数個が入った皿を自分の前に移動させ、食べるふりをする。レオはそれには何も言わずに、その食物を食べるふりをしている。

【考察】レオは所有を主張するより、活動が続ける方を選んだ。ここでカナと言い合いするよりも、穏やかに仲良く進めた方が楽しく、おもしろいからであろう。少し我慢してでも他者とかかわり、同じ活動をするおもしろさを分かっているのである。

代わりの物を探してやる 自分の使用物を欲しがる相手に同型の物を探して与えるものである。

事例 2-76 1 月 27 日 2006 年 9:08 保育室-----

ナナがすりこぎ棒をカナに差し出しながら「ごまった、どうぞ」と言うと、カナは「いやー」と言って受け取らない。そこでナナはリカに「ごまった、どうぞ」と言って棒を渡すとリカは受け取る。リカは直ぐに「ナナちゃん、次これちょうだい」と言いながらナナがレプリカを並べている場所に行き、「これ」と言ってすり鉢を取る。ナナが「だめー」と拒否するが、リカはすでに手に持った鉢の中にすりこぎ棒を入れている。

ナナは急いで別のすり鉢を見つけてきて、「同じだよ、あげる」と言って同型のすり鉢をリカに差し出す。リカは持っていたすり鉢を元の場所に置き、ナナから受け取る。リカは「ありがとう、ナナちゃんばいばい」と言うと、ナナも「ばいばい」と言い、リカは元の所に戻る。

【考察】単に拒否するだけでなく、自発的に代替えを探して渡すという優しさをみせている。そのときは一緒に遊ぶことはないのであるが、相手を思いやる心情が育っている。これを見て、自分勝手な行動の多いリカも学ぶであろう。こうして人を思いやる、人に優しくすることを覚えるのであろう。

また同じ鉢なのに、ナナは自分がそれまで使っていたものをリカに与えるのを拒否した。他者からは同じに見えても使っている当事者には違う意味が込められているであろう。大人の視点で、「同じだから」と考えるは大人の身勝手な判断と分かる。

敵対的なかわり

悪意で物を奪う 相手の使っている物を奪うが、それで遊びはしない。単に意地悪で相手から物を取るだけのものである。

事例 2-1 10 月 21 日 2005 年 9:00 ~ 9:02 保育室-----

ナナが使っている小皿 3 枚を、力づくでカナが奪い取ると、ナナが大きな泣き声で抗議する。それを見ていた保育者 B が「泣くんじゃなくて、やめてって言うの」と言うと、ナナはカナに「やめてー、返して」と大声で言う。カナが「だめー」と言い返すと、保育

者 B は「だめって言わずに返してあげれば」と言う。するとカナは1枚だけナナに渡す。

しばらく後、ナナがテーブルにプリンやその他の食材のレプリカを並べている所に、カナが近づき、プリンを黙って手に取る。ナナは調理するふりをしていて、それに全く気づかない。するとカナはプリンを投げ捨てて、別の場所に行く。

【考察】カナはナナの使っている物に興味はあるというよりも、物を奪って、ナナを困らせたり、泣かせたりするのをおもしろがっている。自分一人では遊べない、遊び方を知らないで、ナナに意地悪するのである。一方のナナはレプリカを使って見立てたり、ふりをしたりして遊んでいて、それがおもしろい。それでカナには特に興味を示さないようである。

自分が欲しいので物を奪う 相手の使っている物が欲しくなって奪ったり、奪おうという
いろいろ試みるものである。

事例 2-18 11月4日 2005年 9:20～9:22 保育室-----

タクがケンの持っていた玩具を奪おうとして揉み合いとなり、タクがケンを押して泣かせる。それを見ていた保育者 A はタクに非があると叱り、謝るように促す。タクは、床にうつぶせになって泣くケンの頭を黙って撫でる。ケンは顔をあげてタクをみる。するとタクはそこから離れて自分の玩具のある場所に座る。

ケンは立ち上がってタクに近づきタクの背中を軽く叩くと、タクは「痛い」と叫ぶ。タクは直ぐに立ち上がってケンの背中を叩こうとするので、保育者 A がタクとケンの手を押さえる。保育者 A はケンと正対して「さっき、タクちゃんはケンちゃんにごめんねしたでしょう。そんなにいつまでも怒ってないの」と言って2人の手を離す。ケンは泣き続けるがタクを攻撃しようとしめない。しばらくするとケンは泣きやみ、上履きを履く。

【考察】月齢の高いタクは、気に入った玩具を他児が持っている腕力でしばしば奪っていた。これまでもケンはその被害者になることがあった。そうした経緯があったし、言葉での謝罪もなく頭を撫でただけでは気がすまなかったのであろう。またケンはタクを軽く叩いただけで、それを痛いと呼んだのはタクが被害者の立場を主張するためであろう。ケンがしばらく泣きやまなかったのは、彼には納得のいかない解決であったからと推測する。なぜならタクが頭を撫でたから、それで許さなければならないというのはケンには不合理なのである。保育者はケンが攻撃するのを認めなくても、これまでの経緯を考えると、むしろタクにケンはまだ怒っている、と伝えた方が適していたと考えられる。

事例 2-102 2月24日 2006年 10:42～10:45 保育室-----

リカは先ほどまで自分が使っていた L 字型に組んだブロックを、レオが持っている気づくと、直ぐに「貸して」と頼む。レオは「だめよ」と拒否すると、リカは「リカちゃん、さっき三つ持っていたの。だから貸して」と説明する。レオが歩き出すと、リカも付いて行き「貸して」と言う。レオは返事をせずに、次第に走り出す。リカは「あーん貸して」と言いながら追うと、レオは「だめー、だめー」と逃げる。リカがレオを捕まえると2人とも床に座り、リカが「貸してー」と叫ぶ。レオは「だめ、だめ」と泣き声をあげ、

保育者 B と保育者 A の方を向いて「取られる、取られる」と訴える。保育者 A は「じゃあ、そう言いな。先生に言わないで」と言うと、リカがレオから手を放す。

リカは L 字型ブロック二つをレオの前に出し、レオが一つを取ると、直ぐにリカは取り返す。レオは持っているブロックから L 字型ブロックを外して床に置き、棒型のブロックを握りしめる。リカが「いらないの？」と確認するとレオはうなずき、立ち上がって行ってしまふ。リカが L 字型ブロックを三つ持って立ち上がるのを保育者 B と保育者 A が見ている。三つ持っているのに気づくが何も言わない。

リカはユリの側に行き、「一緒に遊ぼう」と言って隣の椅子に座ろうとするが、やめて、ブロックをもった手を後に隠し、ユリから見えないうようにポケットに入れる。そして移動して、ブロック収納コンテナの中を探す。

【考察】リカはレオにブロックをくれるように理由を説明し懇願するが、拒否されると力づくで奪おうとする。しかし保育者の介入が気になり、実際に二つ持っていることを示し、三つ目が欲しいと伝えようとした。レオをねらったのはカナより気の弱く手に入れやすいし、保育者の目に付きにくいと予想したからであろう。レオの方は、保育者に救援を求めても助けを得られないし、リカの執拗な要求に諦めたと思われる。保育者はカナには味方をしたのに、なぜレオには味方しないのであろうか。それもカナはブロックを奪っており、それに比べ、レオが所有を主張する方が正当と考えられるのに、である。

リカはブロック三つを持っているから保育者の目が気になったようだ。それでおとなしいユリに接近して2人で三つを使うふりを見せようとしたのであろう。しかしここでユリがブロックを欲しいというと面倒になると気づき、思い直して一人で遊ぶことにしたのである。リカは気に入ったものをいくつか持っていたいが、いつ保育者にそれを見咎められて取り上げられるのか分からず気が気でない。それで安心して他児とかかわって遊び難いと感じるのであろう。保育者がいざこざを公正に処理してくれれば子どもたちは安心してクラスメートとかかわり、仲間関係が育ちやすくなることが分かる。

事例 2-113 3月17日 2006年 10:31～10:35 保育室-----

ナナが犬のぬいぐるみを背負っているとタクが駆け寄り「ナナちゃんのわんちゃん泣いているから、タクちゃんが持ってあげる」と言う。ナナが「泣いてないよ」と言うが、タクは「泣いているよ、泣いているよ」と言い続ける。ナナが「泣いていない」と強く言うが、タクは「わんちゃん泣いている」としつこく言い続け、ぬいぐるみに手をかけようとする。ナナは頻繁に体を動かし、移動してタクの手がぬいぐるみに届かないようにする。タクはナナの後を追ひ、背中を叩き押し始める。

ナナが「先生」と言って保育者 A に駆け寄ろうとすると、タクはそれを妨害するものの、ナナは保育者 A の所へ行く。ナナは「あのね、わんわんが泣いているよってタクちゃんが言うの」と訴えると、タクが「わんわんが泣いているから持ってやるの」と言う。保育者 A は「今、ナナちゃんが大事、大事しているんだよ。タクちゃん別のを見つけてきてください」と促すとタクは「なかった」と答える。保育者 A が「それじゃあ、順番にね、後で貸してねってお願いしておいたら」と言う。タクは何も言わないが、ナナが「後でね」と言う。タクはナナの後を付いて歩くので、ナナが「後で貸してあげるからね」と

言う。タクは立ち止まり下を向いて黙っているが、しばらくすると玩具収納コンテナを探しに行く。

【考察】タクは、気に入った玩具を他児が持っている腕力でしばしば奪っていたが、そのやり方はすぐに保育者に注意される。そこでタクはごっこ遊びの文脈を使って、巧みにぬいぐるみを奪おうとした。しかしその悪巧みは予測され拒否されると暴力を使って奪おうとした。そうした場合、子どもの心の支えとなるのは保育者の存在であることが分かる。この保育者は先に使っているナナの権利を認め、タクに我慢をするように言うし、ナナも譲らないのが当然と思っている。しばらくタクは不満そうにしているが諦めた。これは人間社会の道理である。玩具を使っている他児の様子を見た子どもがそれを欲しがったら、先に使っていた他児に譲歩させるという指導はふつうは誤りであろう。それをしないと、欲求不満耐性が育ちにくいし、相手が譲歩しないと腹を立て、攻撃してしまうようになる。幼児教育では子どもの欲求を基本的には満たすように援助するが、基本をはき違えてはならない。幼児の世界でも基本は人間社会の道理なのである。

事例 2-116 3月17日 2006年 10:57～11:04 保育室-----

タクが「ナナちゃん、わんわん肩車しよう」と言って、テーブルに寝かしてある犬のぬいぐるみを持って肩車する。ナナは「タクちゃん、それナナの。ストップ、ストップ」と言いながら、両手を広げてタクの前に立ちふさがる。タクが「肩車しているんだー」と言うが、ナナは「だめ、ナナの。返して」と言って取ろうとするが、タクは手を放さない。ナナは「先生にいうわ」と言って保育者Bに駆け寄り、「先生、ナナの取った」と訴える。保育者Bは「返してって言えば」と言う。ナナは「返して、返して」と要求するとタクは「だめ」と拒否する。これを5回繰り返すと、タクはついに「じゃあ、いいや」と言って犬のぬいぐるみを投げ捨てる。ナナはそれを拾ってテーブルに寝かしてタオルを掛ける。タクはその隣に寝かしてある犬の人形を触っているが、直ぐに払い落とす。ナナはそれを拾ってテーブルに寝かせ、布をかけてやる。お片付けの時刻となる。

【考察】タクがナナのぬいぐるみを奪おうとする再度の試みである。タクはここではナナの遊びの文脈の中で、犬を肩車して遊んでやっているという。しかしナナは遊びの中でぬいぐるみを共有するつもりはない。それは一度タクに渡してしまえば、タクが勝手に使ってしまう、自分はもう使えないと思っているからであろう。それはこれまでのタクの行動からの判断であろうし、自分の遊びを守るために当然であろう。

このような遊びの中で、他児とのものの貸し借り、その同意、拒否をしながら、他児を知り、自分の気持ちを知り、他児との関係を作っていくのである。

相手とかかわる目的で物を奪う 相手に注目して欲しい、相手と一緒に遊びたいという意思表示として、相手が使っているものを奪うものである。

事例 2-22 11月4日 2005年 9:29～9:34 保育室-----

ナナが泣き声を出しながら、カナを追い上着のフードを引っ張る。カナは「だめー」と叫んで、テーブルにうつ伏せになる。保育者Aが「だから、お話で解決しよう」と言う

と、ナナは「カナちゃんがー」と答える。保育者 A は「カナちゃんが何？」と聞くとナナはカナが持つレプリカのケーキを指差す。カナはその間に走って逃げようとするので、保育者 A が「カナちゃんがケーキ取ったって、ナナちゃんが言っているよ」と言う。カナは立ち止まり、ナナにケーキを投げ返すと、それがナナの体に当たる。保育者 A が「あー投げてよこした」と言う。ナナはそれを拾ってカナに近づくが、2人とも話をしない。

ナナは先に自分が数個のレプリカのケーキを入れた皿に、さらにケーキを入れる。ナナは他児の活動を注目し、皿から少し離れる。それを見たカナがその皿を持って逃げると、気づいたナナは「あー取った、だめー」と叫んで、取り返そうとする。カナが逃げると、ナナは床に座り「あー、やだー、だめー」とカナに向かって叫ぶ。

カナは 2m 程離れた床にその皿を置き、別のケーキを皿にナナに投げつけ、さらに皿をひっくり返して中にあったケーキを足で蹴って散乱させ、そこを離れる。ナナは直ぐに皿とレプリカを拾う。カナは床にあるレプリカをさらに蹴る。ナナは元の場所に皿とレプリカを置くと、両腕を胸の前でクロスさせ、カナの方に向かい「ばつばつばつばつ」と言う。するとカナはナナの側に来てナナの皿からレプリカを取って投げる。ナナが「怖くないよーだ」と言うと、カナが「あー」と脅すように叫ぶ。またナナが「怖くないよーだ」と言うと、カナが「あー」と脅すように叫ぶ。ナナはカナに近づきカナの肩を軽く叩くと、直ぐにカナはナナを何度も叩く。気づいた保育者 B はカナの手を押さえて「何で友だちをそんなに叩かなければだめなの。ほら嫌だっていっているよ。何したの？」と言うが、カナは逃れようとするだけで返事しない。

保育者 B が保育者 A にこの経緯を聞くと、保育者 A はナナが使っていた玩具をカナが取ったようだと言明する。保育者 B はナナに自分が使っていたのかを確認してから、カナに「ナナちゃんが持っていたんだって、貸してちょうだいって言ったの？」と問うが返事しない。保育者 B がナナに「貸してねって言ったの？」と聞くとナナはうなずくので、「じゃあ、あげたの。じゃあ、けんかしないでいいじゃん、そうでしょう」と言う。ナナは不審な表情をするが黙っている。それに気づかない保育者 B は「カナちゃんも貸してもらったら、ありがたいですよね。それなのに叩くのは変だよ。友だちを叩くのは間違いだから、それはごめんねしよう。ごめんなさいは？」と促すが、2人は黙っている。保育者 B が「ごめんね」と言うと、2人はそれぞれに「ごめんね」と言って、少し頭を下げる。

保育者 B はナナに「もうしないでねって言うだよ」と言うと、ナナはカナに向かってそう言う。保育者 B はカナに「ね、もうしないんだよ。よかったね、玩具借りられてね。仲良く遊ぶんだよ、ね」と言う。その間、カナは保育者 B にもナナにも顔を合わせないようにしている。保育者 B は「けんかしないで、遊ぶんだよ」と言って、離れる。

カナはナナが皿を置いた所に座って、「一緒にやろう」とナナを誘うと、ナナはうなずき側に座る。カナはレプリカのケーキや食材を取ってきては皿に入れると、ナナは笑顔で「うわ、うわ、うわー」と歓声をあげ、拍手する。ナナは皿に食材を並べている。カナはフライパンを手に持ち、そこにピザを入れ、「ねえ見て」と言って、それを上に放って裏返す。2人とも笑顔でやっている。お片付けの声がかかると2人は直ぐに片付け始める。

【考察】カナがナナの使用する玩具を奪ったり、ナナの活動を妨害したりしたのは、単に

意地悪をするのではなく、一緒に遊びたいという意思表示であつたようである。ナナはそれが分からないから反撃してしまった。仲裁に入った保育者がナナに「貸してねって言ったの？」と質問したが、その主語の「カナが」が発声されなかったため、ナナは「自分が返してねっていったの？」のと問われたと誤解したのであろう。その後の言葉による仲裁は的外れになっているが、それでも叩くのは間違いとの説明は2人とも納得したようである。しかし、カナには先に手を出したのは、ナナという気持ちがあり、心からの謝罪をしないという意思表示としてアイコンタクトを取らなかったと推測する。カナは、このいざこざを通して、他児の活動を妨害すると反感を生み、一緒に遊べないことを経験したのである。他児と遊ぶには、相手が受け入れるような、喜ぶような行動を取るのが良いと気づき、後半は、その方向でかかわってみたのであろう。もちろん、この一度の経験で定着することはない。何度も繰り返して、次第にそうしたやり方をする割合が多くなるのであろう。この時期では、一緒に遊んで欲しいときの適切な表現を知らずに、不適切なかかわりをする子どもがいる。相手の攻撃を制止するような言い方、謝罪のやり方を指導するばかりではなく、一緒に遊んで欲しいときの言い方などの指導も必要といえよう。

事例 2-92 2月24日 2006年 8:58 保育室-----

リカは、ユカの使っていた玩具を奪ってポケットに入れ、ケーキを五個入れた皿を手にとって歩いていく。その後をユカが付いて行く。ナナがリカに「私、ユカちゃんの味方だからやらせない」と叫ぶと、リカは黙ってポケットから玩具を出しユカに返す。

ナナが「行こう」とユカを促し歩き出すと、リカは「貸してあげたからね」と言う。それを聞いた保育者Bが「ありがとう」とユカに言う、ユカは笑って「ありがとう」と言う。するとナナは皿をリカの前に出して「じゃあケーキ」と言うと、リカはケーキ四個をその皿に載せてやる。ナナは嬉しそうに歩いていくと、その後をリカが付いて行く。

【考察】リカが玩具を取ったのは、それが欲しいというよりユカやナナとかかわって、一緒に遊びたかったのである。そしてユカとナナの注意を引き、かかわることに成功した。経緯を知らない保育者の言葉かけにユカが従うと、ナナはユカが譲歩したのを取引材料にしてリカにケーキを要求したのである。リカもそれ了解したので、3人はわだかまりを解消して一緒に遊ぶようになる。2歳クラス児でも、このような微妙な心理的な譲歩を貸し、借りと理解できるのが分かる。

仲間外れ いつも自分勝手な行動をする子どもは、物を奪おうとする可能性が高いので予防的に意図的に排除しようとするものである。

事例 2-105 2月24日 2006年 10:54～10:55 保育室-----

ナナ、ユカ、カナがテーブルにブロックを置いて、それぞれ組み立てている。ケンがカナの横に立って見ていると、カナがケンを押して、「いやー」と言いながらブロックを奪われないよう体で覆い隠すようにする。ケンはブロックで作った剣を振りかざしてから、カナの背中を軽く叩く。カナが「痛い」と叫ぶと保育者Aが「叩かない、やめてーっ」と言うとカナが「やめてー」と叫ぶ。ケンはすでに叩くのをやめていた。

【考察】カナはケンがたいい欲しいものを見つけると力ずくで取るの知っているので、警戒して先にケンを排除しようとした。それほどケンを利用していないのである。ケンが他児に信頼されるようになるには、他児と同じルールに従わなければならない。保育者はケンを特別扱いせず、長い見通しをもって繰り返し指導していくしかない。

相手を妨害する意地悪する 意図的に他児の遊びや行動をできないように妨害するものである。

事例 2-16 10月21日 2005年 10:55～10:58 公園-----

リカが滑り台の最上部に居座り、他児が滑れないように妨害している。4歳クラスの男児たちに「どけよ、早く行けよ」と言われても動かない。気付いた保育者 B が「リカちゃんこっちにおいで」と声をかける。4歳児に「ほら呼んでよ」と言われ、保育者 B を見るものの動かない。保育者 B は4歳男児たちに「追い越して滑ってきていいよ。先生みているから。悪いね」と言うと、男児たちは次々に滑り降りる。リカは滑り降りるふりを何度かするものの降りずにいる。しばらくして保育者 B が「リカちゃん」と叱る口調で言うと、滑り降りる。

【考察】この事例の前には、この滑り台の階段途中で止まり、クラスメートに対して嫌がらせをしていた。そのとき男児が「先生、リカちゃんが登らない」と大声で叫ぶと、リカは急いで登るが、保育者が来ないのに気付くとまたスローな動きに戻り、2段を約30秒かけて登る。男児が「早くしろ」と言ってもリカは薄笑いをして動かない。保育者に注意される行為と理解し、意図的に嫌がらせをしていたのであろう。また保育者にやさしく注意されただけでは従わない。これまでにリカは他児に嫌がらせをしたり、暴力で攻撃したりして保育者に注意されることが多かった。その満たされない気持ちのためにまた嫌がらせをする悪循環であったのであろう。ささいな約束を実行できたことでも認められれば、自己効力感を持てるし、それをきっかけにして嫌がらせの循環から抜けられることもある。そうした機会を作るのも保育者の援助であろう。

事例 2-34 12月2日 2005年 9:03～9:07 保育室-----

突然、ナナが悲鳴をあげ、泣き出す。その隣にリカが立っている。保育者 A が「どうしたの？」と問うと、リカはゆっくり歩き出しその場を離れる。ナナは保育者 A に近づき、「リカちゃんがした」と言うと、保育者 A は「先生に言うんじゃないで、リカちゃんにしないでって言うの」と言う。直ぐにナナは「しないで」とリカに向かって大声で言うが、リカは全く気にしない様子で歩いていき、ナナに背を向けテーブルに向かって立っている。ナナはリカに近づき「やめてー」と叫ぶと、リカはまたゆっくりと歩いて移動する。ナナは保育者 A の側へ行く。リカはその様子を確認すると観察者の方を向いて笑顔で「えへへ」と言う。

リカはゆっくり歩いてナナに近づき、顔をのぞき込み、次の瞬間、ナナの体を両手で押す。ナナが「嫌だー」と叫びながら離れ、2人はにらみ合っている。しばらくしてナナが歩き出すと、リカがナナの髪の毛を引っ張る。ナナが大声で泣き出す。

その一部始終を見ていた保育者 B がナナを呼んで、「何やっていたの？何もしていない

のにナナちゃん髪引っ張られたよね」と言う。保育者 A がリカを呼び、「髪引っ張るのはだめなんだよ。痛いでしょう。お友だち泣いているよ、ほら」と指差す。保育者 B は「泣いているよ」と言いながらナナの顔を見せる。保育者 A がリカに「髪の毛引っ張るの止めてください。ごめんねして、なでなでしてきな」と促す。

保育者 B は自分の前に立つリカに「ほら泣いているよ、涙出ている。可哀想」と言うと、リカは両手の指を動かしながら無表情でナナの様子を見ている。保育者 B が「泣いているよ。こうやられると嫌だよ」とリカの髪を軽く引っ張りながら問う。リカがうなずく。保育者 B は「もうしないんだよ。約束できる？なでなでして、ごめんねと言おう」と促すと、無言で頭を撫でる。さらにナナに「もうしないでって言おう」と促すと、泣きながら「もうしないで」と叫ぶ。リカがうなずく。保育者 B が「もうしないんだよ」と言うと、リカはうなずいて行こうとする。保育者 B がリカの体を押さえて、再び自己と正対させ、「こうするの嫌なんだよ、わかった。しないで、間違いだよ」と言うとうなずくので体を放す。リカは直ぐに他へ行ってしまふ。保育者 B はナナに「もう大丈夫だよ」と言ってナナの体を放す。

ナナがティッシュペーパーを取ろうとすると、リカが取って手渡しする。ナナは無然として涙と鼻を拭いてゴミ箱に捨てる。リカは笑顔で保育者 A の前でおどけている。

【考察】リカは一方的にナナを攻撃した。楽しそうに他児と遊んでいるナナに意地悪をしたのである。自分で興味あるおもしろい活動をみつけられずに、ナナの遊びを妨害し、攻撃するのを楽しんでいるようである。

被害側に言葉で制止するように訴えさせる指導と、痛いからやってはいけないという説明ばかりである。攻撃する側がなぜそういう行動にでるのか、それを問いただし、攻撃したい気持ちになってもそれを自分でコントロールして思いとどまることが必要と言葉で説明するべきであろう。

また加害側が謝ったら、被害側はすぐにそれを受け入れて、和解しなければならないことも押しつけ過ぎであろう。ときにはそれだけで、許せなかったり、気分転換ができないこともある。そうした被害側の心情を認めることも必要であろう。さらに加害側にも、謝罪しても許してもらえないこともある、人の気持ちは単純ではないことを知らせる必要がある。これでは攻撃したものの方が得をする、優遇されている印象を受ける。だからであろうリカは制止されても何度も攻撃を繰り返すのである。リカの行為、表情から心から反省しているとは思えない。単に大人の望む行為を表現しているだけである。だから悪びれることもなく、直ぐに機嫌良くなり、おどけているのである。

事例 2-110 3月17日 2006年 9:09～9:10 保育室-----

ナナが「行ってきます」と独り言を言って立ち上がり、「とうとうとうー、とうとうとうー」と口ずさみながら歩いていると、テツが「ナナちゃん、怪獣だ!」と叫ぶ。ナナは「怪獣?」と確認すると、テツが「変身しろ!」と言う。ナナは「うん、テツちゃんいくよ」と言って、その場で一回転し、「変身」と言って両手を振り回す。すると突然、リカが「やかましい」と怒鳴る。ナナが「やかましくない。一回変身したの」と言うと、リカが「もう変身しないで」と言い返す。

ナナが「変身のゲームも、コップのゲームも、おしぼりのゲームも、エプロンのゲームもしないの?」と聞くと、リカは「リカちゃんもうしないの。キティちゃんのゲームをするの」と答える。タクが「リカちゃんもムシキングするの?」と問うが、リカは答えない。タクが「ムシキングあるんだよね、ナナちゃん」と言うと、ナナが「ねえ、タクちゃん」と答える。リカがナナに「もう、やらせてあげない」と言うと、ナナはスキップして移動する。その後をテツがスキップして付いて行く。

【考察】ナナは機嫌がよくて、テツに怪獣と言われて、その役を引き受ける。それをリカが不服を言って中断させると、怪獣となるふりは終わってしまう。リカは意地悪な面があり、自分がおもしろい遊びを見つけられないので、楽しそうにしているナナを難癖をつけて妨害したのであろう。しかしナナはリカのふだんからの言動を知っており、まったく動じない。合理的な理由もなく、意地悪な言い方、やり方をする子どもを、子ども達は次第に相手にしなくなると推測される。

敵対的なかわりに耐える 他児に敵対的なかわりをされても、自分が悪いことをしたと自覚しているので保育者に訴えずに我慢するものである。

事例 2-70 1月13日 2006年 10:14 保育室-----

数人の幼児が玩具収納コンテナの中を物色しているとケンが割り込んで来る。ケンタクを押しやって、その前に出て玩具を手取る。タクは何も言わずに平手でケンの頭を2回強く叩く。ケンは振り向いてタクを見るが、泣きもせず、抗議もせずに、直ぐにコンテナ内の物色を始める。タクは保育者 B の側に行くが、他児の世話をしている気がない。ケンは黙々とたくさんのブロックを手にする。

【考察】ケンはブロックが欲しくて割り込んで、タクを怒らせて叩かれる。ふだんなら泣いて保育者に訴えるのだが、それでは自分が割り込んだことが分かてしまい反対に叱られる可能性もあるし、さらに急がないとブロックをたくさん手に入れられないからと判断して黙っていたのであろう。また反撃しなかったのは相手が自分より強いタクでは、叩き返せば、もっと叩かれるとの予想もあったのであろう。タクの方は、割り込まれたものの、相手を強く叩いてしまい、保育者に訴えると反対に自分が叱られると予想をしたのであろう。このように2歳クラス児でも状況に応じて、痛みを我慢したり、他児との関わり方や保育者への援助を求めるやり方も変更できることが分かる。

いざこざにおけるかわり

ユーモアのある対応 険悪な雰囲気をおどけて一変させたり、いざこざ後の嫌な気分を、ユーモラスな発話で和ませるものである。

事例 2-12 10月21日 2005年 9:46～9:48 保育室-----

おやつ時間となりカナが席に座ると隣のテツとたたき合いを始めるが、どちらの手も相手の体に当たらず、あまりに命中しないので2人とも声を出して笑い、叩くふりとなる。カナが叩くふりを止めるとテツはカナの腕を軽く握る。

それを見ていたナナがテツの腕を触るとテツはナナの腕を強く握る。ナナは「痛い」

と泣き声で叫ぶとテツは手を放す。エリがナナの頭を撫でながら、「嫌だよ」と言う。するとナナは「やめてー。コウちゃんなんかもうママの所へ行っちゃえ」と叫ぶ。テツは「ぼくのママは、ぼくのママは」と言って首を横に振る。ナナは「じゃ、ごめんなさい」と怒った表情で叫ぶ。テツが「ごめんなさい」と言うとナナは「いいよ」と言う。テツは首を横に振りながら「がー」と言うと、ナナは声を出して笑いながらテツを指差す。エリはその様子を静かに見ている。

【考察】カナとテツは2人とも初めは嫌がらせで叩こうとしたが、身体攻撃できず結果的に遊びの感覚となり楽しい気分を共有したのであろう。テツは嫌がらせでナナを攻撃したが、ナナが大声で叫んで、抗議し謝罪を要求した。その言葉に「ママの所へ行っちゃえ」とあり、その言葉をテツが受けて、おどけた態度を取った。それで緊迫した雰囲気ではなくなり、ナナは堂々と謝罪を要求し、テツも簡単に謝罪したのである。おどけた、ふざけた雰囲気が子どもたちの気分を和らげたのである。いざこざの回避や解決に、そうした対応を2歳クラス児でも行うことが示された。

事例 2-40 12月2日 2005年 9:28～9:32 保育室-----

おやつ準備の時間で、ナナは椅子に座りテーブルに付いている。リカがナナのいるテーブルの周囲をゆっくり歩いている。そこへケンが椅子を持って来たので、リカがその椅子を取ろうとすると、ケンが「うーうー」と叫び嫌がる。リカはさらにケンの背中を手で押さえようとするので、ケンは椅子を滑らせて走って逃げる。リカはその場に立ってケンをにらみつけている。

ナナは「椅子あるよ」と言うが、リカは動かない。ナナは「取ってあげる」と言い、椅子置き場に行き椅子を持つ。リカがそれには全く反応せずに、保育者の机の所に行ってしまったので、ナナは椅子を戻し、自分の席に戻る。するとリカは自分で椅子を持ってナナの隣に座る。

リカは「おねえちゃまだよ」と突然言い出すと、ナナは「えー？」と返事する。リカは「違う、おねえちゃまだよ」叫び、さらに「おねえちゃまだよ」と3回繰り返して言う。ナナが黙っていると、リカはうなずいて黙る。直ぐにナナが「おねえちゃま？おねえちゃま？」と問うと、リカがうなずく。ナナは「おねえちゃまか、なーんだ」と言うと2人は顔を見合わせて笑う。

しばらくしてナナが自分の鼻をつまみ、それをリカに気づかせようと肩を軽く叩く。リカは意識してナナの方を向かずに正面を向いているので、再度ナナが肩を叩くと、リカは「嫌だ」と大声で言う。ナナは鼻をつまんだまま、リカの方を向いてみる。数秒後、リカが急にナナの方を向き、鼻をつまんでいる手を払い除ける。ナナは「うえー」と声を出し、自分のエプロンを広げる。2人はその絵を見てから、顔を見合って笑う。ナナがリカの胸を指差し、「エプロンないよ」と言うと、リカは取りに行く。

【考察】リカが低月齢のケンを意図的に意地悪しようとしていた。ケンならほとんど言葉にでも行動にでも反撃されることがないと分かっているからであろう。ナナの働きかけに対するリカの反応も、意地悪をしようとの意図がみえる。しかしナナが怒らずにリカにう

まく対応するので、リカはあからさまな攻撃的態度を取りにくい。そこで「おねえちゃま」という役名を宣言すると、それをナナがおもしろく受け流してしまい対立的な雰囲気にならず、結局、笑い合ってしまったのである。ナナの対応は意図的にリカの挑発をかわそうとするものではないのであろうが、経験の中で身につけたユーモアのセンスのあるかわり方である。こうした対応を2歳クラス児でも行うことが示された。

不満を解消できない いざこざは終結したものの、当事者は気持ちの立て直しができないで不満が残るものである。

事例 2-63 1月13日 2006年 9:24～9:29 保育室-----

タクがリエの玩具を奪おうとして叩く。リエは「嫌だ、嫌だ」と叫ぶが、タクは叩き続ける。リエは走って逃げて保育者 B に「タクちゃんが叩いた」と泣きながら訴える。保育者 B は「叩かないでって言えば」と言う。泣き続けるリエにナナが寄り添い、心配そうに見ている。

保育者 B は他児の対応をしている間、その様子をリエは涙を拭きながら見ている。タクは立ったまま動かずにいたが、しばらくすると別の所に行く。保育者 B が「やめてって言った？」と聞くと、リエは黙っている。保育者 B がタクを呼び寄せ、「リエちゃんのことパチンしたの？ねえ、タクちゃん？」と言うとタクは黙っている。保育者 B は「キックしていない？じゃあリエちゃん何で泣いたの？何でなの？」と聞くとタクは口に指を入れ黙っている。さらに保育者 B が「当たったの？どこがぶつかったの？」と聞いても無言である。

保育者 B はリエを呼び寄せ、手を握って、「どこが痛かったの？」と聞くと黙っている。「叩かれたんでしょう」と言うと、リエはうなずく。「どこが痛かったの？」と聞くと、何も答えないので、保育者 B は「どこも痛くなかったの。どこも痛くないんだったら、それは叩かれていないんじゃないの？どうなの？遊んでいるとぶつかるよね。ちょっとぶつかるのと、ぱちんと叩いたのは違うでしょう」と言うとリエはうなずく。保育者 B が「どっちなの？ぶつかったの？たたかれたの？」と聞くとリエは保育者 B の顔を見つめるだけである。保育者 B が「じゃあ、どこが痛かったの。どこも痛くないんじゃないの？」と言っても、リエは保育者 B の顔を見つめるだけである。

保育者 B はリエに対して「リエちゃんどこが痛かったの？どこ痛かったの？」と問うものの、リエは保育者 B の顔を見つめるだけで何も話さない。保育者 B が「どこも痛くないの？」と聞くとうなずく。保育者 B は「ちょっとぶつかったりさ、ちょっと押されたくらいであんなに大きな声で泣かないんだよ。別に痛くないんだから、大丈夫でしょう」と言うとリエはうなずく。保育者 B は「タクちゃんもさ、ぶつかったらごめんね言おうよ」と言うが、タクは無言のまま動かない。

そのとき保育者 A が来て、保育者 B との打ち合わせとなり、リエとタクは離れていく。

【考察】リエにとっては不合理な決着である。叩かれている最中に「叩かないで」と主張するのは難しい。相手が感情的になって身体攻撃しているときに、言葉を聞いて冷静に対応するとはとうてい考えられない。さらに叩く相手はたいていは自分より腕力が強いのであり、言葉を発するのも難しい。保育者の一連の発言を聞いていて、リエは自分が主張し

ているのが悪い、誤りという印象をもったのであろう。それで後半は何も発言せず、保育者の顔の表情を見るだけになってしまったと推測する。反対にタクの方は、自分が悪いのを分かっていたので黙っていたのであろう。ところがそれを保育者が自分の方に都合のよいように解釈を変えていき、最後は偶然ぶつかったということになった。大声で泣いた相手にも非があるような言い方であった。自分は単なる過失で謝ればよいという決着である。いざごは終結したものの、リエにはまったくわだかまりが解消しない解決であったと推測される。

事例 2-96 2月24日 2006年 9:15～9:16 保育室-----

リカがユカの皿から食材を一つ取るとユカが泣き出す。保育者 B が「今度、何で泣いているの？どうしたの？返してって言えば」と言うが、ユカはそれに答えず泣き続ける。

ソウタがユカに「だいじょうぶ？」と話し、リカの炊飯器からケーキを取って渡そうとすると、リカが直ぐに取り返す。ユカは泣きやみ、ソウタの顔を見ている。

リカはユカから取った食材を持ってその場を離れるとユカの皿に食材を投げ返してから、コンテナに行き食材を探す。その隙にソウタがリカの皿からケーキを取ってユカの皿に入れる。ユカは直ぐに「いらない」と言ってケーキを外に出す。

リカは食材一つをユカの皿に入れてコンテナに戻る。ユカはそれを床に投げ捨てて、自分もコンテナに行き食材を持ってきて皿に入れる。

【考察】リカが乱暴ではあるものの奪った物を返したので、一応いざごは終結した。そしてリカはユカの食材を取ったのをユカが泣いて抗議したはおもしろくないものの、関係を修復したいと思っているのが分かる。ユカはソウタの慰めにより気持ちを切り替えることができたようである。しかしユカもリカといざごを続ける気はないものの、良好な関係を戻したいとも考えていないようである。それはリカの食材をソウタが自分の皿に入れるのは拒否したことで分かる。今はまだリカを許せない、心理的な抵抗があるのであろう。物を返してもらっても、クラスメートに慰められても、わだかまりを解消するには、しばらく時間が必要なのである。

気持ちを立て直す 怒りを感じるものの、いつまでも怒っていても自分もおもしろくないので、適当なきっかけをみつけて気持ちを立て直すものである。

事例 2-93 2月24日 2006年 8:59～9:02 保育室-----

ソウタがナナの使っているスプーンを取って行く。気づいたナナが「返して」と言うが、ソウタは無視して行ってしまう。

ナナは保育者 B に走り寄り「取られた」と言うと、保育者 B は「取らないでというの」と言う。ソウタはスプーンと包丁二本を胸に腕組みをして隠し持ち、白目をむいて険しい表情で下を見る。保育者 B がソウタに「お友だち、使っていたみたい、返してあげたら」と言うが、無視する。保育者 B がナナに「もう一度言ったら」と促すとナナは「返して」と顔を見て叫ぶ。ソウタは顔を上げて、上目づかいでナナをにらむ。保育者 B が「返してくれるかも、返して欲しいもの引っ張ったら」と促すと、ナナが包丁を取ろうとする。保育者 B が「あれ？ソウタちゃんが使っていたものでしょう」と言うとソウタは腕で隠

し直す。保育者 B が「ソウタちゃん同じの二つあるから一つ貸してあげれば？だめなの？」と言い、さらにナナに「これを返して欲しいんじゃないの？」と言ってスプーンを指差すと、ナナは一瞬うなずくが、直ぐに頭を横に振る。保育者 B が「ソウタちゃん、これ（包丁）さ二つあるから一つずつ仲良しで使ったらどう？いいでしょう。一つ貸してあげてもいい？いいよね」と言う。ソウタは無反応であるが、保育者 B が包丁を取り上げナナに渡し、「ありがとうございます」と促すとナナが「ありがとう」と言う。保育者 B は「ありがとう、よかったね」と言いながらソウタの頭を撫で、さらに「偉かったねー」と言い、背中を撫でる。

保育者 B が「じゃあ、ソウタちゃん他の玩具探しに行こうか」と促すと、ソウタは持っていたレプリカを床に落とす。保育者 B が「これ嫌なの？」と問うとうなずく。保育者 B が「じゃあ別の玩具探しに行けば」とソウタの手を取って行く。保育者 B が玩具収納コンテナを引き出して、ソウタに探させる。

ナナが偶然、床にあった別の包丁を持ち上げて「あっ見つけた！」と言う。保育者 B が「あっ、あるじゃない、じゃあこれソウタちゃんに返してあげれば」と言い、ナナから先の包丁を受け取り、ソウタに返す。ソウタは受け取ると急に笑顔になる。保育者 B はソウタに「よかったね」と言い、ナナに「よく探しな」と言う。

ソウタは先ほど床に放り投げた包丁とスプーンを拾って両手に抱えて、「ナナちゃんのはそこにあるよね」と言う。保育者 B が「機嫌直ってよかったね」と言う。

【考察】ソウタはこの事例の前に保育者 B の誤解で叱られた腹いせのために、スプーンを奪ったようである。ナナと保育者をさんざん困らせて自分へ注目させることに成功する。しかし、ナナの勝手な要求と保育者の指導方針の変更により、奪ったスプーンではなく気に入っている包丁を取られてしまう。保育者に褒められ、おだてられてもおもしろくない。そこでまた白目をむいて、怒った表情で不満を表現し続ける。そして偶然ではあるが、その包丁が戻って来たところで、嫌な気分を一気に氷解させてしまう。しかし、それが直接嬉しいことであつたとは思えない。むしろソウタにとって、白目をむいて、怒った表情で不満を表現し続けるのは、おもしろくも楽しいことではないことであつて、それをどこかで決着を付けたいと思っていたのであろう。その機会を、包丁が戻って来たところにして、機嫌を直したと推測する。子どもでもどこかで、何かの機会を使って精神的に立て直そうとしているのであろう。

他児を援助してその相手を攻撃する 自分は利害がないが、困っている他児に加勢して、その相手の子どもを排除したり、攻撃するものである。

事例 2-50 12 月 16 日 2005 年 9:30 ～ 9:35 保育室-----

ケンがレプリカのフライパンにレプリカのピザを入れる。その横にいたカナが黙ってそのフライパンを持ち上げると、ケンは「あー！あー！」と大きな泣き声をあげ、手を伸ばして取り返そうとする。カナはその手を払いのける。タクがカナに近づき、フライパンを取ろうとするが、カナに押し戻される。＜一部省略＞

ナナとレオがそのテーブルの周囲の床に散乱するレプリカの物色し、ナナがピザと鍋を拾う。すぐにタクがそれを横取りしようとする。レオがそれを阻止しようとタクを手で押

さえる。その間にナナはピザとスプーンを持って走って逃げる。レオはナナの後を心配そうについて歩いている。

【考察】カナがケンからレプリカを奪うと、それに気づいたタクが取り返そうとした。それは自分が使いたいからではなく、ケンが使うのが道理と分かっているからである。さらにナナが見つけたピザのレプリカをタクが奪おうとしたのも、同様であろう。しかし、それは先にケンが使っていたものではなく、タクの誤解なのである。それを知っていたレオは、ナナが使う権利があると判断してナナに加勢したのである。その後もレオはナナを守るために側にいたのである。タクとレオの行動は、状況から道理を判断して他者の権利を守ろうとするものであり、他者に対する思いやりによるものといえよう。

事例 2-81 1月27日 2006年 9:25 保育室-----

タクが黙ってナナに青いジョウゴを渡し、自分は赤いジョウゴを口に当てる。ナナは模倣してジョウゴを口に当てる。その際に、アミはナナが使っていた包丁を取って行ってしまう。気づいたナナが「あーちょっと」と言うと、アミは小走りになる。ナナが「ちょっと、だめ、取らないで」と叫ぶが、アミは無視して食材を取ろうとする。

タクがアミに近づき、包丁を奪おうするが、アミは抵抗せずに取りられる。タクは包丁をナナに渡すと、ナナは「ありがとうね」と言う。タクはナナの隣に座る。

ナナが「食べる？」と聞くと、タクがうなずく。ナナは忙しそうに鍋の中をかき混ぜ、「まだカレーできないよ」と言う。タクが「カレー」と言うとナナが「そう、カレー」と言う。ナナは、鍋の中のものをどんぶりに盛りつけたふりをして、「はい、カレー」と言って、それをタクに渡す。タクは食べるふりをする。

【考察】タクは簡単にナナの包丁を取り返した。それはアミが悪いことをしているとの意識を持っているから、特に抵抗しなかったからである。ナナが遊んでいるのを見て、悪いと分かっているにもかかわらず包丁が欲しくなったのであろう。こうした経験の中で、相手が認めるようなかわり方を身につけていくのである。またナナは自分のために動いてくれたタクに感謝し、カレーを作り勧めていた。遊びの文脈において相手を心を込めて対応するのは、実生活と変わりがない。このように他者を思いやり、遊ぶ力を持つ子どもを育てることが、仲間関係を育てることにつながるのである。

仲間入りの拒否

事例 2-75 1月27日 2006年 8:59～9:07 保育室-----

ユカ、レオ、カナ、ケンは玩具収納コンテナから様々な食材レプリカを取り出して、バスケットに入れる。カナが立ち上がり「行くよー」と言うとユカが「おっけい」と応じ、2人でバスケットを運んで部屋の隅に降ろす。四人はバスケットの中を物色して、それぞれいくつかの食材を手にする。

リカが近づき「入れて」と言うと、レオが「いいよ」と言う。リカはバスケットから包丁を取って、「いい？」とケンに聞いて持って行く。リカは直ぐに戻ってきてまたバスケットの中を物色するので、ユカは邪魔になる。ユカが「来ないで」と言うと、ケンも「来

ないで」と言う。そのときリカは保育者 B に呼ばれて行ってしまう。

ユカとカナはバスケットを持って移動すると、リカが立っている。ユカが「こないで」と言うと、リカは「だめなんだよ、入れてって言ったんだから」と大声で言い返す。すると保育者 B が「入れてって言ったら、入れてあげれば」と言うと、直ぐにリカは「入れて」と言う。レオとケン「いいよ」と言うが、リカは立ったままである。リカは保育者 B に「いいよって言わない」と訴えると、保育者 B が「いいよって言ったよ」と言う。

ユカが「いいよ」と言うと、保育者 B は「ほら、いいよって言ってくれたよ」と言う。リカはバスケットに近づくが手を入れるスペースがないので周囲を歩き、「カナちゃん、先生がいいよって言ったじゃん」と抗議する。レオが離れると、直ぐにリカはそこに入りバスケットの中を物色する。しばらくするとカナが「行こう」と言って、ユカとバスケットを持って移動する。直ぐにリカは保育者 B に「また来ないでって言われた」と言うと保育者 B が「え？何が？」と聞く。再度リカが「また来ないでって言われた」と言うと保育者 B が「そうじゃ、私も入れてって言うてみたら」と言う。

リカは四人に近づき「私も入れて」と大声で言うと、四人のそれぞれが「いいよー」と言う。レオとユカは食材を食べるふりをする。リカがカナの使っているショートケーキをカナが目を離した隙に取って、自分の後に隠す。気づいたカナが「あーあーっ」と抗議するがリカが知らないふりをするので、カナはリカを指差し泣き声をあげる。するとリカはカナにケーキを返す。それを見ていた保育者 B が「あーんと泣くんじゃなくて、返して私遊んでいたんだから返してと言うの」と言う。直ぐにカナが「返して」と叫ぶと保育者 B は「そう、返してねって言うの。よかったね、返してもらったね。こういうときは何て言うんだっけ」と聞く。カナは「返して」と答えると、保育者 B は「違うよ。リカちゃんありがとうって言うのとまた、くれるんじゃない」と言う。カナが「ありがとう」と言うと保育者 B は「そうよ、ありがとうって優しく言うといいんじゃないの」と言う。カナは黙ったままバスケットの中を物色する。

【考察】この活動をリードするカナとユカはリカの参加をうれしくないと感じているのが分かる。リカは保育者に訴え、保育者の力を背景に半強制的に参加を実現する。カナとユカは言葉では拒否しないものの、移動して参加を拒む意図を示す。しかし2人はいつまでもそうしていてもおもしろくないので、食材を食べるふりを始めると、直ぐにリカが意地悪を始める。2人はリカの性格、行動パターンを知っていて参加を拒否していたのである。カナが抗議し、泣き声をあげてリカの意地悪に対抗する。しかしその方略は保育者の推奨する言葉で主張するものでないので、保育者から注意を受け、指導される。さらに自分が奪われたものを返してもらったのに、お礼を言われるのである。これは不合理であろう。それを注意する前に、勝手に他児が使うものを奪ったリカを指導すべきである。さらにリカが他児に拒否されるのは、そうした勝手な行動、意地悪な行動を頻繁に行うからであることも、こうした機会を捉えて気づかせる必要がある。そうした人間社会の基本的なルールを知ってはじめて、健全な仲間関係が育つのである。あまりに保育者の恣意が前面に出すぎているような援助と感じる。

事例 2-79 1月27日 2006年 9:19～9:22 保育室-----

カナとリカは食材を鍋とフライパンに入れてテーブルの上で調理のふりをしている。そこへケンが近づくとカナが「こっちこないで」と言う。ケンは立ち止まり見ているが、カナは「あっちへ行こう」とリカを促すとリカも「あっちへ行こう」と言うが、その場で活動が続いている。しばらくしてケンが「よせて」と言うと、カナは「だめー。あっちへ行こう」とリカを促し、それぞれ両手に鍋とフライパンを持って移動し、部屋の隅に座る。

リカが振り向いて、先のテーブルにケンがいなかったことを確認して、「カナちゃん、いなくなったからあっちへ行こう」と言う。2人はレプリカ持ってテーブルに戻ると、それぞれ忙しそうに調理のふりをする。

リカが「リエちゃん来ていいよ」と誘うとリエが走って来る。カナはリエを見て「いいよ」と言うが、リエは2人の様子を真剣な表情で見ている。2人は話しながら、忙しそうに手を動かす。リエがカナとリカに「何を作っているの?」と問うとカナは「今ね、あのね、イチゴ」と答え、リカは「米屋さん」と答える。リエとリカは食材を取りに行く。

【考察】ケンは本事例直前にカナとリカが食材を盛りつけた皿を転がして妨害していたこともあり、2人は仲間入りを拒否した。それにより、ケンは他児の遊びを妨害すると、しばらく仲間に入れてもらえないことを身をもって学ぶ、よい機会となったであろう。ここで保育者が仲介して、無理やり仲間入りをさせなくてよかったと考える。

リエはリカに呼ばれ、カナに承認されてもすぐに活動に参加しない。しばらく観察し、何をしているのか聞いている。2人の意図を確かめているのである。それほど慎重であるからこそ、リエが加わっても自分たちの遊びを妨害することはないと予想して2人はリエを誘ったのであろう。リエはこうしたやり方をクラスメートとの遊びの中で学んできたのであろう。

保育者援助の実態

不適切と思われる援助 保育者が状況を誤解して、誤った解決をしたり、長期的にみて子どもの仲間関係に良くない影響を与える援助と考えられるものである。

Ser.2-11 10月21日 2005年 9:39～9:41 トイレ-----

リカがアミの頬を強くつねると、アミは泣いてトイレから出て行く。気付いた保育者 B がリカの所に来て、アミを呼び寄せ頬が赤くなっているのリカに見せる。

保育者 B は「かわいそう、アミちゃん泣いたよ」と言いながら、リカの頬を軽くつまみ、「ここをぎゅーとやったら痛いんだよ。ほら、こんなに赤くなって、なでなでしてあげて」という。リカは黙って、頬を撫でる。保育者 B は「こんなことしちゃ駄目なんだよ。遊ぼうとかやらせてとか、したいとか言うときは口で言うの、お話できるはずだよ。手でやるのは駄目なんだよ、分かる?先生の目を見て。さあ、ごめんなさいしようね」と言って促す。リカは保育者 B を見ながら「ごめんね」と言うので、保育者 B は「ちがう、アミちゃんの顔を見て」と言うと、それに従う。

保育者 B はアミに「しないでねって言おう」と促すとアミは「しないでね」と言う。次に保育者 B はリカに「はいは?」と促す。リカは「はい」と言うと直ぐに行こうとするので、保育者 B はリカを手で押さえ「もうしないんだよ」と言ってから手を放す。

【考察】すべて保育者 B が言葉を添えて、それを復唱させて仲直りまで行っている。リカはそれですべてが完了したと思っている。実際にはほとんど反省してはいないし、反省したとしても、反省している時間はごくわずかである。大人はすべての手続きを完了させて「終了」させたと感じたいのであろうが、それが形式的な謝罪と反省の態度を育てるのであろう。もうしばらく叱ったままにして、反省する時間を長くとった方が効果的であり、その方が相手に対して思いやりや仲間意識を育てると推測する。

Ser.2-58 1月13日2006年 9:10～9:14 保育室-----

ケンが大皿に様々な食材を盛りつけて、豪華な食事を作り、それを床に置く。タクがそれを持ち、立ち上がる。ケンがそれを阻止するために皿に手をかけると、皿が傾き、全ての食材が床にこぼれ落ちる。ケンは「あー、あー」と怒りの声をあげて、レプリカの包丁でタクの頭を2回叩くと、直ぐにタクはケンの頭を2回、強く叩き返す。ケンは泣き声をあげて、保育者 B の方を見る。

保育者 B が「何で泣いたの？」と問うとユカが「タクちゃんが叩いた」と答える。保育者 B がタクに向かって「タクちゃんが叩いたの？」と聞くと、タクは頭を横に振る。ケンが泣き続け、保育者 B がケンの側に来ると、ケンは「叩いた、叩いた」と言う。保育者 B が「どうしたの？誰が叩いたの？」と問うと、ユカは「タクちゃん」と答え、ケンはタクを指差す。

保育者 B は「タクちゃん来てごらん」と言い、ケンに「タクちゃんがどこを叩いたの？」と問うと、ケンは自分の頭を指差す。保育者 B が「タクちゃん、なんでケンちゃんのことを叩いたん？」と聞くが、タクは黙っている。保育者 B がタクの両手を取り、正対して「うーん、どうして叩いたの？」と聞くと、タクは「だって」と言う。保育者 B はタクを抱きかかえて「だって何？」と聞くと、タクが「こぼれた」と言う。保育者 B が「こぼれた？誰がこぼしたの？」と聞くと、ユカとレオが「タクちゃん」と言う。保育者 B が「タクちゃんがこぼしたん。タクちゃんがこぼしたら、ケンちゃんが怒ったん？」と聞くと、タクがうなずく。保育者 B は「ケンちゃんが怒ったんで、タクちゃん止めろって叩いたん？ケンちゃん嫌だったみたいだから直してやろうよ」と言うが、タクは返事をしない。その間にナナが皿をセットして、食材を盛りつけている。

保育者 B が「タクちゃん、嫌だからってケンちゃんを叩かないんだ。ね、ごめんねって言えばいいんだ。ケンにごめんねってできるかな」と促すが、タクは無反応である。保育者 B はタクの手を取ってケンの頭を撫でさせ、保育者 B が「ごめんね」と言い、さらにタクに「ごめんねって言うんだよ」と言う。

保育者 B はケンを立てせて、「タクちゃんにごめんねだって。ナナちゃんが直してくれた、よかったね。ありがとうして」と言う。ナナが皿をケンに渡す。保育者 B がナナを指差し、「ありがとうしよう」とケン促す。ケンが「ありがとう」と言うとなナは「いいよ」と答える。保育者 B は「ナナちゃん、今日、とってもお姉さん。すてきー」と言って、ナナを抱きかかえ、さらに「偉かったねー、とてもお姉さんだったよ」と言う。カナが拍手すると、保育者 B は「カナちゃん、お姉さんだね。ナナちゃんのことばちばちした。うーん、カナちゃんもまる」と言う。ケンは皿に盛りつけている。

【考察】いざこざの場面で、泣いた方が有利に扱われるという典型である。タクがケンを叩いたが、それはケンがプラスチックの包丁でタクを叩いたことへの反撃である。結果的にケンは泣いたが、タクが一方的に悪いとは言えない。タクは保育者の促しがあっても、謝罪をしなかったのは、このいざこざの仲裁に不満があったからであろう。いざこざの発端から見ていないと、その原因を知るのは困難に近い。当事者は自分の立場でしか主張できないし、その場に居合わせた幼児たちは泣かした方を悪いと判断し、その話は事実を表現しているとは限らないからである。どのように仲裁し、どのように説明し、和解にもっていくのか難しい。しかし、あまりに一方的な仲裁では、子どもたちの信頼を失ってしまうであろう。

ナナへの対応であるが、保育者の立場からの褒め言葉で終わっている。援助されたケンの立場からの感謝、喜びを伝える必要があるだろう。そのような丁寧な指導によって、他児への協力、手助けをする本質的な意味を経験して知り、仲間関係が育つきっかけになると考える。

Ser.2-82 1月27日2006年 11:07～11:09 保育室-----

絵本の読み聞かせが終わると、ナナ、タク、ユカ、カナが立ち上がり騒ぎ出す。保育者Bが「みんな見て、間違いさんだね」と言うと4人は元の場所に戻って座る。

リカは隣に座ったタクに「お間違い」と大声で言い、タクを押し倒す。タクは起き上がるとリカを叩き始めると、保育者Bが「またパンチしている」と言う。タクは叩くのを止め保育者Bを見ると、保育者Bが「タクちゃん、やられたかもしれないけどパンチしないで。(絵本のキャラクターの)サチコちゃんのように、やめて一って言ったら」と言うと、タクが「やめてー」と叫ぶ。保育者Bが「そう、やめて一って言ったらお兄ちゃんだよ」と言う。

タクが座るとリカは体を左右に振りながらタクを叩くふりをする。保育者Bは「リカちゃん、やめて一って言われたらやめなくっちゃ」と言うと、リカは動きを止めてタクを見る。2人が見合っていると、保育者Bは「2人ともパンチやめてね」と言う。

ユカが隣に座っているタクの腕と胸を撫でると、タクはユカを叩く。ユカは再度タクの腕と胸を撫でると、またタクはユカを叩く。(保育者Bは全員にトイレに行って手を洗い、昼食の準備をするように指示している)その間にユカが叩くふりをする、タクは何回もユカを叩く。ときどきユカが叩き返すが、次第に泣き出す。

保育者Bがユカとタクの所へ行き、「ユカちゃん泣いたけど、タクちゃん先生に教えて。どうしたの?誰が先に手をだしたの?」と聞くと、ユカはタクを指差す。保育者Bが「先にしたの?」と聞くとタクがうなずく。保育者Bは「そっか、ユカちゃん先にタクちゃんに嫌なことをしなかった?」と聞くとタクがうなずく。保育者Bが「そうなんだ。人を叩いておもしろい?」と聞くとタクは反応しない。保育者Bが「タクちゃんが先にしたんだ」と言うとタクはうなずく。保育者Bが「ユカちゃん、タクちゃんに意地悪しなかったの?」と聞くとユカがうなずく。保育者Bは「じゃあ、ごめんねしよう」と言って、タクに謝らせる。保育者Bはタクを抱いて「本当のこと言って、偉かったよ。今度パンチしないで口で言ってね。はい、いいよ」と言って、タクを放す。

【考察】保育者はタクに対してリカが身体攻撃したことを全く問題にしない。タクが騒いだこととリカが身体攻撃したことは全く関連がないはずである。しかし保育者は無意識のうちに、リカが自分の代わりに、罰として叩いてくれたと考えているのであろう。しかしそれは誤りである。

ユカはタクに同情して撫でたのに、タクは攻撃した。タクはユカのかかわりを嫌がらせとは感じていなかったのになぜ、連続して叩くようなことをしたのであろうか。タクはリカとのいざこざにおける保育者の仲裁にいらだっていたと推測する。それでユカに腹いせで攻撃したのであろう。保育者の説明に納得していないのである。リカの自分への身体攻撃をまったく注意しないのを不合理に感じているのである。

タクのユカへの攻撃に対する保育者の叱責は、リカのときに比べると簡単に終わっている。それも最後に本当のことを言ったとしてタクを褒めてもいる。ユカへの攻撃の原因が不明でも、少なくともユカにまったく責任がないのは分かっているのに、なぜなのであろうか。保育者が恣意的に叱り方を変えているとしか考えられない。こうしたことが続けば、子どもたちは保育者を信頼しなくなるであろう。

Ser.2-95 2月24日2006年 9:04～9:09 保育室-----

リカとユカは並んで座り、それぞれ皿に食材を入れている。リカが側にいるケンの皿からアイスクリームを一つ取り、ユカの皿に入れる。ケンが「あーあー」と言って泣き出す。ユカは「ほら見て誕生日」と嬉しそうにリカに見せる。ケンは保育者Bに向かって泣く。保育者Bが「どうしたの？」と聞くとケンはユカを指差して泣き続ける。

保育者Bが「ユカちゃん？誰？」と確認すると直ぐにユカがアイスクリームをケンに返す。保育者Bはユカに「だめだよ黙って取っちゃ。自分だって泣くでしょう」と言う。ユカとリカはこわばった表情で保育者Bを見ながら玩具収納コンテナ歩いていく。保育者Bがケンに「ケンちゃんも泣くんじゃなくて、取っちゃだめっていうの」と言うのと泣きながらうなずく。

リカ、ユカ、カナはコンテナから食材を取り出して、それぞれ自分の皿に盛りつける。リカが皿二枚を両手に持ち歩き出すと、その後をユカも皿を持ち付いて行く。リカはユカに「来ないで」と突然叫ぶと、ユカはリカを追い越してから振り向き「来ないで」と言い返す。リカがテーブルに皿を置くと、そのテーブルの端にユカが皿を置くので、リカは「来ないで」と叫び、また二枚の皿を持って歩き出す。ユカは自分の皿を持ってコンテナの方へ向かうが、リカの方を振り返り気にしている。リカもコンテナの所に戻るが2人はまったく口をきかない。

ユカが先ほどのテーブルに戻り皿を置くと、リカもそのテーブルに皿を置くが、直ぐに隣のカナのいるテーブルに移る。ユカは皿を持ってリカの脇を通過してカナの隣に皿を置き、カナに「はい卵焼き」と言って食材を渡す。カナはその食材を食べるふりした後、自分の鍋に入れる。カナはガスレンジ、鍋、食材を使い一人で調理するふりをしている。ユカは次々に食材の名称を言ってからカナに渡すと、カナは鍋に入れたりガスレンジの上に置く。

リカはコンテナに行き、炊飯器に食材をたくさん詰めて持って来て、カナの脇に置く。リカは炊飯器から食材を次々に取り出し、黙ってユカの皿に入れる。炊飯器が空になると

自分の皿の食材をユカの皿に入れる。

ユカが自分の皿をスプーンで突いて調理するふりをすると、カナが「今、何作っているの？」と聞く。そこへケンが来て、「ちょうだい、おれの」と言うので、カナはケンに背中を向け、両手を広げてテーブルを覆い隠し、顔をケンに向けて「わからないし、ねっ」と大声で言う。ユカがうなずく。

ケンは直ぐに「うわーん、あーん」と大きな泣き声をあげて保育者 B の方へ走り、「ケンちゃんのだめって言った」と訴える。保育者 B が「じゃあ返してって言えば」と言うのとケンが「返してー」と叫ぶ。その様子を見ていたユカが食材を持って来てケンに渡す。それを見た保育者 B はユカを呼ぶが、ユカはテーブルに戻る。保育者 B は叱る口調で「ユカちゃんは先生の話の聞きに来て」と言うが動かずにいると、ケンがユカの所に来て「これちょうだい」と言って、ユカの皿から食材を取る。

ユカが動かないので保育者 B はユカの所へ来る。ユカは黙ったまま皿をスプーンで激しく突いていると、保育者 B が怒りの表情でその皿を取り上げて「ユカちゃん、先生がこうして皿を取ると嬉しい？」と問うとユカは下を向く。保育者 B が「ほら泣く」と言う。2秒間の沈黙の後、保育者 B は「ユカちゃんのもらおう」と言って、ユカの手からスプーンを取り、「嬉しい？」と問う。ユカが頭を横に振ると保育者 B は「嫌でしょう。ね、ケンちゃんだって使っていた玩具を取られたら嫌なの分かる？」と言うと、うなずく。保育者 B は「貸してねって言ってないでしょう。聞こえないのは言ってないと同じ。貸してねって言って、いいよって言われると初めて使えるの」と説明する。ユカはときどきうなずきながら聞いている。保育者 B が貸して、いいよの言い方の練習と言って、ユカとケンに言わせる。保育者 B はユカに「黙って取るのは間違いだよ。もう間違いしないで」と言う。ユカは黙ってうなずく。カナとリカは保育者 B とユカのかかわる様子を黙って見続けている。保育者 B が炊飯器の中の食材を食べるふりして「おいしい」と言っ

【考察】当初の場面で、リカがアイスクリームをユカの皿に入れたのが発端でユカが叱られた。リカはユカを陥れる悪意があったわけではないし、ユカもそれを了解しているであろう。ユカは自分が奪ったのでもないのに、保育者からきつく、それも嫌みを込めて叱られた。保育者の口調と表情から、とても事情を説明する気にはならなかったであろう。ユカとリカの2人が保育者を見る表情から、保育者を怖いと感じているのが推測できた。しかしユカは叱られたことを根に持ってリカを責めはしなかった。むしろリカの方が、ユカが怒っていると推測して、ユカを遠ざけるようとしているのが分かる。それでもユカはリカとかかわるのを諦めない。粘り強く関係を持とうとし続ける。そしてカナとのかかわりを通して、リカと一緒に遊べるようになったのである。仲間関係を育てるにはクラスメートとかかわった方がおもしろいと感じられる活動が必要なのである。自発的なごっこ遊びは最適な活動の一つであることが分かる。

後半の場面では、ケンが泣いたのは自分勝手な要求を拒否されたからである。ユカはケンに同情したのか、かわいそうに思ったのか、好意的に食材を渡しただけである。ケンの泣きと訴えによって、保育者は確認したり裏付けを取ることもなく、目に見える範囲の状況だけで判断していざこざを仲裁し、善悪を判断した。一見、保育者はユカの言い分を聞

いているように見える。しかし保育者はユカが悪いと予断を持っているので、怒っている表情で叱るような言い方で問う。ユカにとってそれは確認のための問いではなくて、自分の非を責める詰問であり、説明したり、ましてや反論したりする雰囲気ではない。

ケン is 泣くことで、保育者の注意を引き、保育者の権力を後ろ盾にして自分の思いを通してやるやり方を、これまでも何度もしていた。こうしてケンは自分の思い通りを貫いてきたのである。この時期でこれを方略として意図的に行っていると思えるほどである。こうなったのは保育者の不適切な援助が促してきたといえよう。

しかしそんなケンはクラスメートから仲間として認めてもらえないし、遊びに入れてもらえない。ケンは保育者がいなければクラスメートと対等に、ふつうにかかわることもできない。このような保育者の援助はケンの自律を妨げ、ネガティブな仲間関係を育てているといえよう。

考慮が必要と思われる援助 子どもたちのいざこざを仲裁したり、必要な物を出したりする援助に終わってしまい、遊びに新鮮な情報を提供するなど遊びを支える援助が必要と考えられるものである。

Ser.2-10 10月21日2005年 9:29～9:34 保育室-----

エリとリエ、ケンがレプリカの食材を持って床に座る。ナナが「何やっているのー」と言いながらエリの前に座る。タクがケンの側に来て、ケンの食材を食べるふりをする。ナナが持っていた食材と携帯電話を床に置くと、リエはその携帯を手にして話すふりをする。

カナがナナの隣に座る。ナナがエリと話している間に、カナがナナの食材を取る。ナナが取り返そうとして揉み合いになるものの、ナナが取り返す。するとカナはナナの背中を叩く。その様子を見ていた保育者Bがカナの脇に座り、「黙って取っちゃったの？」と問うとナナがうなずく。保育者Bはカナを自分の膝に座らせて、「黙って取るのダメなんだよ」と穏やかな口調で言い聞かせる。さらに「貸してねーっていうの。言ってごらん」と言うと、カナが「貸してね」と言うので、保育者Bは「そうそう」と認める。

レオが食材を保育者Bに差し出すと「はい」と言って受け取り、カナの口元に持っていく、次に自分が食べるふりをして返す。保育者Bが「黙って取っちゃーダメなんだよ」と言うとカナは2回うなずく。保育者Bはカナを立たせて着衣を整えてやり、アイコンタクトを取って「先生が話しているときは目を見ながら話を聞くんだよ」と話す。それをユカが見ている。保育者Bはもう一度話を繰り返してからカナの体から手を放すと、カナは直ぐにそこから離れる。

ユカが保育者Bに食べ物の絵本を見せると、保育者Bが表紙のお菓子について話し始める。ナナとエリは一緒に座り、食材をやり取りして食べるふり、食べ物を勧めるふりをする。リカが2人の側に来て見ている。

タクはリエが使う鍋から食材を奪う。リエが「やめて、返して」と泣き声で抗議すると、タクは直ぐに投げて返す。

保育者Bがリカを検温のために連れて行くと、床にリカの使っていた鍋と食材が残される。そこにタクが座り、鍋に食材を入れて鍋を前後に動かす。ソウタが近づき「よせてー」と言うと、タクは無反応である。側にいたケンが「だーめーぶー」と言うが、ソウタは気にせずタクの脇に座る。2人は食材をやり取りして食べるふりをする。この間、エリ、

リエ、ナナも食材を食べるふりをしている。

【考察】食べ物を食べるふりのみを幼児のほとんどが繰り返しているだけである。その中でレプリカの食材を奪う行動がみられた。それはふだんの生活行動を再現するのにとどまっておき、新鮮味は低く、それほどおもしろいからであろう。こうした遊びをきっかけにして、おもしろい遊びを生み出すには保育者の具体的な援助が必要であろう。遊びが楽しく展開していくように、保育者が参加し、遊びの内部から援助する配慮が必要であろう。

適切な援助 いざこざ場面で、その前後の文脈から援助が適切と判断されるものである。

Ser.2-73 1月13日2006年 11:18～11:19 保育室-----

給食準備をしているとき、ケンが自分の鞆でアミの腕を叩く。側にいた保育者Aが「ケンちゃんこれで叩かれると痛い。アミちゃん痛かったよ。痛い分かるでしょう」と言うと、ケンは無言で下を向く。保育者Aが「じゃあ、先生がこれでケンちゃんを叩いていい？」と言うと、「嫌だ」と答える。保育者Aが「嫌だよね。アミちゃん痛かったよ。可哀想だね、痛かったんだよ。ごめんねしようか」と促し、ケンの手を取って「ごめんね」と言いながら、アミの頭を撫でさせる。保育者Aが「もう叩かないでね」と言うと、アミも「もう叩かないでね」と言う。保育者Aが「叩かないでねって言っているよ、叩かないでね」と言うと、ケンは直ぐその場から離れる。

保育者Aが大きな声でケンを呼び止め、ゆっくりした口調で「叩かないんだよ、叩かないんだよ」とケンに念を押す。ついでにアミに「あなたも叩かれないようにさっと逃げなさい」と言うとうなずく。

【考察】保育者は理由を聞くこともなく、ケンの暴力行為を注意している。それに対してケンは無反応で通そうとするが、保育者はそれを許さない。保育者に促されて謝るが、それは形式だけである。やればよいと言う態度に気づき、保育者は再度注意するが、どれだけで心に響くのであろうか、疑問である。しかしここでは保育者は、アミに許すことまで強要していない。それはアミの問題として、保育者がその判断を尊重するのも必要であろう。それによってケンに本当の反省を促すことにもなるかもしれない。またアミに攻撃されそうになったときに逃げるという対処の仕方を指導している。必要に応じて選択できることも大切である。

Ser.2-99 2月24日2006年 10:26～10:28 保育室-----

ケンが保育者Aに「レオちゃんがブロックを取らせない」と訴えると、保育者Aが「レオちゃんが使っていたって」と答える。ケンは自分の脇腹を左手で連続して叩き、泣き声で不満を表現する。

保育者Aが「なんでそんなことするの？先生、そんなことしながら言われるの嫌だ」と言うと、ケンは直ぐに黙り、ゆっくり歩いてレオの後に立つ。保育者Aが「レオちゃんも今使っているから後で貸してあげるよって言いなさい」と言うと、レオはうなずく。しばらくするとケンが「後で貸して、後で貸して」と叫び、レオの側から離れない。レオは困った表情をして黙っているとケンがブロックを奪おうとする。レオがその手をかわす

とケンハレオの背中を数回叩く。レオは反撃しない。

保育者 A が「叩いたってお友だち、貸してくれないよ」と言うと、ケンハ「嫌だ!」と叫ぶ。保育者 A が「じゃあ、ケンちゃんのこれ貸してよ、貸してよ」と言うと、ケンハ「嫌だ!」と叫ぶ。保育者 A が「嫌でしょう、そう言われたら。ねえ、だからお友だちの取らないで」と言うと、ケンはブロック収納コンテナの所へ行き、探し始める。

【考察】ケンは自分勝手な要求を通そうとする。しかし保育者がその要求に応じないし、自虐的行動にでて脅そうとしても動じないので、保育者を動かすことを諦める。それでも暴力でしか要求を通すことしか思いつかず、保育者に注意されると、泣いたり、泣き声をあげる。それを大人を動かす方略として意図的に使っているのが分かる。自分の使える方略では要求がまったく通らないと分かると、冷静になってブロックを探すことができるのである。ケンの自分勝手な要求、そのための稚拙な表現は、これまでの保育者の不適切な対応が促していたと推測できる。これをケンが克服しない限り、クラスメートから仲間として認めてもらえない。それができるように援助するのが保育者の役割である。

おわりに

2歳クラス期の遊びと仲間関係の特徴

子ども達の仲間関係は、ほとんどが遊びの中でしか示されなかった。すなわち仲間関係は遊びに依存しているものであり、そこで遊びを含めて仲間関係を考察していく。

男女児共に、調理道具や食器、食べ物などのレプリカを使って、いわゆる「ままごと」を頻繁に、長い時間やるが多かった。その遊びの中で、仲良く玩具の受け渡しをしたり、調理のふりをしてからお互いに料理を提供して一緒に食べるふりを楽しそうにしているが多かった。そうした友好的なかかわりとは反対に、レプリカを奪い合ったり、他児の盛りつけた料理を故意に崩したりすることもしばしばしていた。リカとカナは、そのときどきの気分で友好的にかかわったり、敵対的にかかわったりと変化が大きかった。他児に対して気遣いをするような社会性が育っていないことによると推測した。

また男女児共に、ヒーローやヒロインになったつもりで、架空の悪者を追うというイメージを持って走り回るのが好きで、しばしば行っていた。一人の子どもがヒーローに変身する音声を出しながらポーズをつけて走り出すと、それにすぐ同調して数人が同じように行動するのである。ときには武器に見立てた玩具を手を持つ場合もあった。何の打ち合わせもなく、事前了解はないのであるが、すぐに同調し行動していた。しかし、これは「ままごと」に比べれば、頻度は少ないし、継続時間は短い。表現するエピソードのレパートリーが少ないからである。

ままごとで表現する内容は、主に母親の行為の再現であるし、ヒーローやヒロインになって表現する内容は、主にテレビアニメやテレビドラマの再現であろう。当然、前者の方の知識が多くさらに詳しい。それが頻度と継続時間の違いになっているのである。

他児が使っている玩具を奪う行動がしばしば観察された。他児が使っている物に魅力を感じて、我慢できずに奪うこともあるだろう。しかし今回は、それ以上に、その物が欲し

いというより、他児を困らせるために物を奪うことが観察された。しかし、その相手の子どもが嫌いというのでもない。それは自分一人では遊べないので、時間をもてあまし他児に意地悪する場合と、他児の気を引き、かかわりを持とうとするための場合の2つのパターンが観察された。2歳クラス児では他児とかかわるという目的のために物を奪おうとすることもあったことが分かった。

また他児が使用している物が欲しくて奪おうとする場合、「人形が泣いているから、自分があやしてやるから貸して」とか「人形を肩車してやるから、自分に貸して」などと理由をつける場合があった。直接、奪う行動にできれば抵抗されるし、保育者に注意されることを十分理解して、こうした方略を取ったのである。

特定の子どもに対して仲間外れをしたり、仲間入りを拒否したりする場合が観察された。どちらもふだんから自分勝手に、力づくで物を奪ったり、遊びのルールを逸脱したり、意地悪をする子どもを排除しようとするものであった。保育者にそれを注意されれば、それを受け入れて形式的には仲間入りさせていたが、一緒に活動を進めることはなく、遊び仲間として認めていないことは明らかであった。

陰湿な雰囲気や嫌な気分するとき、おどけたりユーモラスな発話をして、場の雰囲気を一変させて和ませることがあった。意図的に行っているのか分からないが、そうした発話や行為が緊張した関係を緩ませ、他者との関係を修復することを2歳クラス期で経験的に理解し、実際にそうした場面で用いることができることが示された。

望まれる保育者援助

自分一人では遊べず、時間をもてあまして他児に意地悪する子どもがいた。そうした子どもが興味を持って遊べるように、保育者は子ども達の遊びに参加して楽しそうに遊ぶ様子をみせながら、おもしろく展開するように援助する必要がある。観察では、保育者が提案してリードした活動に子ども達はたいへん嬉しそうに参加していた。遊びの中で仲間関係が主に育つのであるから、子どもの自発活動としての遊びを尊重するといっても、保育者と共に遊ぶことは子ども同士の良好なかかわりの機会を増やすためにも重要である。

仲間入りを拒否した子どもに保育者が圧力をかけても問題は解決しなかった。拒否される子どもは周囲の子ども達に受容される行動様式を習得しなければならない。そのために保育者は仲間外れにされる子どもに、その子どもの言動の何が問題なのか、何を他児が嫌がるのかという原因や理由の理解を促すために、そうした状況が起きたときを、具体的に注意深く説明して指導する必要がある。

さらに保育者のいざこざの仲裁において、特に問題があった。それは、いざこざの解決を急ぐあまりに、事実確認をおろそかにして、子ども達のそのときの心情を配慮せずに、謝罪と許しの言葉を一言一言復唱させて指導していた。このような指導では、言えばよいという心情と態度を育て、心からの謝罪と反省を促すことはないであろう。

他児が使っている玩具を欲しくて力づくで奪おうとしたり、泣いて要求を通そうとしたりする場合、その子どもが奪おうとした相手の幼児を説得して、欲しがっている玩具を貸してやるようにし向けて、その子どもの要求を実現するのは基本的に誤りである。それでは欲求不満耐性が育たないばかりか、自分の要求を満たすために自分勝手な行動が許されるという誤ったメッセージを与えてしまい、結局、相手が譲歩しないと腹を立て、攻撃して

しまうようになるからである。そうしたことが繰り返され、仲間入りを拒否される子どもになっていくルートもあると考えられる。

幼児教育では子どもの欲求を基本的には満たすように援助するが、基本をはき違えてはならない。乳幼児の世界でも基本は人間社会の道理なのである。この道理をいざこざ場面でさまざまに援助しながら理解させていくことが望まれる。

第5章 3歳クラス児の仲間関係と保育者援助の実態

はじめに

本研究は3歳クラス児がふだんの生活の中で、どのように遊び、クラスメートとどのようにかかわっているか、その実態を明らかにし考察することを第1の目的とする。さらに子ども達の活動を支えたり、促したりしているクラス担任保育者の援助の実態を捉え、考察することを第2の目的とする。

3歳クラス期の仲間関係の特徴として、友達を求め、同じことを一緒にしたり、喜び合ったりと一緒に遊ぶことが多くなる。しかし一緒に遊ぶグループのメンバーは偶然で決まることが多く、そのときどきで異なるのが普通である。そうしたかかわりを通して、好みの活動が同じとか、気が合うとかで特定の子どもと一緒に遊びたがるようになる。この頃、自己主張が強く、いざこざがよく起こる。主張の目的が明確であり、それを記憶しているので保育者の簡単な仲裁では解決しないことが多くなる。相互の主張をよく聞いて、保育者が相手に分かるように言葉で解説したり、お互いの心情を説明したりするような、お互いに理解し合える丁寧な援助が必要になるであろう。また社会の基本的なルールを理解して、妥当な要求、不適切な要求を区別するようになり、次第に自分の欲求を抑制するようになる。いざこざを通して、他児の気持ちを思いやったり、感情を理解したり、玩具を譲ったりする自己抑制を身につけるのであろう。

3歳クラス期の子どもは基本的な運動機能の習得が完了しているので、激しい運動を伴う全身を使った遊びを好み、活発に活動するようになっている。また片足をあげながら、片足だけでジャンプしながら前進するケンケンような、2つの動きを統合した運動が可能になる。さらに例えば、高くジャンプをしようとするときには尻を落として身構えるという結果を予知した動きをするようになる。そして、全身のバランスを取りながら走り、合図で止まったり、方向を変えたりもできるようになる。脚の踏み込む力が強くなり、1人で三輪車をこげる。指先の運動分化が進むと同時に指の巧緻性が高まり、はさみで紙を1回切りしたり、マーカーなどで円や四角を描いたり、粘土をちぎったり、丸めたりする。

3歳クラス期のコミュニケーションの特徴は、生活場面の中の具体的な状況と関連して言葉で意思を伝えるのが中心で、具体的な状況的文脈や行動的文脈があって相手に意味を伝えられる。従ってそうした文脈が明らかでないとき、さらに現実と空想を混同して認識することもある。嘘を言うつもりはないのであろうが、説明が実際と異なることもある。言葉でイメージを思い浮かべられるので、言葉を使って集団での見立て遊び、つもり遊び、ごっこ遊びを進めるようになる。

このように3歳クラス期の子ども達は、クラスメートを意識して、一緒に遊ぶことが多くを占めるようになり、他者への思いやりや上手なかかわり方を学びながら仲間関係を広げ、深めていくのであろう。また子ども達のそうした学びを支え、促すのが保育者であり、保育者が行う様々な援助なのである。

そこで本研究では、子ども各個人の個性を捉え、クラスメートとの個人的な関係性を視

野に入れながら実態を把握するために、事例によって詳細に検討することにした。

方 法

観察対象者 幼稚園に就園する3歳クラス児24人（男児12人、女子12人）とクラス担任教師2人である。

観察期間 平成16年10月26日、11月2日・9日・16日・30日、12月7日・14日・21日、平成17年1月11日・18日、2月1日・15日・22日、3月1日・7日の合計15日間である。

観察方法 参与観察を行い、幼児に話しかけられれば応じ、保育者不在で幼児に困難が生じたとき（例えば、身体攻撃を繰り返し受けるなど）には手を貸した。登園後からおやつ前までの約2～2.5時間、主にDVDカメラで観察資料を収集した。保育者との話し合いを通して意見交換したり、幼児の家庭状況や注目すべき出来事などの情報を提供してもらい、考察する際により確実に解釈ができるように留意した。

分析方法 観察資料は、幼児たちの活動や保育者の援助が一段落したところで区切って、以下に示す(a)から(d)までの視点で文章化し、事例にまとめる。それによって子ども達の遊びとクラスメートとのかかわりの実態、保育者援助の実態を示して考察する。なお本研究では幼児名は仮名で記述し、2人の教師は保育者A、保育者Bと示している。なお実習生は実習生と記述するが、保育者として扱う。

(a)遊びの場の構築過程

(b)遊びの展開過程

(c)クラスメートとの行為、会話、視線、表情によるかかわり

(d)保育者による行為、会話、視線、表情を通じた援助

結果と考察

対象クラスの観察は水曜日に行い、水曜日の基本的な日課は、8:30～9:00に登園して身支度を整えた後、自発的な活動を中心とする時間を過ごす。10:40頃に片付けとなり、排泄、手洗いの後、11:00頃からおやつを食べ、12:00に降園となる。ときどき自発的な活動の時間を短縮し片付けの時刻を繰り上げて、保育者が提案する活動を行うことがある。なお朝の自発的な活動の場は、クラスの保育室を基本に園舎内のすべてと園庭であり、危険が予測されない限り、特に制限はない。

子どもの仲間関係では、友好的なかかわり、敵対的なかかわり、中立的なかかわり、そしていざこざにおけるかかわり、の4タイプに分けて考察した。

さらに友好的なかかわりは、親しくかかわる、同調行動をする、保育者の援助を受けて展開する遊び、仲間と協力して展開する楽しい遊び、順番を尊重する、の5項目に分類した。敵対的なかかわりは、身体攻撃する、物を奪う、場所を奪う、仲間外れにする、役割を奪う、相手を陥れる、馬鹿にした態度を取る、の7項目に分類した。中立的なかかわりは、他児に指図する、他児を注意する、他児に条件を付ける、同調行動をしない、楽しく

ない遊び、の5項目に分類した。いざこざにおけるかかわりは、ユーモアのある対応、不満が解消できない、気持ちを立て直す、他児（者）を援助してその相手を攻撃する、相手に従う、他児の関係を調整する、の6項目に分類した。

仲間関係を調整する保育者援助の実態では、場所を設定する、物を与える、仲間として参加する、身体接触で慰める、提案する、質問する、注意する、子どもの発言を解説する、子どもの発言を伝える、言葉で慰める、子どもの気づきを促す、行為を認める、共感する、13の項目に分けて考察した。

以下に、典型的ないくつかの事例（もしくはその一部分）を示しながら、かかわりの実態、援助の実態を考察する。なお事例は本研究での時系列順による連続番号、観察年月日、観察時間、観察場所を示してある。

友好的なかかわり

親しくかかわる 遊びや生活行動の中で親しく、やさしくかかわるものである。

事例 13 11月9日 2005年 10:40～10:44 廊下-----

アキ、ユミ、エリが廊下にある収納棚から紙芝居を出し、各自でケースから出して見ている。ユミが「これ、おもしろいよ」と言って、分かる文字を読んで2人に見せている。アキとエリは絵を指差し、ときどき話す。

【考察】文字を読めないが、保育者が読み聞かせしてくれたことを思い出しながら話している。読み聞かせをしている楽しい気分を共有して、会話をしているのである。

同調行動をする 相手の行動をみて、それを模倣して同じ行動するものである。

事例 17 11月16日 2005年 9:31～9:38 保育室-----

ユミとエリは「かみ、かみ」と言いながら、保育者 B の所へ行き、折り紙をもらう。折り紙6枚を持って、家ごっこコーナーに戻るとアキが来る。3人は折り紙の裏面にマーカーで文字を書く。ユミが「ユミのゆを教えてあげる」と、平仮名のゆを書いてアキに見せると、アキは「あはー」と笑い声を上げる。アキは「私はあをかける」と言って平仮名のあを書き、ユミに「これがあだよ」と言う。ユミが赤ちゃんの泣き声を模倣して出し、「おいちゃ（お医者）ちゃんやって、早く行こうよ」と言う。2人とも反応しないので、ユミは「今日は行かないぶ」と言う。それぞれ相手の様子を見て会話しながら文字や絵を書いている。

【考察】自分が書ける文字を書いて見せ、それぞれが思いついたことを話している。特に何かをするというのではなく、同じ行動をして、空間と時間を共有し、落ち着いた楽しい雰囲気を楽しんでいるようである。こうした活動はある程度親しい仲だから一緒にできるのであり、仲間関係を深めるのに必要といえよう。

保育者の援助を受けて展開する遊び 保育者の援助やリードがあって、子ども達が仲良く協力して進める遊びである。

事例1 10月26日2005年9:04～10:34 保育室前の廊下-----

保育者 B はナナ、ユキ、リエ、マミ、ケンタ5人と廊下の箱積み床を降りて病院ごっこをしようとする。重ねた積み木の上にいるレオが「積み木の上でやろう」と言う。保育者 B が「上は危ないから、床でやろうよ」と言い、人が通れる部分を残して囲い始める。それを見た子ども達も積み木を移動させ囲ったり、壁を作ったりし、さらに保育室から食器や布団など、ままごと用具を運んできて、病室の場を整える。レオが「みんな、本を集めてきて」と指示するが誰も従わない。レオは自分で絵本棚から何冊か持ってきて病室に置く。身支度を整えた子ども達が、次々に「入れて」とやってくる。先に参加している子ども達のそれぞれが「いいよ」と嬉しそうに返事をする。

アイがけがをしたふりをしたので、保育者 B が抱きかかえて布団に寝かせる。レプリカの聴診器を持ったテツオが診察するふりをしたが、すぐにやめてしまう。アイは寝たまま、女兒たちがアイの世話をしている。ユミが「注射しなくていいの？」と言うと、保育者 B が「注射しなくていいのだって」と周辺の子供達に伝えるが、子供達は何も答えない。ユミは立ったまま、世話をしている様子を見ている。

【考察】保育者が主導して活動の場所を決めて設定し、遊びに仲間として参加しながら、子ども達の意見を調整したり、アイディアを出したりして進展を支えていた。子ども達は保育者の言葉でイメージが明確になり、子ども同士でイメージを共有して活動し、会話することができた。そして遊びにおける他児の様子や発話によって、さらに各自が新しいエピソードを思い付き長い時間、集中することが可能になったのであろう。その中で必然的に他児と楽しくかかわる経験をしている。保育者の援助は、場所を設定する、提案する、子どもの発言を伝える、仲間として参加する、である。

事例33 12月14日2005年9:33～10:01 廊下-----

箱積み木で囲われた場所にアイが寝ている。保育者 A が「ピンポン、すみません、お邪魔していいですか？」と言うと、アイが「いいです」と答える。アミとリエは保育者 A を見ている。シンタは赤ちゃん役で這って脇を通る。コウタも這って一緒に行く。シンタはアイの脇に入る。保育者 A が「お客さん来ましたよ」と言う、アイは「こんなにいっぱい（人）いる」と言う。

シンタが這って行ってしまうと。保育者 A が「バブちゃん逃げたよ」と言う、コウタが追うが、直ぐに戻り「バブちゃん死んだわ」と言う、保育者 A 「えー死んだの？あー、走ってきた」と言う。シンタは走って戻る。

保育者 A とアイは、保育室にレプリカなどの物を取りに行く。シンタが赤ちゃんになって這ってアイの所に来ると、コウタも一緒に入る。アイが「だめ、座っちゃだめ、ここはテーブルなの」と言う。

保育者 A はままごと用のレプリカの入った箱を持って来て、レンジ台に見立てた所に置く。コウタが箱からいろいろなレプリカを取り出し、「パーティしよう」と言う。保育者 A が「さあ、パーティだ。じゃ、もっと持ってくるわ」と言う。コウタはレプリカの食材を皿に入れて、アイの前のテーブルに置く。アイはすぐに食べるふりをする。

コウタとシンタはアイと離れた場所を家に見立て、そこで寝転がったり、食事のふりを

する。レオが「入れて」と言うと、コウタは「座る所ない」と拒否するが、再度「入れて」と言うと了承する。

トモヤが「入れて」と言うとレオは「剣を持っている人はだめ」と言う。直ぐに保育者 A が「ここはアイちゃんがやっている所だから、アイちゃんに聞いて」と言う。コウタが「それ（剣）を持っている限りは入れてあげない」と言う。保育者 A が「これなければいいって、どうする」と言うとトモヤは置いてくる。直ぐレオは「いいよ」と言う。

レオがコウタの使うスプーンを取ろうとし拒否される。レオが「順番に使おう」と言うと、コウタは「いいね」と言う。子ども達はあちらこちらで食べるふりをしている。

【考察】子どもの多くが参加して展開したお家ごっこである。保育者がいるだけで、子どもにとって活動の魅力が高まる上に、子ども達の行為に、言葉を添えるので、状況を共通理解できるし、見通しははっきりするので、よりおもしろく感じるのであろう。楽しい雰囲気であり、子ども達は穏やかに他児とかかわる。だから自分が不利になるかもしれない順番に使うという提案をすんなり受け入れたのである。また家ごっこには剣は不要という条件をつけるが、使う物を限定して活動に集中するためであろう。こうした活動で積極的に仲間とかかわり、ポジティブな関係を経験することで、仲間のよさ、仲間との遊びの楽しさを体得するのである。保育者の援助は、物を与える、仲間として参加する、子どもの発言を解説する、伝える、子どもの気づきを促すである。

事例 43 2月15日 2006年 8:58～9:10 保育室-----

家ごっこコーナーの出入り口であった所にバーカウンターが作られ、カーテンが付いている。コーナー内でコウタが忙しそうに、調理道具やレプリカの食材を準備する。そしてコウタはコーナー外のバーカウンターの前に椅子を5つ並べると、保育者 B の手を引いてその椅子に座らせる。コウタは中に入って、「いらっしゃいませ、何にしますか」と言うと、保育者 B が「チーズバーガーとジュースをください」と言う。するとその会話を聞いたユキ、リカ、アイも椅子に座り注文する。テツオも中に入って、コウタと一緒に食材を皿に入れてカウンターに運ぶ。コウタは忙しそうに調理のふりをする。客の子ども達はしばらくすると他の子ども達と入れ替わる。

【考察】保育者がカウンターを作ったことで、子どもはそこを容易に家から店に見立てを変更したのであろう。そこで展開するエピソードは客から注文を聞き、それを調理して食事を提供するパターンになる。客が多くなれば、店の人の役割を演じる人数も多く必要となり、テツオまでもが協力して楽しく遊ぶことが可能になったのである。

保育者の活動は、場所を設定する、仲間として参加する、である。

仲間と協力して展開する楽しい遊び 保育者の援助にほとんど依存しないで子ども達が自発的に仲良く、協力して進める遊びである。

事例 11 11月9日 2005年 9:33～10:29 園庭-----

コウキとソウタ、タクミはシャベルとバケツをそれぞれ二輪車に積んで砂場に行き、シャベルを使って穴を掘る。直ぐにコウキは「やめた」と言い、他に行ってしまうが2人は

掘り続ける。しばらくして、コウキが戻ってきて「やっぱりやる」と穴を掘る。ある程度掘ると3人はビールケースと雨樋を取りに行く。水場の蛇口から水道水を砂場の方へ流せるように、ビールケースを台にしてその上に雨樋を乗せる。それをナオヤが見ている。タクミは水道水を流し始め、水がうまく流れるように樋を調整する。コウキとソウタはそれを見ている。ソウタは樋に枯れ葉を入れて流し、ナオヤは棒を流す。タクミはさらに樋を持ってきて、ソウタはビールケースを持って来て、樋を長くつなげる。しかし、高低が逆で、水は水道の方へ逆流して流れない。

実習生が来て、「流れないね、たくさんこぼれているね」という。タクミがリードして樋を調整する。ナオヤとソウタ、コウキは側で見ながら、ときどき手伝っている。ようやく水がうまく流れる。ナオヤとソウタ、コウキは樋に物を入れて流す。カナは黙って加わり水道の蛇口のホースをいじったり、水を自分のバケツに入れたりしている。ナオヤに「やめてよ」と言われると、そこを離れる。タクミはさらに樋をつなげて遠くまで流そうと工夫する。樋を4本つなげて満足し、樋にプラスチック製の小型の船や車などいろいろな玩具を流している。

次第に雨が強くなってきたので実習生が、「もう片付けして中に入ろう」と提案すると、5歳クラス男児1人が手伝ってくれて、すぐに片付け終わる。

【考察】5歳クラス児がこれまでに取り組んできた活動を模倣して行ったものである。子ども達は共通のイメージがあるために、活動の見通しを持って協力して行動できた。5歳クラス児がやっていたように、樋を長く繋げて遠くまで水を流し、その流れにいろいろな物を浮かべて流すことを楽しんだ。これだけの大規模な活動となると一人ではできないので、複数の子どもの協力が必要で、必然的に仲間としての意識を持つようになるであろう。

またカナは他児の活動でも、おもしろそうなときは黙って勝手に加わってしまう。それも協力するというよりも、自分の興味を優先させるために排除されてしまう。こうしたことが続けば、子ども達から不愉快な子どもとして意識され、仲間外れにされるようになる」と推測する。保育者の援助は子どもの気づきを促す、提案する、である。

事例 30 12月7日 2005年 10:00～10:10 廊下-----

ソウタとナオヤは積み木を積み、ヒーローが乗るバイクに見立てて遊んでいる。2人はバイクの性能を話している。レオが赤いポンポンを持ってきて、「これは炎だよ」と言うが、2人は乗ったまま相手にしない。レオはバイクの前に回り、前から覗く。そして「怪獣を見るためだよ」と言って、バイクの前にある積み木を動かそうとする。ソウタが「何するの」と言うとレオは「見えるようにしてあげる」と言って動かすと、積み木が崩れる。ナオヤが笑い、ソウタは「地震が起こった」と言う。レオが「ここ大火事」と側に来たコウキに言う。コウキとカナが加わり、楽しそうに周囲を走り回る。ナオヤもソウタも走り回って、積み木を崩しバイクを壊す。レオが「死んじゃえー死んじゃえー」と言いながら赤いポンポンをふり回す。それがナオヤに当たり「痛い」と言うと、直ぐにレオは謝る。

【考察】レオの「怪獣を見るため、見えるようにしてあげる」との発言で、ソウタとナオヤはイメージを共有したのである。それで積み木を崩しても苦情を言わずに、地震との

虚構をイメージし、関連して大火事との虚構を受け入れたのである。この見立てがおもしろく、ナオヤとソウタは自分が作ったバイクを壊した。レオが直ぐに謝ったのは、この活動が楽しく、気分が良いからである。活動がおもしろく展開すると、子ども同士の関係は良好になることが分かる。

事例 32 12月14日 2005年 9:00～9:09 保育室-----

コウキ、ソウタ、ナオヤ、タクミ、トモヤの5人が指回しコマを、繰り返し回している。自分が回すとき、「見てて、見てて」と言ってから回し始めるのを繰り返す。自分のコマが回っている間、「すげー、すげー」と言い合う。しばらくするとコウキが「俺名人」と言って回すと、他の子ども達も同じ言い、回している。

レオが来て、「入れて」と言うのと4人が「いいよ」と言うのにナオヤが「だめ、コマないよ」と言う。レオが「コマないんだもん、誰か貸して」と言う。ナオヤが「コウキ君、3つ（もコマ持っていて）ずるいよ。1つずつだよ」と言うと、レオが「みんな1個ずつだよ。見てごらん。先生に言ってきちゃおう」と言って立ち上がると、コウキがすぐに「じゃ、これ貸せる」と1個手渡す。レオは「きゃはー」と歓声を上げる。6人で座って回す。

各自がコマを回しては興奮気味に「やばい、やばい」「見てて、見てて」「わー、スゲー、スゲー」「友だちだー、友だちだー」と歓声をあげる。

【考察】指で回すコマが気に入って、男児達は毎日のように取り組み、回すのがかなり上手になっていった。勝敗を決めることはしないが、互いにより長い時間回り続けるように努力し、競う態度が見られるようになった。発する言葉や回し方を模倣し合い、遊び仲間という意識を持っていることが分かる。

コウキがしばしばやっていた保育者への告げ口を、他児も相手の譲歩を引き出すための方略として使用するようになった。ルール違反を指摘し、それを是正するための効果的な手段となっている。これは社会的ルールの遵守の意義を分かっていることを示している。互いにルールを守って仲良く、楽しく遊ぼうとしているのである。

事例 36 12月21日 2005年 9:56～10:28 保育室・廊下-----

シンタはコウタと家ごっこコーナーで段ボール箱の中に入って横になり、「眠い、もう寝よう」と言う。シンタが「にゃーにゃー」と言いながら箱から出て、畳に寝転がり、「川に落ちたんだよ。死んじやいそうなんだよ」と言う。コウタはレプリカの食材を示し、「これ猫のえさ」と言うと、シンタは「死んでるんだってば」と言う。コウタが食材を弁当箱に詰め始めるとシンタは「救急車頼んでにゃー」と叫ぶが、コウタは詰め続けるので、再度叫ぶ。しかし無反応なのでシンタは「目が覚めてね、川に流されていくんだ」と言いながら、這ってコーナーの外に出る。コウタは動かない。シンタは歩いて戻り再度説明すると、コウタは「戻ってきたんだね」と言う。シンタはその言葉に従いコウタの膝の上に寝る。コウタは「食べさしてあげる」と言うが食材を取ると、シンタは這ってコーナー外に出て、何度も「にゃーお」と言う。

レオがシンタに「何やっているんだ」と言うと、「猫になっちゃたー」と言う。レオが「がーおー」と言ってシンタの体を叩くとコウタが来て「だめだよ、シンタ君をやっちゃ」

と言って、コーナー内に連れ戻す。レオが「入れて」と言うと、コウタは「だめだよ。レオ君お兄ちゃん？」と問う。レオがうなずくと「いじめないでよ、お兄ちゃんというのは、すぐ怒ったり、いじめるんだよ」と言う。レオが「じゃ俺お父さん」と言うとコウタは自分がお父さんと言い、そこで2人ともお父さんとする。コウキが参加する。

コウタはシンタを押さえながら、「いじめないでよ、これ大切な人ならだから。今日は歯医者だからね」と言う。コウタは「猫はかわいいから箱の中に入れる」と言うと、コウキが「猫ちゃん」と言う。コウタが「呼ばないでよ」と拒否し、シンタを段ボール箱に入れ、仰向けに寝かせる。レオがシンタにヤカンで水を飲ませるふりをする、ヤカンの口がシンタの口に当たり、シンタが「痛いよ、そんなとがっているのを付けちゃ」と言う。レオは「ごめんね」と言うが、コウキは「先生に言ってきちゃう」と言って保育者 B に告げ口する。保育者 B は聞き流す。

レオがシンタを叩くふりで軽くタッチする。それを見たコウキがまた保育者 B に告げ口に走る。保育者 B が来て、子ども達に話を聞いてごっこ遊びの中の行為と分かる。

それから猫が病気になったり、夜になって眠ったり、キャンピングカーで出かけたりするエピソードを演じる。コウキが6年生のお兄ちゃんになって手紙を渡したり、学校に行ったふりをする。他児から妨害されたり、場所のことで言い合いになったりしながらも遊びを展開する。

【考察】コウタとシンタの2人が中心になり穏やかなごっこ遊びをし続けた。コウタは他児がシンタと乱暴にかかわろうとすると注意するなど大切にしているのが分かった。コウタとシンタは表現したいエピソードに違いがあっても、その違いを主張し合うのではなく、相手のイメージを受け入れてエピソードを修正していた。先週の大きないざこざからも、楽しく遊びを進めるために必要なやり方、かかわり方を学んだようである。

コウキは相変わらずで、しばしば保育者に告げ口するものの、保育者はほとんど取り合わずに聞き流している。しかし、そうしてもコウキは他児から排除されないのは、コウキの人付き合いのうまさ、遊びを進めるうまさによるものと推測する。

事例 37 12月21日 2005年 10:30～10:46 保育室-----

リエ、ユキ、アミ、アイ、マミ、リカの女児達が大型ブロックで囲われた場所に入って座っている。シンタが悲鳴を上げてそこへ入る。タクミがコウタを紐で縛ろうとすると、女児達とシンタは笑う。コウタは抵抗せずに捕まったふりをする。タクミがコウタを放すと、コウタはタクミと戦うふりをする。

タクミは「オオカミが来た。みんな避難所へ」と叫ぶと女児達は「キャー」「怖い」と叫ぶ。コウタは「オオカミ入っていくんだよね」と言い、中に入ると女児達は悲鳴をあげる。タクミは「みんな逃げるんだー」と言い、シンタは「アンパンマンやっつけて」と叫ぶ。ユキが「アンパンマン助けてー」と言うと全員が「アンパンマン助けてー」と叫ぶ。タクミが急いで廊下に出て行き、すぐに「タータッタタン」と言いながら、走ってやってくる。保育者 B と保育者 A が拍手をする。みんなが笑い、コウタも笑う。

タクミがこの廊下に行って、アンパンマンになって登場するのを繰り返す。その度に「アンパンマン助けて」と女児が言うと、見ている幼児も転げて大笑いする。

タクミがコウタをが組み合い、「みんなでオオカミをやっつけろ」と言うと、女兒達もコウタを取り押さえる。女兒が「よかったー」と言うと、タクミが「コウタ君をアンパンマンが殺した」と言う。コウタは「ブエ、ブエ、ブエ」と言いと苦しむふりをするのを、女兒が笑う。

シンタは「早く、早く」と叫ぶと、皆が逃げ出す。タクミが「持て」と言ってコウタを止め、また2人はもみ合う。女兒が「アンパンマン助けて」と叫ぶ。シンタが「ねえ、聞いて。バブちゃん1人死んだのね」と横になるが、誰も興味を示さない。そこでシンタは立ち上がって「逃げる、逃げるよ」と大声で言い、女兒と一緒に囲いの外に出ると、シンタは中に戻って、コウタを連れ出す。

女兒達は「やったー、やったー」と歓声をあげて囲いに戻る。シンタも「やったー」と言いながらコウタを追う。タクミとトモヤ、コウキがコウタを捕まえる。そしてタクミとコウタの取っ組み合いになる。シンタがまた、「逃げるの、逃げるの」と叫ぶが、女兒の多くは動かず、女兒2人が「アンパンマン」と叫ぶが、他は黙っている。タクミとコウタの戦いも終わる。シンタ、ユキ、リエがコウタの頭をなでる。

保育者 A が「コウタ君の味方増えてきたね」と言う。コウタが「僕ここが痛い」と言う。保育者 A がタクミに「アンパンマンで頑張ったけど、コウタ君はちょっと痛かったんだって、どうする」と問うと、タクミは「ごめんね」と言う。コウタも「ごめんね」と言う。周囲の子ども達は笑顔で見ている。ユキとリエが「汗かいちゃった」と言う。

【考察】タクミの一言で女兒のお家ごっことタクミとコウタの戦いごっこが合流する。コウタが悪役のオオカミを演じるので、女兒は必然的に自分達を弱いヒツジに、それを助けるヒーロー役をアンパンマンとイメージして言葉にした。その虚構が瞬時に共有され、経緯からアンパンマン役はタクミが演じ、他の男児は女兒を助ける役となる。それぞれが状況に合わせた言葉を書いて、それに従ってエピソードを作ったのである。子ども達はおもしろがって興奮し、楽しいひとときを過ごしたのである。コウタはここで自分が悪役を担当すれば、自分も他児もおおいに遊びを楽しめることを知ったはずである。

事例 41 1月18日 2006年 9:47～10:42 保育室-----

場所を大型ブロックで囲って確保し、ブロックの上に調理道具やレプリカの食材、その他手作りの家ごっこ用の玩具を並べ、ユキ、アミ、ユミ、カナ、が調理や食事のふりをする。アイとリエが食材を見ていると保育者 A が「お客様、お客様」というと、ユキが「違うでしょう、お家の人じゃないの、どうぞ」と言うので、アイとリエは中に入る。コウタ、ナナ、アキは「入れて」と言って許可を得て参加する。保育者 A がコウタに「あら、お父さん帰ってきたの」と言うと、コウタが「はい」と返事をするので、さらに「お疲れ様」と言う。子ども達は次々に「私お母さん」「私お姉さん」「私赤ちゃん」等と役割を宣言していく。保育者 A が出入り口になっている所に、ピンクの不織布でノレンを付ける。子ども達はそこを一軒の「家」に見立て、それぞれがその状況に合った会話をし、行動する。そこにいるばかりではなく、制作コーナーに行き制作したり、廊下や遊戯室に行き遊んで来て、ここに戻る。

アキが制作コーナーの床に倒れ込んでいるので、ナナが「どうしたの?」と問うが、無

反応で動かない。ユキ、ユミ、カナが集まり「病気だ」と言う。保育者 A が抱こうとするが重くて持てないというので、アキを浅い段ボール箱に入れて、それを救急車に見立て、家ごっこコーナーに運ぶ。コウタがレプリカの聴診器を使って診察する。他の子ども達は周囲で見ている。ユミが「家」から電話を使い、コウタがこのコーナーの電話を使い、患者の家族と医師のような会話する。このコーナーではブロックをパソコンに見立てたり、箱をレジに見立てたりしている。「家」ではトランプをしている。

長い間、眠ったふりをしていたアキが目を開けて立ち上がると皆が歓声をあげて喜ぶ。

【考察】 女児達が広い場所を確保し、それぞれがイメージしたエピソードを行為と発話で表現している。保育者がお客様と言ったのは、そこを子ども達が店に見立てていると推測したからであろう。それに対するユキの一言で、そこは一軒の家という虚構の枠組みが明示された。コウタが参加したので、保育者は直ぐにお父さんの役割を暗示する言葉で話しかけ、コウタが了解する。こうして参加する子ども達は家のイメージを共有し、家族の役名を取得し合ったのである。保育者が出入り口の門にきれいな色のノレンを付けたことで、視覚的にも楽しい雰囲気となる。子ども達はここを拠点として、いろいろな場所に出かけ、そこで適した遊びをしては戻り、また出かけるというふだんの実生活のようなパターンでエピソードを進行させたのである。

アキが倒れ込み、まったく動かないという演技を長時間続けたことで、病院ごっこが展開する。それは保育者が意図的に重くて持てないふりをし、段ボールで運ぶことを促して救急車のイメージを持てるようにしたからでもある。病院ごっこが一段落すると子ども達は家ごっことリンクさせて、さらに複雑なエピソードを進行させたのである。

子ども達は活動に興味を持ち、さまざまな役割を担いながら、多くの人と会話し、行為でもかわりを持ったのである。保育者の援助は、場所を設定する、質問する、子どもの気づきを促す、である。

事例 42 2月1日 2006年 10:18～10:24 保育室-----

家ごっこコーナーでアキ、エリ、ユミが大型ブロックをテーブルにして、そこで調理をしたり、食事をしたり、絵本を読んだりしている。アキが「出かけよう」と言うと、エリはアキと一緒に大型ブロックに座り、絵本を見始める。ユミはブロックの先端に座りハンドルを持ったような手ぶりをし、さらにとときどきそれを回転させるふりをする。しばらくしてユミは白い液の入ったペットボトルをアキに渡すとアキはそれを飲むふりをする。ユミはまた先端に座り運転のふりをする。しばらくするとユミ「着いたわよ」と言うと、3人は立ち上がって「さあ遊びに行くよ」と言って廊下にする。

【考察】 3人は家ごっこをしていたが、その場を自動車に見立てて、移動しているイメージを共有して固定乗り物ごっこをしたのである。子ども達は家族を演じながら目的地に着くまでのエピソードをそれぞれが展開する。それぞれが家族でドライブした経験に基づき、役割に適切な行為と発話をしたのである。目的地に着いたと言っでは、他の場所に行って遊び、また自動車で移動するという筋立てて活動を続けていた。

事例 45 2月15日 2006年 9:37～9:41 保育室-----

コウタが手指を立てて両手を前に構え、「がおーがおー」と吠えながら周囲の子ども達を追いかけて、ユカ、リカ、リエ、アイ、マミ、テツオをトイレの隅に追い込む。コウタが吠え、子ども達は笑顔で悲鳴をあげる。タクミが「大丈夫」と言いながらコウタと子ども達の間に戦うふりをする。コウタが保育室に戻るとコウキがコウタを攻撃し揉み合いとなる。コウタはコウキとタクミの攻撃を振り払っては、他児を脅かすふりをする。

【考察】コウタが自分から悪役の怪獣となって、大袈裟なふりと声を出して周囲の子どもを追う。子ども達は遊びと分かっている、その虚構に従い、大袈裟に恐がって逃げる。すると弱者を助ける正義のヒーローが必然的にイメージされ、直ぐにその役をする者がでてきた。そして、男児が大好きな戦いごっこになる。ヒーロー役だけの戦いごっこより、悪役がいる方がより具体的にごっこ遊びとして展開することが分かる。子ども達は、こうしておもしろい遊びと時間を共有して、仲間関係を深めることができるのである。

事例 46 2月22日 2006年 9:58～10:45 保育室・廊下-----

保育室内の大型ブロックで囲った場所に子ども達 12 人が入ってそれぞれが思い思いに遊ぶ。アミが「嫌だ、こんなにたくさん入っていて」と言うので、保育者 A は廊下に出て、箱積み木を並べて場所を囲い始める。するとタカオとカナが手伝う。同じようにナナ、ユカ、ユキは自分達のごっこ遊びの場所を作り始める。

保育室内の場所ではアミ、アキ、タクミが遊んでいる。ときどきナナとユキがその様子を見に来ている。廊下の場所ではレオも加わり、家ごっこの枠が出来上がる。保育者 A がナナに「アミちゃん達は何してた。今度遊びに行くね」と話す。それを聞いたユキが「だめだよ」と言う。保育者 A が「赤ちゃんがお腹空いたって」と言うとユキは「まだ、だめです」と言う。

保育室内ではアキがレプリカを移動させて店のように配置する。ナナが廊下から布団を持ってきて敷く。何度か4歳クラス男児が棒を持って攻撃のふりをする。アミとアキが追っついていき、しばらく遊んで戻ってくる。2人は「またルカッピチョッピが来るよ」などと話している。他の子ども達も遊戯室や広場では走ったり、戦うふりをしては、それぞれの場所に戻っては、そこでごっこ遊びをする。

こうした遊びを片付けになるまで続けている。

【考察】多数の子どもがイメージを共有して、同じ場所で遊ぶようになり、一人が使える場所が狭くなり、活動しにくくなる。だからといって子ども達は自分が今、遊んでいる場所を放棄し、新しい場所を作ろうとは考えないであろう。そうするには保育者の援助が必要なのである。2カ所で家ごっこが進展すると、それぞれを拠点として、互いの遊びを見て模倣したり、アレンジしたりして自分達のエピソードに取り入れていき、複雑な内容となり、さらに活動がおもしろくなる。おもしろくて楽しい活動の循環の中で仲間関係を経験し、深めていくのであろう。保育者の援助は、場所を設定する、仲間として参加する、質問する、子どもの気づきを促す、である。

事例 47 3月1日 2006年 9:01～9:13 廊下-----

コウタが「がおー」と吠えながら、ナナとユカを追う。2人は多目的室入り口の物陰に隠れる。コウタが近づき、2人をオーバーな動作で捜し見つけては吠える。2人は歓声をあげて「助けて」と叫んで、廊下を走り、また多目的室の物陰に隠れる。コウタがしばらく来ないと、2人は様子を見るふりして自分たちの姿を見せて気を引く。これを何度か繰り返してはおもしろがっている。

【考察】コウタはしばしば悪役の怪獣となる。自分がそれを演じるだけで、他児とおもしろい活動を展開できるので、自分も楽しいし、他児も喜ぶので自己効力感をもてるのであろう。他児はコウタが悪役をしてくれるので、遊びが楽しくなることを知っているが、自分が悪役をするまでには至らない。実際と役の区別が、はっきりしないからであろう。こうして遊びが楽しく展開し、そこで仲間関係を育んでいくのである。

事例 48 3月7日 2006年 9:14～9:17 廊下-----

ケンタとハルオが紙筒の長い棒を持って、戦いのふりをする。しかし、実際には棒で叩いたり、相手と接触したりすることはない。戦いの格好をするものの、爆発音や発射音を言葉で表現したり、かけ声や攻撃したときや攻撃を受けたときの台詞を言ったりしている。笑顔で楽しそうにやっている。

【考察】2人はまったく身体接触をせずに、ふりと擬音、台詞だけで戦いごっこを進展させている。戦いごっこのふりといっても、ときには棒や手が相手の体に強く当たれば痛くて、それで本当のいざこざになることある。これはそうしたリスクを避けるためであろうし、確実にイメージしてそれでも十分楽しめるほどになっているからできるのである。痛みのない、楽しい戦いごっこは相手も自分も尊重することでもあるといえよう。

順番を尊重する いざこざ回避ために、玩具を順番に使うルールを提案し従うものである。

事例 22 11月16日 2005年 10:40～10:42 保育室-----

家ごっこコーナーでコウタとテツオがレプリカの聴診器を取り合っていると、コウキが横から奪おうとする。保育者 A が「引っ張ると壊れる。幼稚園のだよ、壊れたら直してね」と言う。さらにソウタが奪おうとする。コウキは「壊れるよ」と言うが、自分は引っ張り続け、さらに「離して、離して。コウタ君も離して、園のだよ」と言うと、コウタとソウタは手を放す。保育者 A がテツオに「貸してって言ってないからだよ」と言うと、テツオは直ぐに「貸して」と言う。するとコウキは直ぐに「いいよ」と答え手を放す。テツオは聴診器を耳に掛ける。コウキは「次は俺に貸して」と言うと、ソウタは「その次は俺に貸して」と言う。テツオは保育者 A の上半身に聴診器を何度か強く押すように当てるので、保育者 A は「いたた、それじゃお医者さんじゃないよ」と言う。

コウタが「腹痛い」と言い仰向けに寝る。コウキがテツオから聴診器を取ってコウタの腹に当てる。保育者 A が「やさしくね」と言う。コウタはくすぐったがり、大声で笑う。ソウタは「貸して、貸して」と言って、コウキから聴診器を取る。コウタが「ソウタ君、口にやって」と言うが、聴診器を腹に当てて、コウタが笑う。コウキがコウタの腹をくす

ぐる。コウタは立ち上がり、コーナーから出て行く。

【考察】力づくで聴診器を奪い合いながら、園の物、壊れる、と牽制しながらお互いに自分が使おうとする。テツオが貸してという、コウキはほぼ反射的にそれを了承してしまう。それは保育者が側にいて、そうするように言ったことであり、従わなければならないとの思いがあったからであろう。それから「次貸して」という言葉が出ると子ども達はすんなりとそれを受け入れる。それによって、順番に聴診器を使うようになって、友好的な雰囲気となり、その状況にあったふりを自発的にするようになり、遊びとなっていく。保育者の援助は、注意する、子どもの気づきを促す、である。

敵対的なかかわり

身体攻撃する 意図的に相手を叩いたり、つねったりして攻撃するものである。

事例2 10月26日2005年9:34～9:51 保育室-----

アキとアミ、エリは廊下の病院ごっこを見て保育室に戻ると、アキが床に伏せて横になる。アミとエリは座り、アキの背中を撫でる。アミが廊下にいる保育者Bや子ども達に「アキちゃんが死んだ」と言う、ユミが様子を見に来るがすぐに戻る。

3人は保育室内に積んである大型ブロックの上に登る。アミは「いいよ、私お姉ちゃん」と言うと、降りて行ってしまう。アキとエリは「ばぶーばぶー」と言う。アキが「バブちゃん」と言いながら、エリの頬を指で引いたり押したする。エリの持つマーカーに気づくと無理やり取り上げる。エリは取り返せないのので「返してね」と言うが、アキは返事もしないでいじっている。

アミが戻ると2人はアミに付いて歩く。アキがエリの後に回って、エリを数回叩く。エリは「嫌だ、何で」と泣き声で抗議するが、アキはやめない。エリが「嫌だ」と強く言うと、アキはエリと正対して顔をみる。エリが離れようとする、アキはエリの腕を両手でつかみ、強く握る。するとエリは明るい声で「ちょっと待ってて」と言うと、アキが手を放したので保育者Aの所へ行く。アキがすぐに側に来て、様子を見ている。エリは「今日もほっぺが痛い」と言う。保育者Aが「昨日で直っちゃったでしょう」と言うが、エリは「まだ痛い」と言う。その間にアキは家ごっこコーナーに行き、そこからエリを呼ぶ。エリは保育者Aから湿布を頬に付けてもらい、保育者Aの側にいる。

【考察】アキは他児が見ていない2人の状況になるとエリから物を奪い、身体攻撃をした。その理由は明確ではないが、廊下の病院ごっこを真似しようとしたがおもしろく遊びが展開できず、やることがないので、ついエリに対して敵対的かかわりをしてしまったのであろう。しかし、エリは保育者にそうした経緯をまったく話さなかった。ここで告げ口をすれば、保育者がアキを注意するだろうから、それでアキとの関係が悪くなってもっと攻撃されることを恐れたのであろう。エリはこれまでのアキとのかかわりで、その性格と行動パターンを知っていて、自分が我慢して穏便に解決する方法を取ったと考える。エリの「ちょっと待ってて」と言って離れる方法を取ったのも穏便に逃れるためであろう。これまでもエリはアキから繰り返し嫌な事をされてきたと推測できる。保育者の援助は、身体接触で慰める、言葉で慰める、である。

事例 14 11月9日 2005年 10:51 保育室-----

レオは実習生から片づけを頼まれると快諾して、廊下の箱積み木を片付け終わる。レオが保育室に入ると積んである大型ブロックの上にアミとユカ、その下にナナ、アキがいて楽しそうに会話している。実習生が4人に「みんなお片付けできた」と問うと、レオが3人に向かって、「乗っちゃだめだよ、すぐ降りる」と大声で注意すると、3人は困惑する。実習生が3人をなだめるとアミが「降りようと思っていたの」と言うので、実習生が「そうだよね」と言う。その様子をユミとエリ、レオが見ている。

実習生が「お片付けが終わったら、おやつだよ」と言うと、子ども達は手洗いシンクに行く。しばらくしてユカ、アミ、ナナ、ユミ、エリが実習生に、レオが後ろから押した、と訴える。それを聞いたレオはすぐに「やってない」と大声で叫ぶので、ユカが大声で「でもアミちゃんを押した」と言い返す。アミが涙ぐんでいるので、ユミとエリがアミの頭を撫でる。実習生がレオに質問すると、「どいてっていただいだけだよ」と答える。ユカが「違う押したよ。ユミちゃん、エリちゃん、ナナちゃん、アキちゃんは見えたよね」と言うと言わずく。レオが「言ったよ。聞こえていないだけだよ。うそつき、うそつき」と大声で叫ぶ。ユカとエリが「違う、うそじゃない」と反論すると、レオは「うそ、うそ」と叫び、聞き入れない。ナナ、ユミ、エリが声をあげて泣き出すとユカも泣き始める。

保育者 A が「ちょっとお話を聞かせて」とレオを連れていく。保育者 A がいろいろ質問するとレオは「押していない」と言い張るが、しばらくすると「押していないけど触っちゃった」と言う。保育者 A が「そうか分かったよ、それでごめんねできる？」と言うと、レオは「できる」と言って女兒達の所へ行く。レオが「ごめんね」というと女兒達は憮然としている。保育者 A がアミと他の女兒に説明すると落ち着いた表情になる。

【考察】レオは実習生に依頼された片づけをやり遂げたことに誇り感じ、さらに実習生が自分を認めていると思っていたのであろう。そうした心情から自分が実習生に代わって片付けもせずに遊んでいた女兒達ことを注意するのは許されると予想したのであろう。しかし、その予想に反して実習生は女兒を叱らずに共感し、慰めたのである。それをレオはおもしろくないと感じて、身体攻撃をしたと推測する。しかし、女兒達がそれを実習生に訴え、それが認められれば今度は自分が悪い方になってしまう。それは何とか避けなければならない、相手を嘘つきと大声で反論したのであろう。それでも女兒達は泣いても屈しないし、保育者に問われて、これ以上、嘘を言い張れないと感じたのであろう。ときどき自分勝手な行動をしてしまうレオは大声で主張することをしばしばしてきた。しかし大声で主張しても嘘を言い張るこのやり方ではうまくいかないことを知ったであろう。これはレオには対等な仲間関係を築くために大切な経験となった考える。保育者の援助は質問する、共感する、提案する、子どもの気づきを促す、言葉で慰める、子どもの発言を解説する、である。

物を奪う 相手の使っている物を奪ったり、奪おうと試みるものである。

事例 23 11月16日 2005年 10:48～10:52 保育室-----

ソウタが大型ブロックを片付けようと持って移動していると、ナオヤが横取りして取り

合いになる。ソウタが泣き出すと保育者 A が来て、「2 人で持つ嫌なんだ。1 人で持たたいの?」と問うとうなずく。

保育者 A がソウタをなだめ、ナオヤを説得してその場を離れると、また 2 人は取り合いを始める。シンタは「がんばれ」と 2 人を声援する。保育者 B が「けがするよ」と 2 人を離し、ナオヤをなだめる。その間にソウタがブロックを持って行き、片付ける。

【考察】ソウタとナオヤはふだんは一緒によく遊び仲がよい。それでナオヤはソウタが大きなブロックを運んでいるのを手伝おうとしたのであろう。しかし、ソウタは 1 人で運んで保育者に認めてもらいたかったのも、ナオヤの援助は妨害と感じたのであろう。保育者の説得を受け入れたように見えたナオヤであったが、納得はしていなかったのである。ふだん仲間がよいと言っても、相手が了承しない勝手な行動をしては拒否される。保育者の援助は、子どもの発言を解説する、注意する、である。

場所を奪う 先に活動していた子どもを追い出して、その場所で遊びを進めるものである。

事例 29 12 月 7 日 2005 年 9:07 ~ 9:14 保育室-----

タクミとコウキが家ごっこコーナーに入ろうとすると、ユキが「そこから入ってはダメなの。決まり守ってくれないかな」と言う。すると 2 人は玄関に見立てられた所から入り直す。コーナーの中ではユキとリエ、アイがいて、レプリカを使って調理のふりをしている。タクミとコウキはそれぞれ「僕、お父さん」と言って台の上に立つ。タクミは「僕、お父さん、とう!」、コウキは「僕、おじいさん、とう」と言って跳び降りる。それから 2 人は台に乗っては跳び降りるのを繰り返す。ユキが「何してるのよ」と言うと、タクミは「うるさい、おまえ」と言い返す。コウキが「入れて」と言うと、タクミが「いいよ」と答える。男児達は歌をうたい、ヒーローのふりをする。しばらくすると女児達はコーナーから出て行く。男児達は、そこでヒーローになって戦うふりをしたり、調理のふりをしたりしている。

【考察】男児達は意図的ではないものの、結果的に遊ぶ場所を奪ってしまった。男児達はヒーローのふりをする動きの激しい活動であり、女児達の調理をして食事をするごっこ遊びとは相容れない。ユキの「何しているの」との発言は、男児に自分たちの遊びの枠組に合うような行動をして欲しいという意味である。それに対するタクミの発言は、敵対的であり、興奮しているので、ユキは自分の要求に従わないと判断したのであろう。さらにコウキが参加し、男児達の行動はエスカレートする。女児達は不本意ではあるが、遊びと場所を放棄したのである。

仲間外れにする いつも自分勝手な行動をする子どもを意図的に排除しようとするものと、自分の都合で相手に意地悪をするために排除しようとするものである。

事例 7 11 月 2 日 2005 年 9:21 ~ 9:32 保育室-----

家ごっこコーナーで、ユミ、エリ、アキ、ナナ、ユカが折り紙で制作している。保育者 A に伴われカナが「入れて」と言うとユミが「いいよ」と答える。

保育者 A が座るだけで子ども達は活気づく。ユミとナナが制作した物を保育者 A にみ

せると、アキは「バブちゃんはこれ作った」と言う。アキ、ユミ、ナナは保育者 A の膝に乗る。カナはコーナー内を探索して歩く。ユミがペットボトルを哺乳瓶にしてアキに飲ませるふりをし、カナは別のペットボトルを取って自分が飲むふりをする。

ユミは「見て、先生」と言い、調理道具をみせる。保育者 A が「料理してくれるんだ」と言うとユミはうなずき、調理のふりを始める。その間、アキは保育者 A の膝に乗りペットボトルを哺乳瓶に見立てて飲むふりをする。ナナが「バブちゃんもお手伝いして」とアキを促し、調理するふりを始める。カナは周辺を見ながら、ゆっくり歩く。

ユミが「先生、箱ください」と言うと、保育者 A は「じゃあ、探してくる」と言って立つ。その間にカナはアキに「入れて」と言うと「だめよ」と断られる。カナは保育者 A に「入れてって言ったのにだめよと言われた」と保育者 A に訴える。保育者 A は「そんなことないよ、もう 1 回言おうよ」と言うが、カナは保育者 A の側にいる。保育者 A は箱を見つけるとそれをカナに渡して、「ユミちゃんに届け物してください」と依頼する。カナは箱の中を見たり、触ったりした後、テーブルに置きベランダへ行く。保育者 A は箱を持ってコーナーに戻り、「カナちゃんからだよ」と言ってユミに渡す。

【考察】カナは活動に入れてもらっても、他児とかかわったり、同じ様な行動をせずに、一人でコーナー内の玩具を触ったり、歩き回ったりするだけである。他児がカナを自分の活動に誘わないのは、カナが歩き回るのを邪魔に感じているからのようである。カナはそれで疎外されていると感じて再度、入れてと言ったのであろう。

保育者がカナに箱をユミに届けるようにしたのは、カナが遊びに参加し易くするためであろう。しかしカナはすでにその遊びには興味がなくなったようである。このような行動を他児は自分勝手な行動をしていると見て受け入れないのであろう。保育者の援助は、仲間として参加する、提案する、物を与える、である。

事例 25 11 月 30 日 2005 年 10:17 ~ 10:31 廊下・遊戯室・広場-----

ソウタとナオヤは積み木で乗り物の座席を作って、固定乗り物ごっこをしている。テツオが近づくと 2 人は「来ないで」と拒否するので、離れていく。コウキが「入れて」と言うと、「ここいいよ」と席をあける。ソウタが「セフティライダーごっこだよ。おれ、セフティレッド」と言うとナオヤは「セフティブルー」と言う。コウキは「じゃあ、僕はー？」と問うとソウタが「セイザーレッド」と言い、いろいろなヒーローの名前を言う。テツオが近づいて乗り物の積み木を触ると、ソウタが「触らないで」と言うと直ぐに離れていく。それからまた、いろいろなヒーローの名前を言い、こっちが強いなどと言う。

【考察】テツオを無条件で仲間外れにする。これまでテツオは遊びに入るものの、その遊びに適した行動をあまり取らないし、興味が薄れると直ぐにやめてしまうことがあった。そうした態度を他児が嫌い、排除するのであろう。コウキは陽気で自分で遊びを進められるし、遊びに積極的に参加するし、一緒にいるとおもしろいので簡単に仲間入りを認めたのであろう。仲間入りができるかどうかは、ふだんの行動や遊び方に対する評価によって決まることが分かる。

事例 27 11月30日2005年10:36 遊戯室-----

タクミとソウタは手作りボールでサッカーしていると、テツオがボールに手を出す。2人はすぐに「触らないで、やっちゃだめー。どっか行って」と拒否する。しかし、テツオは2人の周囲をゆっくり歩いている。

【考察】ソウタはタクミの手作りボールでサッカーのふりをして遊ぶことになる。2人はテツオが近づくとのかかわりを拒否する。しかし、テツオはやることがないので側を離れない。テツオは自分がなぜ他児からかかわりを拒否されるか、気付かなければならない。そして相手に受容されるかかわり方を身につけるように努力する必要がある。それには保育者によって他児から自分の行動がどのように見えるのか、自分のどこが問題なのか、具体的にどのように直したらよいのかを説明してもらい、さらに努力すればできるという励ましという援助があつて、可能になっていくのであろう。

事例 31 12月7日2005年10:27～10:40 保育室-----

アキ、ユミ、エリ、マミ、カナ、リエの6人が手をつなぎ、「なべなべそーこぬけー」と歌い始めると、カナが喜びの大声をあげ、床に寝転がる。カナを除く5人が手をつなぎ、また歌い始める。するとカナは一人で歓声あげ、床に寝転がる。

ユミ「一回休み」と言って紙芝居を見せる準備をして、「行くよー」と言って読み始める。カナは別の所へ行く。4人は床に座り見ているが、ユミは読めないで、アキが「後で先生に読んでもらおうか」と言う。ユミが「なべなべしようか」と言う。

5人が立って手をつなぐと、離れていたカナが加わろうと近づくと、ユミが「カナちゃんは無しで」と言い、5人で始める。それでもカナが入ろうとすると、再びユミが「カナは無し」と言う。歌の最後に体をひねった所で皆が笑うと、またカナが加わろうとするが拒否される。5人がうたい終わり笑って床に寝転がると、カナは歓声をあげてその中に入って寝転がる。ユミが「カナちゃんが顔に当たって痛かった、ごめんねしな」と言うが、カナは笑っている。ユミが「今度は2人と3人でやろう」と言うと、またカナが入ろうとするので、ユミが「カナちゃんは無し」と言うとなカナは離れる。何回かやった後、5人がベランダに出るとカナも付いて行く。

【考察】カナは興味が薄れるとすぐに勝手な行動を取るし、嬉しいと大げさに騒ぐ。それを一緒にいる子ども達は、同調行動を取らず、邪魔になると感じ、仲間外れにするのであろう。はしゃぐのも周囲の子どもと合わせる必要がある。またふざけてぶつかり、相手に謝罪を要求されても、笑っているのは不適切である。カナはこうした経験を通し、他児と同調した行動を取る必要に気付かなければならない。

事例 34 12月14日2005年10:26～10:31 保育室-----

シンタが足の擦りむいた所を保育者 A に絆創膏を貼ってもらっている。コウタが「もう1度見せて」と言う。保育者 A「もう止めようよ。意地悪だわー。今、見たよ。いっぱい傷付いていたよ。もう大事しとこう」と言う。コウタはふてくされて行ってしまう。保

育者 A はシンタに「キズ絆貼ったから遊んでもいいよ。コウタ君はシンタ君と遊びたんだわ、きっと。行ってごらん」と言うとシンタはコウタの所へ向かう。

シンタがコウタに「遊びたい」と言うと、コウタは「遊べない。今、僕がここにいるから、ちょっと邪魔しないで」と言う。シンタは「もう、コウタ君なんて」と怒って言い、離れていく。コウタは廊下でごっこ遊びが展開している所に行き箱積木を積み直し、「できた」と言いい、その積んだ積木を持って保育者 A の側に持って行き積む。

【考察】コウタが何度もシンタの傷を見たがったのは、好奇心かもしれない。しかし、治療が終わっているのにそれを要求するのは、シンタからすれば意地悪となるので、保育者はそのように発言したのであろう。しかしコウタは怒ってしまい、その怒りをシンタに向けて、シンタの遊ぼうという申し出を拒否する。これは意図的な仲間外れである。コウタは保育者がシンタの味方をしたように感じて、シンタに嫉妬したのであろう。だからこそコウタは自分を意地悪と言った保育者との関係を修復しようと側にいったと推測する。保育者の援助は注意する、子どもの気づきを促す、提案する、である。

事例 35 12月14日 2005年 10:48～11:10 保育室・遊戯室・廊下-----

片付けをしていると、シンタがコウタに向かって「コウタ君なんか嫌いだ」と言って走って離れる。その後をコウキが追ってきて「嫌いだなんて言って、いけないんだ、言いつけちゃおうかな」と言う。シンタは「いいんだよ」と言い返し、口論になる。シンタは「もう、コウタ君なんか放っておいていいもん」と言うと、コウキは「じゃ放っておけ」とはやし立てる。コウタがシンタを追うので、シンタは廊下へ逃げる。

シンタは片付けようと箱積木を持つと、コウタがそれを横取りし、片付ける。シンタは「僕が片付けるのはだめなの、そうなの」とコウタに泣き声で問うが、コウタは返事しない。シンタが別の積み木を持つとまたコウタが奪う。それでもシンタはソウタと一緒に積み木を片付ける。

コウタとコウキは片付いた積み木の山に乗っていると、コウキがコウタにお片付けしないと苦情をいう。コウタはふてくされて保育室に戻る。

シンタが片付け終わって保育室に戻ると、保育者 A がごっこ用のドレスを遊戯室に片付けるように周囲の子ども達に依頼する。シンタ、コウタ、タクミが受け取って遊戯室へ持って行く。

遊戯室の所定の場所に収納した後、コウタがコウキと一緒に「シンタ君と一緒に嫌だ」と言って走っていく。怒ったシンタが2人を追い、「何だよ、アッカンベー」と言う。テツオが後ろから走ってきてシンタの肩を叩くと、シンタは廊下の床に泣き崩れ、「コウタ君なんて嫌だもう」と言う。ソウタとタクミが理由を聞く。そこへコウタとコウキが戻って来るとタクミは「いけないんだ」と非難する。コウキは「逃げただけだよ」と言うと、シンタは「僕は悪くない」と叫ぶ。コウタは「僕は悪くない」と言うと、コウキは「そうだコウタ君は悪くない」と言う。タクミは「そうだ、先生に言ってくる」と言って走って行くと、コウキが後を追う。

タクミが保育者 B に「シンタ君が何もやっていないのにコウタ君が逃げた」と言う。コウキは離れて見ている。保育者 B はタクミと話して何度か確認し、シンタが何もして

いないのに、嫌がらせにコウタとコウキが何かして泣かせたことを知る。保育者 B は「じゃあ聞いてこよう」と言うと、テツオが「廊下にいるよ」と言う。保育者 B は保育室入り口にいるコウキに問うと、コウキはしばらく下を向いて黙っていたが、「コウタ君と 2 人で仲間外れにした」と言う。

廊下でレオがコウタに「いじめちゃだめだよ」と責めている。コウタは泣きそうな表情をしている。シンタは側で泣きながら叫んでいる。コウタが「シンタ君が僕のこと泣き虫と言ったから」と言うとシンタは「言っていない」と言う。コウタが「シンタ君が僕のこと泣き虫と言ったら、僕は泣いちゃうじゃん」と言い、次第に泣き出す。保育者 B がシンタに「タクミ君から聞いたけど、コウタ君とコウキ君から何かされたの？」問うと、「ドレス片付けようとしたら、2 人が逃げて行った」と答える。保育者 B はコウタ、シンタ、コウキ、タクミに時間をかけて確認し、シンタが泣き虫と言っていないと分かる。保育者 B は「シンタ君は関係なかったね」と言う。するとコウタは「レオ君が叩いた」と言うので、保育者 B はコウタをさする。コウキは自分が無関係のように「レオ君が逮捕するって大声で言った」と言う。コウタは「それが嫌だった」という。コウタは号泣し、しばらくして落ち着くと保育者 B に手を引かれて保育室へ入る。

レオが「コウキ君とコウタ君は（僕が）パンチしたと言う」と保育者 B に訴える。保育者 B は「その話なんだけどレオ君、コウタ君をパンチしたの？」と問うと、レオは落ち着かず、体を動かしている。コウタが「パーンとすぐに叩いた」と言うと、レオは「していない」言う。タクミは「レオ君がやったのを見た」と言うが、レオは頭を横にふり、「していない、部屋にずっといた」と言う。保育者 B は「コウタがもう 1 回教えてくれるって」と言って、コウタと小声で話す。保育者 B は「わかったわ、ありがとう教えてくれて。レオ君もタクミ君も叩いてないけど、言葉でコウタ君をいじめた、そういうこと？」とコウタに確認するとうなずく。タクミは頭を横にふる。レオは「僕は逮捕するのを見ていただけなの」と言い、手で押さえてもいないと言う。保育者 B は「レオ君がしていなくても、コウタ君はされたと感じたかも」と説明し、さらにコウタに「タクミ君もレオ君も、シンタ君がいじめられていると思ったんだって」と言い、さらにコウタに「分かる？」と念を押すとうなずく。保育者 B は「タクミ君もレオ君も、シンタ君を助けようとしたんだよ」と言うと、レオは「シンタ君、かわいそうだった」と言う。コウタは「僕も悲しい気持ちになったから、泣いちゃったんだもん」と言う。保育者 B はコウタに「シンタ君と片づけしたかったんだと言えばよかったね」と言い、さらに「どう、おやつにしない。言いたいこと分かったし」と言う。レオが「ごめんね」と言う。コウタは「いいよ」と言い、さらにシンタに謝る。シンタも「いいよ」と許す。

【考察】シンタとコウタは事例 34 でいざこざを起こしてから、引き続きな険悪な関係になっていた。シンタは仲直りしたいようなのだが、コウタが感情的にそれを拒否するもののシンタを気にしている。コウキがコウタの味方になりシンタに意地悪く接することがさらに関係修復を難しくしている。しかしコウキはコウタと 2 人になれば、コウタにも意地の悪いことを言う。状況に応じて自分が優位になるように振る舞うのである。テツオがシンタを叩いたのは、自分には関係ないが、周囲の子ども達が仲間外れにしておき、そちらの味方をして仲間になったつもりなのであろう。シンタが泣き崩れたのは、叩かれたのが

痛いというより、皆が自分から走って逃げたのが、仲間外れにされたのが寂しく、悔しかったのである。タクミはシンタに同情して味方をし、それでも手に負えないと判断して保育者に報告したのであろう。

コウタはレオに責められると、シンタが自分のことを弱虫と言ったと非難したが、それは嘘のようである。また、コウタはコウキと一緒にあって、レオが自分を叩いたというのも嘘のようである。しかしタクミは叩いたのを見たという。これは嘘をついたというより、緊迫した状況において厳しく非難をし合う言葉で心が傷つき、叩かれたと同じくらいの痛みを感じたからであらう。

コウタとシンタは大声で泣き、自分の気持ちを正直に叫んで、これまでのわだかまりを解消したようであらう。レオも自分の主張がある程度認められ、気持ちの整理がついたのだらう。それでお互いに気持ちよく、謝罪し許し合えたと推測する。

ここでコウキは何も問題にされず、責任を問われていないが、こうしたことが続けば、保育者に告げ口して他児を陥れたり、状況に応じて自分が優位になるように振る舞う態度をさらに促すかもしれない。保育者の援助は、質問する、子どもの気づきを促す、共感する、子どもの発言を伝え、解説する、身体接触で慰める、言葉で慰める、である。

役割を奪う ごっこ遊びで役を演じている他児がするべき行為を、制止されたにもかかわらず意図的にやるものである。

敵対 役割を奪う

事例 50 3月7日 2006年 9:59～10:07 保育室-----

家ごっこコーナーにリカ、アキ、マミがいる。そこへ保育者 A とユキ、アミが来て、保育者 A とユキが椅子に座る。アキが「いらっしやいませ。何にしますか」と問うので、保育者 A が「ジュースください」と言う。

リカが準備するが、それより早くアミが紙コップにストローを入れて保育者 A に渡そうとする。するとアキが「お店の人じゃないのにだめだよ、ジュースを返せ」と奪い合いになるが、それでもアミは保育者 A にコップを渡す。アキが「アミちゃんなんか大嫌い。もう遊ばない」と大声で怒鳴る。

保育者 A がうつむいているアミに説明するが、アミは何も反応しない。保育者 A がアキに「アミちゃん悪いの分かったんだけど、もうちょっとしたら話してできるって、もう少し待って」と言うと、アキがうなずく。保育者 A がアミを椅子に座らせる。

保育者 A が「店の人が来ないわね」と言うと、アキが「いらっしやいませ。何にしますか」と言う。保育者 A がアミに「何にする」と問うと、「何もいらない」と答える。保育者 A は「何も食べないと元気でないよ」といい、「すみません、照り焼きバーガーとジュースください」と注文する。ユキと保育者 A はしっかり食べるふりをするがアミはうなだれたままである。保育者 A はお金を払い、アミを連れて廊下へ行く。

【考察】アキは自分たちの活動に客の役で参加を認めたアミが店員のやるべき行為をしてしまうルール違反をするのを強く警告した。アキは店の物を勝手に使ったというよりも、役割から逸脱した行為を問題にしたのである。3歳クラス児がこれを言葉で表現したのを捉えるのははじめてであった。

アミはルール違反と知ってはいるが、保育者に直接渡して、より親密にかかわりたいという気持ちが先行したのである。アキの怒りと非難の言葉があまりに厳しく、アミは悪いと分かっているものの反発の気持ちも生まれ、保育者に説明されても非を認める行動までは取れなかったのであろう。

保育者は活動が進展するように客としての言葉で、店員がやるべき行動に気づくように促し、さらにアミが遊びに加わって、気持ちがほぐれるようにした。しかし、アミは頑なにそれを拒否し続けた。それほどに大きなショックを受けたと推測する。アミはこの場面で、遊びのルールに従わない者は、非難され排除されることを経験したばかりではなく、役割に相応しい行動を取らないルール違反は、物を勝手に使うのと同じかそれ以上に、相手から強く非難されることを深く理解したであろう。保育者の援助は、仲間として参加する、注意する、子どもの子どもの気づきを促す、である。

相手を陥れる 相手に過失がないのに、相手が悪いと指摘したり印象づける行為である。

事例 44 2月15日 2006年 9:26～9:52 保育室-----

家ごっこコーナー内でアキ、ナナ、エリ、アミ、ユミが虚構と役を相談していると、突然アキが「嫌だ」と怒りコーナーの外に出て行く。ナナが保育者 B に相談し、保育者 B がアキに直接話すが、アキは何も答えない。アキは自分のロッカーの中に座ってしまう。女兒達は経緯を話し合うがはっきりとした理由が分からない。それでもナナ、エリ、アミは自発的にアキに謝るが、アキは「許してやれない」と言う。

アキは小声で話しているが、極近くにいた子どもにしか聞き取れない。しばらくするとエリとユミが泣き始める。保育者 A が来て、事情を聞くがアキは「許してやれない」と言う。保育者 A は子ども達に「許す気になれないんだって、まだ時間がかかるみたい」と言うと、子ども達はアキをそのままにして廊下や遊戯室へ行く。保育者 A が廊下で絵本の読み聞かせを始めるとエリ、ユミ、ナナは見ている。それからしばらくして、ナナ、ユカ、エリ、リエ、アミ、マミ、リカが家ごっこコーナーで遊びの相談をする。ナナが「いいこと考えた、出かけよう」と提案して廊下へ移動するとアキがロッカーから出て、少し距離をおいて付いていく。

【考察】アキが怒ったのは、ごっこ遊びの役を相談したが自分の思い通りにならなかったからである。その強い怒りの表情に周囲の女兒達は驚き、自分達が何か悪いことをしたと思ったようである。アキは保育者に理由を問われて答えないのは、自分が自己主張を通そうとしているのが分かってしまうからであろう。自分が話さない限り、自分は被害者であり、周囲の女兒が加害者として保育者に印象づけられると予想し、周囲の女兒を陥れようとしたのである。エリとユミが泣いたのはアキが小声で非難するような言葉を言ったからであろう。それは女兒達の自分への注目を引き留めるためと思われる。不安な表情で泣いている子どもに気づいた保育者は、アキの性格とこれまでの行動パターンから推測して、加害者とされている女兒達に同情し、その気持ちをほぐすようにしたのであろう。その援助により女兒達は気持ちを立て直して遊び始められるようになった。そうなるアキはつまらなくなつて、自分から関係を改善するように動くのである。保育者の援助により、アキは間接的に自分のやり方の不適切さに気づいたであろう。保育者の援助は、質問する、

子どもの発言を解説する，子どもの気づきを促す，言葉で慰める，である。

馬鹿にした態度を取る 相手を見下すために馬鹿にした態度，ふざけた表情をして挑発するものである。

事例 40 1月11日 2005年 10:45～10:47 保育室-----

手洗いシンクでレオの後にシンタが並ぶと，レオがシンタの頬を手で押す。シンタが「嫌だ」と言うと，レオが体をくねらせて，馬鹿にしたような表情の顔をする。シンタが「気持ち悪いよー」と言うと，レオは「いいだよ」と叫んで，口を開けたままシンタをにらむ。レオが腕を前後に大きく振って大股で歩いて，シンタに近付くと，シンタは走って逃げる。レオはその後を追うと，シンタは保育者 B の側に行き「レオ君怖い」と言う。保育者 B が「どうした」と言って，シンタとレオを見る。レオが「あのさ，シンタ君ね，トモヤ君が手洗うのを邪魔してた」と言うので保育者 B が「邪魔してたの」と確認する。シンタは「レオ君が追っかけてきた。気持ち悪かった」と言う。保育者 B が「追っかけられるのが嫌だったんだって」と言うと，レオが「してないよ，シンタ君が悪い」と言う。保育者 B は「それじゃ追っかけるじゃなくて，止めろよと注意しなさい。シンタ君だって，追っかけられればびっくりするさ。それもあそこからここまでだよ」と言うと，レオは笑い顔でうなづく。

【考察】レオはシンタを馬鹿にした態度で攻撃しようとしたが，シンタは反感を持つより気持ち悪がって逃げた。レオはシンタを馬鹿にしようとしてさらにオーバーに表情を作り，攻撃するふりで追ったのであろう。シンタはその表情とふりから，次第に攻撃的な嫌がらせの意図に気付いたのである。レオは保育者に注意されると「馬鹿にした態度をとって意地悪するつもり」とは言えないので，嘘をついてシンタを陥れようとしたのであろう。そうした言い訳を保育者が少しは認め，追いかけただけで，そのやり方が不適切ということになったので，レオは保育者の注意をすぐに笑顔で受け入れたのであろう。

中立的なかかわり

他児に指図する 周囲の子どもに行為するように命令口調の言葉での指示である。

事例 4 10月26日 2005年 10:48～10:58 保育室外ベランダ-----

レオがベランダでアミとコウタ，ナナに指示して箱積み木を片付けている。レオは威張った強い口調で指図するが，自分は積み木を箱に入れるだけなので，3人は他の所へ行ってしまう。レオが一人で困っていると保育者 B が来て，「一人ではできないでしょう。みんなにお願いすれば」と言う。レオは「みんなお願い，手伝って」と言うと，ユミ，エリ，アミ，コウタ，ナナが来て，保育者 B と協力して箱を保育室に入れる。廊下の積み木収納場へ来ると，またレオが指示しはじめる。ユミとエリは黙々と積んでいる。保育者 B が来るとレオは「僕たちがしっかり片付けたんだ，ねーユミちゃん，エリちゃん」と言う。保育者 B が「よく頑張ってくれたね」と認める。レオは指図することがほとんどで，実際に片付けたのはユミとエリである。

【考察】レオが周囲の子どもに指図し片付けを進めるが，それは保育者に褒められたいと

いう心情からのようである。周囲の子どもはそれに気づいていて、その反感でレオから離れていくのであろう。レオは保育者に自分1人ではなく、3人でやったと報告した。それは片付けなど、人に指図してやるのではなく、自分一人でもする態度を示さなければ他児に認められない、良好な関係を持っていないことにレオが気づきつつあることを示すものであろう。保育者の援助は、提案する、認める、である。

事例 38 1月11日 2006年 9:01 保育室-----

コウタがシンタを見つけて「シンタ」と大声で呼ぶと、シンタは「シンタじゃないでしょう」と言う。コウタは「シンタ、こい」と命令口調で言うと、「こいじゃなくて、まだ用意してないんですけど」と答える。コウタはシンタに視線を向けることもなく、紙に描画している。シンタはベランダに出て行ってしまう。

【考察】コウタはシンタに仲間意識を持ち、名前を呼び捨てにして命令口調で指図するのであるが、シンタは対等以下に扱われていると感じをおもしろくない。コウタは兄がいて、そうされるのを当然と感じているようだが、シンタはそうした経験がなく違和感を持ったのであろう。コウタは相手に応じた話し方をしないと嫌われることを、こうした経験を通して気付いていかなければならない。

他児を注意する 他児の行為は認められないことであると言葉で説明するものである。

事例 26 11月30日 2005年 10:33～10:35 保育室-----

保育者 B がコウタに「ユキちゃんがコウタ君のことすごく怒っていたんだよ」と言うと、コウタが分からなさそうな表情するので、ユキに「言ってあげたら」と言う。するとユキはコウタに向かって「大切な私たちの折り紙をなんで捨てるの？」と問いたず。コウタは聞いてないそぶりでマスクをいじっている。ユキは「ゴミじゃないんだよ。びっくりすることしないで」と言うが、コウタは聞いていないそぶりをする。するとユキは「もういいわよ。好きにしていいいわよ」と呆れかえったように言って離れる。コウタは黙ったまま、手にしたマスクをふり回している。

【考察】ユキはコウタが未使用の折り紙をごみ箱に捨てたことを注意する。コウタは自分に非があることを十分知っているので反論しない。しかし大人ではなく、子どものユキである、謝罪もしたくないし、言い訳もしたくないのであろう。結局、何も言わず黙ってしまうが、それがユキはおもしろくない。自分は保育者と同じように道理を説いていのかからである。保育者の援助は、子どもの発言を伝える、提案する、である。

他児に条件いう 一緒に遊んだり、活動の場に入るための条件を付けることである。

事例 49 3月7日 2006年 9:44～9:51 廊下-----

バス停と表示された看板の後にシンタがフラフープと紙の棒を持って座っていると、ケンタとハルオが看板を越えて入ろうとする。シンタは「ここはバス停だから入っちゃだめだめだよ。ここに入るにはケンがいる」という。

2人は保育室に戻り、ハルオは紙筒の棒をすぐに持って来て、「これでいいの」と問う

と、シンタは「いいね、入れてあげる」言う。それからハルオは遊戯室からフラフープを持って来て、「お風呂にしよう」と言うと、シンタは「だめ、バス停だもん」と言う。しかし、ハルオはフラフープをバスには見立てない。

ケンタは保育者 A を連れて来る。保育者 A がシンタに何が必要なのか問うと、シンタは、「バス停に入るには男はケンとお金、女はドレスとお金がいる、お金は 2800 円」と答える。ケンタが直ぐに棒を持ってくると、コウタは「それならいいよ」と言う。

【考察】シンタはフラフープの中に入って、バスのドライバーとなり、客を乗せる遊びをしていた。そして保育者にバス停の看板を作ってもらい、そこに客が来るのを待っていたのである。ケンタとハルオは、その遊びに参加しているわけではなく、単に通り過ぎようとしただけである。しかし、シンタはそれを認めず、勝手に自分の遊びの条件を要求する。ケンタはシンタの要求する意味が分からず、保育者を連れてきてようやく理解したのである。さてシンタが言うケンとは、乗車券か整理券なのであろうが、ケンという音声から自分達の遊びの中に出てくる剣しか思い浮かばなかったのである。バスごっこに剣を持っていることを条件するのは、まったく必然性はないが誰も苦情を言わずに従ったのである。保育者の援助は、子どもの発言を解説する、である。

同調行動をしない 他児の活動に加わったのに、同じように行動をしないものである。

事例 6 11 月 2 日 2005 年 9:10 ~ 9:17 遊戯室-----

テツオはソウタとナオヤ、実習生のいる肋木のマットの所へ行き、「入れて」と言うと、ソウタとナオヤは「いいよ」と答える。マットの上で 3 人は寝転がる。テツオが「僕が風邪引いてるから（肋木の）上に乗らないで。（肋木に）乗っちゃだめなんだけど」と言うが、ソウタとナオヤは肋木に登る。ナオヤが「ほら見て」と実習生に言って跳び降りる。ソウタが「俺もだ」続いて跳び降りる。

それを見てテツオは登るが怖くて跳び降りられず、実習生に抱いて降ろしてもらう。ソウタとナオヤは肋木の上で話したり、跳び降りたりする。テツオは下で見ている。しばらくしてソウタとナオヤは遊戯室脇の出会いの広場に行くが、テツオは一人残る。

ソウタとナオヤは広場のマットに寝転がる。その様子をテツオが遊戯室から見ている。しばらくしてソウタとナオヤがテツオの所に戻ると、2 人はテツオに向かって「バリアー」と言って胸の前で両手をクロスさせる。5 歳クラス児が遊戯室を通っていくと、2 人は「ビー」と言って光線発射のふりをし、楽しそうに床に寝転ぶ。すると、テツオは立ち上がってゆっくりと歩き出し、そこから離れる。

【考察】テツオは遊びに入れてもらったものの、高い所が怖くて跳び降りられず同じ行動ができない。2 人からは相手にされず、結局仲間入りできなかったのである。2 人がバリアーと言って、テツオに対して攻撃のふりをしたが、遊びのつもりであろう。しかしテツオはそれに心理的な距離を感じて、同じ行動を取らずに離れていったのであろう。仲間になるには、同じ様に行動しなければならないのが分かる。保育者の援助は、身体接触で慰める、である。

楽しくない活動 遊んでいるようにみえるが、おもしろく展開しない活動である。

事例5 11月2日2005年8:56～9:03 遊戯室-----

ナオヤとテツオが廊下の床に箱積み木を並べている。タクミとソウタが「入れて」と言う、ナオヤが「いいよ」と答える。しばらくするとタクミは離れていき、3人は遊戯室へ行く。ソウタとナオヤは肋木の下のマットに座り、周囲の様子をみている。テツオはトモヤ、ハルオと追いかっこを始める。3人は「待てー」と言いながら、遊戯室内を2周走り回ってやめる。

トモヤとハルオは「いくぞ」「とう」「やー」と大声を出して戦うふりをするが、直ぐにやめる。

【考察】子ども達は遊びたいのであるが、おもしろく展開しないので続かない。これでは仲間関係は育ちににくい。こうなるのは遊びのアイデアがないからである。3歳クラス期では、年上の子ども達の遊びを模倣するとか、保育者と一緒に遊んで遊び方を学ぶとか、おもしろい遊びを見たり、やったりする経験が必要なのである。

事例8 11月2日2005年9:33～9:37 保育室-----

タクミ、ナオヤ、ハルオが大型ブロックで場所を囲い、そこでタクミは走り回り、ハルオとナオヤは歩き回る。タクミは家ごっこコーナーに行き「ユミちゃん入れて」と言うと、ユミが「いいよ」と答えて、家ごっこに入れてもらう。

ナオヤとハルオはつまらなそうにブロックに囲われた中にいる。2人はブロックを並べ直して、その上を歩いて渡る通路にする。2人はネコになる。ナオヤは「プールになった、バチャーン、バチャーン」と言う。ハルオがまた囲うように並べ替えると、ナオヤが「こうやって、こうやって」と言いながら上を歩く。

【考察】タクミはブロックで囲って場所を作っても遊びのアイデアなくおもしろくないので、直ぐにごっこ遊びをしている女兒達の遊びに入れてもらったのであろう。残った2人も遊びのアイデアも見通しもなく、活動が進展しない。

事例10 11月2日2005年9:47～10:02 保育室・園庭-----

ナオヤ、ソウタ、ハルオが武器を持って戦うふりをしている。タクミも武器を手にしたのですぐにそれに加わる。4人はすぐに走って遊戯室へ行き、お互いに戦うふりをする。しばらくすると武器を相手に投げ合う。4人ともヒーローで、相手に物を投げて攻撃のふりをするが、すぐにやめる。

タクミは保育室へ戻る。ハルオとシンタが大型ブロックで囲われた所でネコのふりをしているが、エピソードが無く進展しない。武器を持ったタクミがヒーローとして加わり、囲いの中に入って2人をチョップする。シンタが「(囲いの)外からはいいけど、内からはだめ。怖いから」と言う。タクミは「怖くないよ。俺カクレンジャー」と言う。3人はしばらくカクレンジャーの話をする。

3人はネコのふりで這って移動して、出会いの広場へ行く。そこにしばらくいるが、3人は保育室の大型ブロックの場所に戻る。ナオヤ、ソウタが「よして」と言って参加する。2

グループに分かれて、ヒーローの戦いごっこをする。しかしすぐにやめる。タクミとナオヤ、ソウタはカラー帽子を持ってベランダに行く。

3人は「虫捕りをする」と言って、虫かごと網を持って園庭に行く。ナオヤとソウタは「おれたちギンガレッド」と言って、警備員を攻撃するふりをする。タクミはそれを見ているが、一人で虫捕りに行く。ナオヤとソウタは警備員を相手に戦うふりをしている。

【考察】男児が好んでよくやるヒーローの戦いごっこである。子ども達はそれぞれ自分がヒーローで戦うイメージを持っているが、その相手となる悪役がいがないために進展しない。だからといって、自分が悪役になることはできない。自分はいくまでもヒーローなのである。大人や子どもの誰かが悪役で参加しないとおもしろい活動にはならないことが分かる。

事例 12 11月9日 2005年 10:32～10:34 玄関ホール-----

ナナ、アミ、ユミ、エリと一緒にいるとナナが「オニごっこをしようよ、じゃんけんしよう」と提案する。アキはごっこ用の白いドレスを着て、その様子を側で見ている。4人は声を合わせて、じゃんけんをする。アキが「負けた人がオニだよ」と言うが、子ども達は勝敗が分からない。そこで誰がオニになるかを話し合いで決めようとするが、みんながオニになりたくなくて決まらない。結局、5人とも保育室に入る。

【考察】オニごっこをしたくて、じゃんけんをしても、勝敗がわからないために、オニを決めることができない。オニになりたがらないのは、オニという言葉から悪役と思い、自分はしたくないと考えているからである。保育者が加わって、オニごっこのおもしろさとやり方を経験するしかない。

事例 15 11月16日 2005年 9:01～9:07 廊下-----

ナナとリカ、リエが箱積み木を床に降ろしている。ナナが指示し、2人はそれに従うが、リカが「これで、どうするの？」と問う。ナナは答えずに、箱積み木を床に降ろしながら「こうするの」という。保育者 B が通ると、3人は後について事務室へ行く。しばらく様子を見てから、ナナは「作ろう、もっと作ろう」と言いつつ箱積み木に座る。ナナは2人を指さし、「2人はお姉ちゃん」と言うことに同意する。ナナが「じゃーバッグ持ってきて」と言うと、2人は保育室からごっこ用のバッグと帽子を持ってくる。ナナは「ほら見てて階段、階段」と言いつつ、階段状になった箱積み木の山に登る。2人も登って座る。しかし、それだけで進展しない。しばらくして3人は保育室に入ると、レオがナナを呼び止め、自分のキーホルダーとシャツのピカチュウ絵を見せる。ナナは「ピカチュウだ」と興味を示し、2人は楽しそうに会話する。それをリカとリエは見ている。

レオが行ってしまっても、リカとリエは何もしないので、ナナが「お家ごっこしないの？」と問うが、2人は返事をしない。ナナが「幼稚園のお姉ちゃんになれば」などと役を言うが、リエは返事をしない。ナナがいろいろ提案して誘うがリエは同意しない。

【考察】この後も、ナナは何度かお家ごっこしようとするが、まったく展開せずに終わっている。リカとリエは指示するナナの意図が理解できず、これからの見通しも分からない。

具体的なイメージが思い浮かばないのである。ナナ自身も、お家ごっこをするために、積み木で場所を囲うとするものの、どのような活動をしようか見通しがなく、階段に見立てたりしたり、レオと話し込んだりしたのであろう。それでリカとリエは興味を失い、ナナの提案を拒否したと考える。

事例 19 11月16日 2005年 10:18～10:22 保育室-----

大型ブロックの上にアミ、ユカ、カナ、ナナが乗り、床にユキとリエ、リカが立ち、4人対3人で対面している。お互いに「ごめんなさい」「いいよ」と声を合わせて言い、大笑いをする。これを3回繰り返す。

ユキとリエ、リカがそこを離れると、ブロックの上のアミ、ユカ、カナはハッピーバースデーの歌を一度うたう。それからブロックを並べ替えて、上に乗ったり、上を歩いたりする。

ユキとリエ、リカは「お家ごっこする?」「どうする?」と相談するが、まとまらない。すると3人はブロックの上のアミ、ユカ、カナ、ナナに「入れて」という。「いいよ」と言われると「あーりがとう」と答える。7人は一緒になって、ブロックの上に乗ったり、斜面を滑ったりする。カナが嬉しそうにしている。コウタが「入れて」と言って参加するが、7人とかかわらず、自分一人で円柱形のブロックを転がしている。

【考察】やりたい遊びが見つからない子ども達である。言葉でおどけてみたり、歌をうたったものの長続きしない。お家ごっこと言っても、アイディアが乏しくどうして良いのか分からない。結局、群れてはいるが各児が単にその場でできることをやっているに過ぎない。平行的群れ遊びという状況である。こういう場合、カナは勝手な行動していても排除されずに側にいることができるので嬉しそうにしていた。

事例 20 11月16日 2005年 10:27～10:33 -----

コウタとコウキが家ごっこコーナーで戦いのふりをし、コウキがコウタの上に乗る。コウタは脇で見てアイに「アイちゃん、助けて」と言うが、アイは動かない。そこへ青マントを着け、紙の棒を持ったシンタが「何やっているんだ2人とも」と入って来て、棒を振り回し、2人を攻撃するふりをする。コウタがシンタに抱きつくと、シンタが振りほどき、棒でコウタを数回叩く。コウタが「危ないよ」と言うと、シンタは黙って出て行く。

保育者 A と数人が制作コーナーで新聞紙を丸めて棒を作っている。コウタは床にあった棒を取ると、シンタに叩きかかる。何度か叩くが、シンタは気にせず、大型ブロックを運び、座る。シンタはマントを外す。コウキがシンタに抱きつき、床に倒すとその上に乗る。そこへコウタが乗る。シンタが「あーあー」と苦しそうに言うので、保育者 A が「大丈夫か?」と問うと、2人は直ぐに下りる。シンタが「あーあー」というと、また2人が上に乗る。保育者 A 「シンタ君、痛かったら、痛いと言うんだぞ」と言う。

コウキはコウタに抱きつき、コウタはシンタに抱きつく。そこへテツオが乗り、さらにソウタとナオヤが乗る。6人は床に寝転がって身体を絡めている。コウタは家ごっこコーナーへ行くと、シンタ、コウキがついて行き、コーナーの中で戦うふりを始める。コウタ対コウキとシンタとなり、コウタが「やめろー、離せー」と言う。その声を聞いて、テツ

オ、ナオヤが加わる。コウタはそこから逃げて廊下に出るとコウキが追う。遊戯室を通り、出会いの広場で捕まる。そこでしばらく2人は追いかけっこをして、保育室に戻る。

【考察】一見するとヒーローとなって戦いごっこをしているようだが、実は子ども達はおもしろくないのである。やりたいことが見つからないので、他児を棒で叩いてかかわろうとしたり、じゃれ合ったり、走って逃げたり追ったりしているに過ぎない。こうしたつまらない、退屈な時間を経験し、遊びを生み出そうとするのかもしれない。しかし、遊びのレパトリーも、遊びを生み出す経験も少ない子ども達である。ときには保育者のリードも必要なのであろう。保育者の援助は、提案する、である。

いざこざにおけるかかわり

ユーモアのある対応 陰悪な雰囲気をおどけて一変させたり、いざこざ後の嫌な気分を、ユーモラスな発話で和ませるものである。

事例3 10月26日2005年9:58～10:04 保育室-----
家ごっこコーナーでエリ、アキ、ユミが泣き、アミが怒った表情で立っている。しばらくして泣きやむと、ユミが「アミちゃんと仲直りしたい」と言う。エリとアキが同意して、3人はそれぞれに「ごめんなさい」と2、3回言う。アミが「ごめんね」と言うと、3人は笑顔になり、「ごめんなさい」とおどけた口調で言う。4人は声を出して笑って、ユミが「一緒に遊ぼう」と言うと、アミが肩にかけていた水筒をみんなで使おうと言って、ユミに渡す。

【考察】アミの持つ水筒を3人が取ろうとし、アミに反撃されて泣いたようである。ユミが仲直りしたいと言ったのは、アミと一緒に遊ぶことが楽しいとの思いを持っているからで、これまでの関係が基になっているといえよう。3人はアミも謝罪をしたので、すぐにおどけた言い方で謝罪を繰り返し、嫌な気分を笑いで解消したと推測する。

事例39 1月11日2006年10:31～10:32 保育室-----
レオとテツオが水筒の取り合いすると、レオがテツオの腕を手刃で叩く。テツオが「だめなんだー」と言うと、周囲にいたコウキ、ソウタ、ナオヤ、トモヤが「だめなんだ、だめなんだー」と歌のようにはやし立てる。しばらく、真剣な表情をしていたレオだが「一緒にやるよねー、コウキ君」とおどけて明るく言うと、コウキは反射的に「うん」と返事する。それを聞いて子ども達の緊張は解け、テツオも普通の表情になる。

【考察】レオはテツオを叩いたことを周囲の男児皆から非難されると、緊張した表情になった。ここで叩いたことを言い訳するのは皆が見ている前でしたので難しいし、謝るのも嫌だったのであろう。そこで、人との付き合いのうまいコウキを指名して、一緒に遊ぼうとの提案をおどけた口調と表情でしたのである。コウキはレオの友好的な言い方で、うっかり了承してしまったようである。非難していたコウキが笑顔で気持ちよく了解するので、緊張が氷解したのである。実にレオの巧みな人とのかかわり方である。

わだかまりが解消しない終結 いざこざが終結しても、当事者は気持ちの立て直しができずに、わだかまりが残るものである。

事例 16 11月16日 2005年 9:25～9:28 保育室-----

レオは床に座っているシンタを後ろから抱きかかえ、床に転がそうとする。シンタが抵抗するので、2人は取っ組み合いになる。コウキはレオを「頑張れ、頑張れ」と応援する。レオが手を放すとシンタは走って逃げる。レオは直ぐにシンタを後ろから両手で押さえる。シンタが抵抗するので、レオはシンタを床に投げ倒す。シンタは、「嫌だ、レオ君は馬鹿、あーん」と泣き叫ぶ。コウキは「シンタ君、いけないんだ馬鹿って言った」と言う。シンタは「戦いごっこなのに、本気でやった」と保育者 B に訴える。保育者 B が「くやしいのか、シンタくん」と言うとうなずく。コウキはシンタが馬鹿と言ったと保育者 B に告げ口する。保育者 B が「シンタ君、悔しくて泣いたんだって、レオ君は悪くないんだよね」と言うと、シンタはうなずく。シンタは次第に落ち着く。保育者 B が「シンタ君、悔しいんだね、悔しい気持ちが出てきたねー」と言うとうなずく。シンタが「ごめんね」と言うと、レオは「いいよ」という。

シンタが大型ブロックで遊ぼうと提案するが、レオは廊下に出て行き、コウキは後を追う。シンタはブロックに座り一人である。

【考察】シンタはレオのかかわりを遊びと分かっていたのである。しかし、シンタはコウキが一方的にレオを応援するのがおもしろくないし、自分が投げ飛ばされたことが悔しくて、言葉でレオを非難したのである。それをコウキが告げ口をして、自分を非難するのが、また悔しいのである。しかし、シンタは保育者が自分の心情に共感してくれたので、落ち着き、レオに謝罪できたのである。それでもその後一緒に行動しないのは、わだかまりが解消しないからであろう。これは自分で克服しなければならない。これも人とかかわる上で大事な経験であろう。

この頃、コウキは頻繁に保育者に告げ口するようになる。それは自分を保育者に良い子として認めてもらいたいという欲求が強くなったからであろう。しかし、保育者は聞き流す程度で、ほとんどそれに基づいて行動をしない。そうした保育者の態度によって、告げ口をして他者をおとしめても、自分は評価されないことを経験を通して気付くように促しているであろう。時間はかかるが、望まれる指導の方向である。

不満を克服して気持ちを立て直す 怒りを感じるものの、いつまでも怒っていても自分もおもしろくないので、適当なきっかけをみつけて気持ちを立て直すものである。

事例 18 11月16日 2005年 9:57～10:13 保育室・園庭-----

絵の具でスタンプングや彩色するテーブルがセットされ、そこでユキ、コウタ、ユカ、アキ、エリ、テツオ、ナナ、ユミが取り囲んでいる。ユミが泣きそうな顔で歩いて家ごっこコーナーに入り1人である。しばらくすると出て行き、ごっこ用のピンクのマントを手にし、アキを見ている。マントを着せようとする保育者 A にユミはテーブルを指差して「あれやりたい」と言うと、保育者 A が「やればいい」と言う。ユミが「でもアキちゃんがだめっていった」と言うと、アキは保育者 A の背中越しにユミを見ている。保育者 A が「ユミちゃんがアキちゃんと話したいって、聞いてあげて」とアキに言うと2人は対面するも

の何もしない。アキはユミを見つめ続けるとユミが落ち着かなくなる。他児が松ぼっくりに水色の絵の具を筆で塗っているのを見て、ユミは保育者 B に「私もこれきれい塗るのをしたい」と言う。保育者 B は「どうぞ」という。ユミの側にアキがいて、ドングリを絵の具皿に入れて彩色している。ユミは手を出さない。アキが「言いたいこと言えよ」というと、ユミが「みんながしているから」という。アキはしばらく黙っていたが「じゃ 1 つだけ」という。ユミは下を向いて涙ぐむと、アキはそこから離れる。

ユミは涙を拭いて、「もう行く」と言うとマントを脱ぎ捨ててベランダへ出る。外靴をはいて傘を触っている。ガラス越しにアミが保育室からユミを見て、戸を開けて出てくる。ユミが「これ固いんだこれ」と傘をアミに渡す。保育者 A が 2 人に近づくと、ユミは「今、ドングリ拾いにいくの」という。保育者 A は「雨が降っているのに拾いに行くの？」と聞くとユミは「大丈夫」という。保育者 A が「傘さしていくの？あるのかな？一人で行くの？」と次々に問うとうなずく。保育者 A が「アミちゃんも行くの？」と聞くと、アミはしばらくためらうが、うなずく。

2 人が行こうとするとナナが一緒に行くという。3 人は保育者 A から袋をもらい、園舎の裏側を早歩きで移動する。ユミが「アミちゃん、ドングリあんまりないよ」という。3 人は諦めて戻り、ユミが「先生、なかった」と保育者 A に明るく報告する。

【考察】ユミは松ぼっくりやドングリに絵の具で彩色したかったが、アキが保育者に隠れてそれをやってはだめと言ったり、1 個でけだったならやってもいいなどと勝手なことを言って意地悪をしていた。ユミは保育者に言ったものの、やはりアキが恐いのであろう、自分の要求を取り下げた。戸外に行こうとしたものの、一人では心細いし、やはり悲しく、決断がつかない。そんなとき、偶然、アミが自分に興味を示してくれたのがどんなにか嬉しかったであろうか。しかしアミは当初は、戸外に行く気はなかったが、ユミに同情して行く気になったようである。戸外での様子からユミがドングリを取り行くというのは口実で、単に保育室のアキから離れ、気分転換をしたかったようである。アミとナナが一緒に行ってくれたことで、気持ちを立て直すことができたのである。保育者の援助は、行為を認める、子どもの気づきを促す、質問する、子どもの発言を伝える、である。

事例 28 11 月 30 日 2005 年 10:37 ～ 10:41 遊戯室-----

コウキはソウタとタクミのサッカーに入れてもらう。しばらくするとコウキが走ってソウタの背中を叩くと、ソウタはコウキの肩を叩く。コウキは「ぶつかっただけなのに叩いた、いけないんだ」と非難し、タクミに「先生に言ってきて」と言うと、タクミは走っていく。その後を 2 人が追う。そのときソウタは「だってさー」と言うが、コウキは聞き入れない。保育者 B にタクミとコウキが告げ口する。ソウタは「だってさー」と言いながら泣いている。コウキが「ソウタ君が僕の首パンチした」という。保育者 B が泣いているソウタをなだめ、言い分を聞き、コウキに叩いたかどうか確認する。コウキは「叩いてないけど、ぶつかった」と言う。保育者 B は「それじゃーおあいこだね。どっちも痛かった。どっちも悪いね」と言う。ユキが「そういうときは 2 人でごめんねと言えばいいだよ」と言うと、2 人は「ごめんね」と言い合う。保育者 B が 2 人にどうすべきであったかを説明する。3 人は気を取り直して、遊戯室へ戻る。

【考察】コウキは入れてもらったものの、この活動をおもしろいとは感じないので、変化を求めようと意図的にソウタを攻撃することを思いついたのであろう。ところが予想以上にソウタが怒って自分を攻撃してきたので、自分の方は偶然なのにソウタが叩いたのは悪いことと非難して告げ口したのである。ソウタが言い訳をしようとしたり、泣いたのは保育者に悪い子と思われるのが嫌だからであろう。

しかし保育者はコウキの言い分をすべて認めるのではなく、コウキの落ち度を指摘して、どちらも悪いと判断する。これはコウキが頻繁に他児のことを告げ口しているし、コウキが自分から他児に攻撃をしかけて反撃されたことを非難し、告げ口するやり方に保育者が気付いているからであろう。これによって、ソウタは気持ちを立て直すことができた。さらにコウキはこのやり方では保育者の賞賛は得られない上に、仲間として遊べなくなることに気付く必要がある。保育者の援助は言葉で慰める、注意する、子どもの発言を解説する、である。

他児(者)を援助してその相手を攻撃する 自分は利害がないが、困っている他児に加勢して、その相手の子どもを排除したり、攻撃するものである。

事例 24 11月30日 2005年 10:02～10:13 保育室-----

コウキは制作コーナーにいる保育者 A の背中に抱きついたり、押したりする。するとナナとアミ、アキも保育者 A の背中に抱きついて乗ろうとする。保育者 A が「助けてー、苦しい、何人乗っているの」と言いながら他児の援助のために立ち上がろうとするので、タクミは保育者 A をかばい、4人を離す。その間に保育者は行ってしまう。

ナナとアミがタクミに「痛いじゃない、なんでそんなことするの」と抗議する。タクミは「先生がいやがっているのに、みんなが悪い」と大声で反論する。ナナとアミが泣き始める。保育者 A が「どうしたの」と問うと、タクミは「先生をいじめてたから、やっつけた」と言う。保育者 A が「そうだったの。いじめてたの」とナナに問うと、ナナは「違う、遊んでいただけ」と答える。保育者 A はタクミに「助けてくれてありがとう。でもね、いじめたんじゃないんだって。先生が助けてって言ったからね」と説明すると了解する。保育者 A はしばらくナナの頬をなでたり話しかけたりしている。

【考察】タクミは保育者が助けてと言ったので、子ども達を保育者から力づくで離そうとしたのであり、保育者に加勢しただけなのである。しかし丁寧な保育者の質問により、他児の心情をすぐに理解できた。3歳クラス児では、保育者が子どもに援助を求めているのが、本当なのか、遊びの文脈なのか、わからないこともある。難しいが、これは遊びであるという、わかりやすいサインを出す必要がある。保育者の援助は、仲間として参加する、質問する、子どもの気づきを促す、発言を解説する、身体接触で慰める、である。

相手に従う 他児が自分に対して苦情を言うので、他児の言うことに従うものである。

事例 9 11月2日 2005年 9:41～9:42 保育室-----

タクミ、ユミ、エリ、ナナ、アキが家ごっこコーナーで遊んでいる。ユミが、ガムテープを示し「これをセロテープとして使って」と言ってアキに渡す。アキが奪うように取る

と、ユミが「意地悪だわ」と言う。ナナも「意地悪だわ」と言う。ユミが別のガムテープをアキに渡すと、アキは先のガムテープを渡し、交換となる。ユミが「お利口さん」と言うと、エリがアキの頭をなでる。ユミが「私に貸して」と言うと、アキはガムテープを返し、ユミは「ありがとう」と言う。アキがエリに「私、優しくなった」と言うと、エリは「アキちゃん優しい」とユミに言う。するとユミが「えらい、えらい」と言う。

【考察】意地悪な態度のアキを周囲の子ども達が注意すると、アキは態度を改める。それを周囲の子ども達がよい子になったと認めるので、アキは嬉しくなり、さらに認められるような行為をする。子ども各自が、優しい、偉いと評価してくれるのが気持ちよいのである。他児からの肯定的な評価は、さらに他者との良い関係の構築を促すことが分かる。

他児の関係を調整する いざこざを起こした子ども達から経緯を聞いたり、説明したり、慰めたりすることである。

事例 21 11月16日 2005年 10:34～10:38 -----

大型ブロックの所でアミとナナが泣いている。リカ、リエ、ユキが2人の頭を撫でる。カナはその間に入ってリエの髪を触っている。その側でソウタがうなだれている。コウタが来て「どうした」と聞くとリカが「ソウタ君がこの家を壊した」と言う。コウタはソウタに「なんで壊したん、きちんと行ってよ」と言うと、ソウタは「嫌だ」と言い返す。ユキが「じゃあ、どうして壊したの。ナナちゃんがせっかく作ったのに、そんなに怒らなくていいでしょう。（自分たちは）怒ってないんだよ」と言うとソウタが、泣き始める。ユキは「（自分たちは）怒ってないんだよ」と何度か言い、ナナにティッシュを渡す。ナナはソウタの顔を拭いてやる。

【考察】女児達は大型ブロックで囲って場所を確保したが、したい遊びが見つからず、そこにいただけであった。ソウタにしてみれば、特にブロックで遊んでいるように見えなかったもので、ブロックの囲いをおもしろがって崩したのである。そしたら女児が苦情を言ったので、ソウタが怒って言い返したら女児が泣き出したという状況のようである。女児達とソウタがいざこざになったのは、どちらもおもしろい遊びがないからである。

介入したコウタとユキの口調と態度は、保育者の模倣であることが分かる。これまでにこうした状況において保育者が行ったやり方を覚えていて、それを演じているのである。再現でもいざこざを起こした子ども達を慰め関係を調整する経験は、人とのかかわり方を行動でやってみることであり意味を持つ。

おわりに

3歳クラス期の仲間関係の特徴と保育者援助

クラスメートと一緒にいる活動がおもしろくて楽しければ、それに参加している子ども達の仲間関係はたいい友好的であり、良好である。従って楽しい、おもしろい遊びの展開していることが良好な仲間関係を育てていく基礎条件といえよう。そうした活動

に保育者は仲間の一人として参加し、その役割での発話と質問を通して、子どもの考えを引き出したり解説したりしてイメージを共有化を図ったり、新しいアイデアを提供することを行っていた。さらにごっこ遊びでは新しいイメージを引き出したり具体化しやすいように、出入り口にノレンを付けたり、カウンターバーを作ったりと場のリアリティを高めるために環境を再構成していた。こうした地道な丁寧な援助が子ども達の活動を新鮮で面白いものにしていくのである。

敵対的なかわりには、活動のおもしろさや状況に関係なく、特定の個人に対して、もしくは特定の個人間においてによく見られた。

特に仲間外れはテツオとカナに対してしばしば行われた。それはこの2人は常にマイペースで、子ども達がおもしろそうな活動をしていれば黙って参加し、他に興味が移れば黙ってやめてしまうことを繰り返していた。そうしたやり方を子ども達の多くはルール違反もしくはマナー違反と感じて反発し、仲間外れにしたのであろう。この2人は自分がなぜ他児に嫌われ、活動に入れてもらえないのかを反省する必要がある。保育者は機会を捉えて2人には他児の心情と他児から見た2人の行為の意味を説明していたが、理解できないのである。時間をかけて2人の知的な育ちを待つと同時に、諦めずに説明していくしかないであろう。

コウタがシンタに意地悪し仲間外れしたのは、シンタへのライバル意識であろう。2人は4月、5月生まれで何かにつけて競い合い、優位に立ちたいと意識していた。シンタは性格が温和で優しいので、コウタの方から攻撃的なかわりをしたのであろう。そして2人は12月にクラスメートを巻き込んで大きなけんかをし、2人とも大声をあげて泣き、自分の気持ちを正直に叫び、相手に対する不満を解消した。その後、2人は仲良く一緒に活動するようになった。けんかをして気持ちをさらけ出すという激しいかわりもときには意味を持つことが分かる。

アキはしばしば一緒に活動している子どもに身体攻撃したり、相手が悪いことしたように周囲に印象づけたり、相手が困ったり嫌がったりする意地悪したりしていた。自分が思うように活動が展開しなかったり、ごっこ遊びで思い通りの役が取れなかったりしたときばかりではなく、自分の気分次第という勝手な都合でも意地悪したのである。しかし、アキは複数の女児から意地悪だと強く指摘されると、それを受け入れて自分の態度、行為を改めることもあった。これは周囲の子ども達がアキに対して強い態度で言い返したり、反論したりすることで改善されることを示すものである。またユミやエリはアキにしばしば意地悪されてもそれでもアキを求め一緒に遊んでいた。アキは意地悪な面もあるが、おもしろく遊びを進めることができるからであろう。保育者はアキの長所を伸ばすと同時に、周囲の子ども達がたくましく育つように時間をかけて援助していくのが望まれる。

子ども達は一緒に遊んでいる仲間の望ましくない行為や発話を保育者に告げ口していた。特にコウキはしばしば行っていた。遊びの文脈でのことや些細なことでも告げ口に走る様子は、仲間内のルールに従わせるための方略というよりも、自分が保育者に認めてほしい、かまって欲しいという甘えたい気持ちの方が強いことを示唆している。保育者は、あまり告げ口を取り合わないようにしていた。保育者に報告すべきなのか、しない方がよいのかという判断は状況によって微妙であり、言葉で規定できないからである、その微妙な判断の基準を子ども達が経験して形成するのを見守っていくしかないであろう。

いざこざを起こした子どもの間に入って、仲裁する言葉を言ったり、他児が紙を無駄遣いしたのを注意した様子が見られた。その口調と言葉は、養育者や保育者の言い方の模倣と推測された。当初は類似した状況での再現で行ってトレーニングし、次第に新規な状況において自分で判断しながら適切な言葉で調整するようになるのであろう。いざこざ場面における普段の大人のかかわり方が指導になっているといえよう。

3歳クラス期の遊びの特徴

子ども達の遊びの基本はごっこ遊びと言ってよいほど、見立てとふりを伴う活動を日常的に行っていた。この活動では、場所と道具、玩具の準備からエピソードの展開まで、さまざまな知識と技能が必要で、それらを統合して初めてうまく展開できるのである。それで初期には保育者の援助がリードがなければ、なかなか進展しなかったが、次第に子ども達だけでもおもしろく展開できるようになっていった。しかし、なかなかうまく展開せず、途中で崩壊することもしばしばあった。

子ども達は、活動を始める前にも、活動を始めた後でも、よく話していた。活動の枠組みや、役割の設定、どういうように進めるかなどの相談である。言葉によって情報を交換し、相互理解を図ってうまく進めようとし、それができるのである。しかし、それでも互いの利害が衝突して途中で終わることもあった。

また文字は読めないものの、絵本や紙芝居に興味を持ち、他児に読み聞かせるふりをしたりしていた。いろいろな制作も好きで、そうしたコーナーが準備されると、よく取り組んでいた。発達しつつある能力を使って新しい制作に挑戦し、これまではできなかったことが可能になる喜び、自己効力感を感じているのであろう。

女兒と男児で違いが見られた特徴は、以下でそれぞれ別に考察しまとめる。

女兒の遊びの特徴 女兒達はごっこ遊びでは、調理道具や食器、食べ物などのレプリカを使って調理し、食事をし、そこをベースにして仕事や遊びに行っては戻ってきて、就寝したり食事したりするという普段の家庭生活を再現する、いわゆる「家ごっこ」を頻繁に、長い時間やるが多かった。また病人やけが人を自発的に演じて「病院ごっこ」をしていた。その2つの活動をリンクさせて、家の人が病院に入院しているというエピソードを作ることもあった。さらに男児が展開するヒーローごっこに加わって、悪役に追いかけられ、攻撃される弱者の役割をして、ストーリーを展開するなど適切な役割を演じていた。

伝承遊び・対立関係のある遊びでは、数人だけで、「なべなべそこぬけ」という伝承遊びを繰り返し行っていた。これは保育者から教わったものであろう。またオニごっこをしようとしたもののオニが決められずにやめてしまった。子ども達はじゃんけんで決めようというが、この年齢では無理だからである。「かくれんぼう」とまで洗練されていないが、それに近い活動も見られた。女兒達は、対立関係のあるオニごっこやかくれんぼうなどに興味を持ち、やりたいのであるが、経験が少なく自分達だけでは進められないことが示された。

また、女兒達は保育者からもらった折り紙の裏に自分の名前にある平仮名の文字を書いては、お互いに他児に見せていた。平仮名を書くことに興味があり、文字を書くような手指のコントロールが可能になっている。文字を書いて看板を作り、自分たちの遊びの場所に貼って、場所を確保する様子が見られた。

男児の遊びの特徴 男児はごっこ遊びでは、女兒の「家ごっこ」にお父さんや赤ちゃんとして加わったり、男児だけでも「家ごっこ」をした。また病院ごっこやお店ごっこを女兒達が始めれば、それに加わって、活動の展開にふさわしい台詞を言い、ふりをして適当な役割を演じていた。これらは実生活の再現であり、関連した知識やイメージをたくさん持っているので容易に展開できるのであろう。

ヒーローごっこでは、男児は女兒と違ってヒーローになったつもりで、架空の敵を追い、戦うというイメージを持って走り回る活動をよくやっていた。そこではマントを身につけたり、厚紙で作った武器を手を持ちたりするのが参加の印で、相互に事前了解をしている場合が多かった。11月頃では特に役割の分化がなく、参加者全員がヒーローで架空の悪者と戦うパターンのもので、楽しく展開してもエピソードのレパートリーが少なく継続時間が短かった。このパターンの活動ではステレオタイプの展開となりがちで、おもしろさを感じていないようなものも多かった。12月下旬に、活動の展開の成り行きでコウタがオオカミという悪役を担当して、女兒達を攻撃すると、女兒達がアンパンマンに助けを求め、それでアンパンマンという正義のヒーローが登場してオオカミと戦い懲らしめるというエピソードを展開した。悪役が実在してエピソード展開するので新しいストーリーが生まれ、強い興奮とおもしろさを感じたようである。もちろん、悪役を担当したコウタ自身も楽しく感じたし、さらに参加した子ども達のおもしろがって満足した様子を見て、自己効力感を持ったであろう。これ以降、コウタはしばしば悪役を担当するようになった。そしてヒーローごっこをおもしろく展開したり、他児を追いかけるオニごっこのオニのような役を担当したりと、活動をリードする機会が増えていった。他児はそうした様子を見ていたものの、一人もそうした悪役を担当しようとしなかった。実際と遊びの中における役割と区別がはっきりとしないからと推測した。

また、男児達は指で回すコマ回しをよくやっていたが、数人で長く回るように工夫する様子が見られた。年上の男児達がする紐で回すコマ回しに興味を持ち、よく見ていたし、それを借りて自分達でのやろうと挑戦することもあった。しかし、うまくできないことを経験して分かったと、さらに指回しコマに熱中して取り組み、長い時間回そうと競い合うようになった。コマ回しでは自分と他児の技能の習得と向上が目に見えて分かるのがおもしろくて熱中したのである。

男児数人が雨樋で砂場に水を引いて、樋の水の流れにいろいろなものを流す活動を行っていた。これは5歳クラス児が以前にやっていた活動のまったくの模倣である。5歳クラス児が取り組んでいたときは遠くから見ていたのであるが、よく記憶していることから強い興味を持ち、そうすることにあこがれを持っていたのが分かる。水を流しながら樋の位置を調整していたが、行動しながら考えるという、いわゆる思考行動の過程が遊びになっていたことが分かる。

望まれる保育者援助

保育者は家ごっこのコーナーや制作活動のコーナーなど遊びの場所を設定しておいたり、遊びの展開に応じて聴診器やバス停、携帯電話などの道具を作っておいたりした。また子ども達の遊びに仲間として参加して、子ども間のコミュニケーションの手伝いをしていった。ときには子どもに共感したり、いざこざを起こせば関係を調整したり、慰めたりす

るなど多様な援助をしていた。それによって活動が活気を帯びて楽しく展開することが多く、そこで子ども達は遊び仲間として良好な関係を持てたのである。こうした丁寧なかかわりは、援助の基本として望まれるのは言うまでもない。

その一方で、子ども達は一見すると遊んでいるようだが、発話や行為を詳細に検討すると、したい活動が見つからずに時間をもてあまして、単に移動していたり、他児と関わったりしている場合もしばしば見られた。そうした状況においては、子ども達のかかわりはネガティブものになりがちである。持てあました時間を埋めるために、単に思いついた活動しているだけで、おもしろくも楽しくもない。そこで周囲の子どもに意地悪するようなことをしてしまいがちになるからである。

もちろん、こうした暇な時間があるからこそ、新しい活動を生み出すこともある。しかし、なかなかそうはいかないことも多いようである。やはり保育者の直接、間接的な援助が必要といえよう。そのためには保育者がこうした楽しくない活動をしているのに気づかなければならない。保育実践の最中では、一瞬か短時間の状況しか把握できないので、行動と発話に隠された意味を捉えらることができず、遊んでいると見過ごしてしまうようである。本研究で行ったように、子ども達の活動を記録したビデオ資料の分析を通して、子ども達の行動と発話を示す意味を一連の流れの中で総合的に捉え確認ができれば、遊び活動なのか、持てあました時間を埋める活動なのかを判断できる。それに、それに対応した指導と援助を考えていくことが可能になるであろう。

例えば、今回、子ども達はオニごっこのような対立関係のある遊びをしようとしたが、できずに終わった。年上の子ども達の遊びを見て、したいと思ったものの経験が乏しく、具体的にはどうしてよいのか分からないからである。保育者は子ども達が関心を抱き、興味を持ちつつある活動を捉え、それを保育者の方から提案して少しずつ経験をさせ、活動のレパートリーを増やすような援助が望まれる。このような子ども達の興味の先を見越した指導と援助も必要なのである。